

之を大覺と謂ふも全く不是なり。喚んで圓通となすも眼に瞞せらる、二大士の眞體を知らんと欲せば、手を東平に借て鏡を破つて看よ。

大覺禪師。

金錫巫峽を出で、楚水吳雲を踏遍す、泥牛窓櫺を過ぎて、清風明月を吼破す、方に隨ひ感に赴いて祠山の靈神化權を助け、物に應じ形を分つて鏡裡の圓通醜拙を呈す、端的人を驗む、手親しく眼活す、邪禪の輩氣を飲み聲を呑む、老贖翁の遺風餘烈、特々として西來す何の所爲ぞ、箇れは是れ本朝最初教外別傳の師、問世の英哲蜀川の權奇、松源の的派、無明の光輝、初めて本朝に來たつて別傳の師に同じ、邪徒妬害して百の流支を累す、回瀾の砥柱は屹然として高く崎つ、迷情を啓迪して深慈痛悲なり、天

- ① 關關は市門なり。
- ② 自ら謂ふ化身云々、彌勒眞彌勒、分身千百億、時々示三時人、時人不三自識、是れ布袋の作也、布袋の偶多し、然れども此の偶最も人口に膾炙す。
- ③ 政黃牛は千古の逸人なり、僧寶傳十九に傳あり、又羅湖野錄にも逸話を載す。
- ④ 盆を浮云々、大だらひに乗つて、月を見し也。
- ⑤ 偶を留むは坊主が在家に交るは面白からず、矢張り巖谷がよし」と云ふ名偶あり。
- ⑥ 黃轅、惟政禪師は常に黃轅に乗りしなり、双眼風烟を見て老ゆ。
- ⑦ 郁山主、會元六に傳あり、驢馬に乗つて溪橋を過ぎ、まつさかさまに水にはまつて、豁然大悟す、茲に於て我に明珠一顆ありの偶を賦す。
- ⑧ 魚目をもつて明珠となすと

- は、用ひ様、頗る面白し。
- ⑨ 恨めしやと迷ふて出たのか、これでは、悟らぬ前と同じとなり。
- ⑩ 大覺禪師、元亨釋書六に傳あり、此の鏡の事又載す、蓋し斯様の細工せし鏡を所持せられしと見ゆ、さりながら其の當時は之を神秘視せるなり。
- ⑪ 眼に瞞せらるとは、目にだまされるなり、大抵のものは目にだまされるものじや。
- ⑫ 東平云々、仰山東平に住する時、瀉山鏡を送らしむ、仰山提起して曰く、是れ瀉山の鏡か、是れ東平の鏡か、道ひ得ずんば打破せん。紫無語、仰山則ち打破す。
- ⑬ 孤峽は、蜀にあり、大覺は四蜀の人、楚水吳雲云々は、楚の諸禪知識に參せられし也。
- ⑭ 祠山の靈神云々、鶴岡の八幡祠の神來つて斯道を商置せし

289614

下の建長雄基を開祖し、千古萬古福山巍々たり。(建長老の請) 奇なるかな大覺と圓覺と、同徳同風道も亦同じ、震旦扶桑に鼻祖となり、分身揚化して宗風を振ふ。

中 峯和尚。

若し這の老和尚の面前を論せば、則ち山河大地も也た是れ幻、色空明暗も也た是れ幻、三世の諸佛も也た是れ幻、歷代の祖師も也た是れ幻、乃至菩提涅槃眞如實相等一々幻にあらすといふものあることなし、掩光の後三十年、箇の幻にあらざる底を留め得て、塵尾の拂を握つて曲糸床に踞す、焯々煌々たり、堂々巍々たり、勢は西天目山と其の高寒を争ふ、徧く盡大地の人をして瞻仰肅恭せしむるのみ。 萬徳莊嚴圓滿の身、虚空を舌となすも若何が申べん、我れ今免れず強ひて道取することを、佛より已來唯だ一人。

南浦 和尚。

息耕の眞印を佩びて、先聖の途徹を離る、舊横岳の雲に眠り、晚に巨峯の月を翫ぶ、手に塵尾を握つて坐して來機に趣く、崖崩れ石裂く、電卷き

- を云ふ。
- ① 老贖翁は、松源也、松源は晩年耳聾す。
- ② 無明は大覺の師也。
- ③ 別傳師は、達磨大師也。
- ④ 邪徒妬害云々、大覺譏によつて中州に流さる。
- ⑤ 圓覺は達磨圓覺大師。
- ⑥ 中峯諱は明本、傳は増集續傳六に出づ、著に中峰廣錄あり、家藏戸誦す。
- ⑦ 中峰は幻住と稱す、故に幻の字を拈弄す。
- ⑧ 焯々は光明也、煌々は炫燿の貌。
- ⑨ 南浦は大應國師なり、大應錄の下に、塔銘あり、續群書類從の史傳部にも載す、日本二十四流の禪、今日存するものは南浦の一流あるのみ、兒孫浩々地法幡飄々たり、嗚呼偉なるかな。
- ⑩ 息耕は虛堂和尚なり、大應は



星飛ぶ、夫れ之を天子の詔に應じ松源の道を唱ふる大應國師と謂ふ者を耶。

佛燈國師。

道德の光輝日月を揚げ、眼寰宇を空す僧中の傑、宏に玄風を振ふ何ぞ凛冽たる、全機別なり、舌霹靂を轟かして邪説を摧き、魔外僅かに聞いて肝膽裂く、如今林下饜饕多し、大法千鈞一髪を懸く、愁殺するを休めよ、龍峯萬古寥汰に盤まる。

咄者の老和尚、萬般會てせざるに似たり、機に當つて雷奔り電激し、即時に天靜に水澄む、殺人刀活人劍、少處を減じて多處に増す、佛も也た形跡を覓めがたかるべし、閻浮界に此の僧なし、夫れ之を碩大光明今昔を照映する松源の的派天下の佛燈と謂ふ。(白絹を寄せて請ふ)

超然たる標格、大眼目を具す、衲僧の冤家、叢林の軌則、語默才かに離微に涉れば、聖凡共に罵辱せらる、有る時は平地の波瀾を激起し、有る時は參天の荆棘を剷除す、中流の一壺昏衢の明燭、千古萬古高風を仰ぐ、巍峩突兀たり老龍峯。

復庵和尚。

この老漢忒殺だ人情に近かず、釋迦の腦蓋を掲却し、達磨の眼睛を擲す、還つて千七百の公案を將つて、一箇の鐵團圓を打成し、當頭に人に與へて咬ましむ、從教口を下すことの難きことを、扶桑半夜金烏轟る、笑倒す摩霄の天目山。

空岩の空を空盡し、幻住の幻を幻視す、神機妙用並び馳せ、露布葛藤等しく鏝る、端的人を驗む、手親しく眼辨す、假使通身鐵打成するも、擬議せば它に穿一串せらる、象龍遠く風に趁る、稻麻算ふるに足らず、如今五彩大虚に施す、焉ぞ知らん當下に自ら欺謾することを、白雲は長に是れ青山に臥す、流水は從教寒澗に出づることを。

再來の小釋迦、三世的傳の家、魔佛俱に空盡す、眼中争でか華を著けん、幾度か人天推せども出でず、法身爛卻して煙霞に老ゆ。

陳年の爛葛藤を拈出して、人をして藥を嘗め寒氷を嚼ましむ、半輪天目山頭の月、萬世扶桑國裡の燈。(半身)

實翁和尚。

虛堂に喝石岩下に參す、印可に紹既に明白、諸宗を失はずの語あり。

横岳は筑前横岳山崇福寺、巨峰は巨福山建長寺也。

天子は後宇多天皇なり、天皇歸依の篤き、朕百年の後、國師の塔側に瘞埋すべし」と遺詔せらる、故に京都安井の御陵は、國師の塔と並び立てり。全機別、全體の機用諸方と別なり。

饜饕、左傳に財を食るを饜と云ひ、食を食るを饕と云ふ、蓋し飽食安眠の飯袋子を罵るなり。

寥汰、虚空なり、龍峰國師の面目は大虚に滂沛たり。萬般云々、所謂無作の作。佛も也た云々、白絹の贊、故に然か言ふ。

離微、體を離と云ひ、用を微と云ふ、佛見法見と見ればよ

し、巖法師の寶藏論に出づ、

の中流の一壺、河の中流にて船を失すれば、一壺千金に直す。

(欺冠子)

擲睛、つきつぶす也、再出。

笑倒云々、金烏は日なり、天の目じやなど云ふても、金鳥の前では、三文きなりよ。

空岩、復庵の授業師ならん、幻住は中峰明本。

露布、戦功を立つると、勳を書し、竿の先に掛けて、衆に誇示するを露布と云ふ。

手親眼辨す、垂手親切、眼目分明。

稻麻、法華方便品に法を説くもの稻麻竹葉の如し、物の多き喩。

自ら欺謾、虚空に描きし像は似せ者なり。

白雲と流水と同か別。

再來の小釋迦、復庵より上三世、雪岩欽禪師なり、禪師は



眉間の寶劍、當初雲岩に掛け、塗毒鼓の聲、晚年巨福に鳴る、毫端に拈起すれば鳳舞ひ龍翔る、一句全提すれば神號び鬼哭す、從教西來の正宗、灼然として我が掌中に歸するを、叢林謂ふなかれ今寂寞と、萬古の眞風海東に振ふ。

高山和尚

己を行ふことは精嚴にして、氷清霜烈、人の爲めにすることは痛快にして、電奔雷驚、誰か知る靈洞高風の別なるを、百億の須彌も争ふに足らず。

明窓和尚

寒猿枯樹に嘯き、老鶴喬松に立つ、物外乾坤窄く、眼中今古空し、調高うして賞音少なり、越格亦超宗、西來的傳の傑、明覺大禪翁。

虎關和尚

人は言ふ再生の音、尊者と、當年の遠録公に孰れぞや、誰か識らん東山の左邊底、光前絶後宗風を振ふ。宗風を振ふこと何の窮かあらん、龍淵の支派天下に遍し、一々收めて海藏の中に歸す。

一路和尚

萬年名山の主盟となり得て、千聖頂額の一著を提起す、桑田の家法を蕩盡して、松源の正脈を流通す、喝下に崖崩れ石裂け、機前に電激し雷奔る、三尺の黒蛇長に握にあり、擬議すれば它に一口に吞まる。夜深くて落月寒泉に印し、日暮れて歸禽翠烟を破る、眞如の籠罩を脱得し去つて、四稜場地に安眠を打す、安眠を打して氣天を衝く、誰か知らん淵默雷轟の處、通玄未了の縁を了卻すること。

石天和尙

教海を瀝、軋し、禪關を撈透す、棲雲庵裡、凝寂幽閑、萬古潛溪流れ竭きず、龍淵處々に波瀾を起す。

足庵和尚

是れ眞に陸地に舟を行る底、三たび名藍によつて法雷を振ふ、迷徒を度し盡す知んぬ幾許ぞ、夢中の記前太だ奇なるかな、太だ奇なるかな疑猜を絶す、本通玄峰頂より來る。

月江和尚

神宇爽拔にして、眉宇古厖なり、宗通説通や、屢は戶外に歸す、獨照

仰山小釋迦の再來と稱す。

① 藥は苦きもの、氷は寒きもの、半輪の月は、半身を標す。

② 眉間の寶劍、双眉の間に、しやんと突立ちし寶劍なり、雲岩は、下野那須の雲岩寺なり、弘安四年九月二十六日に瑞世す。

③ 高山は、法燈國師の法嗣、名は慈照、建仁に住す、靈洞院は其塔所なり。

④ 明窓、大覺の法嗣、名は宗鑑、建仁十八世。

⑤ 西來、大覺なり。

⑥ 虎關、東山の法嗣、名は師鍊。

⑦ 音尊者、甘露寂音は眞淨に嗣ぐ、林間録、石門文字禪、冷齋野話、禪林僧寶傳等の著あり、遠録公は、浮山遠禪師、偈頌の能手也。

⑧ 左邊底、南堂靜禪師なり、見地越格にして、師兄圍悟佛眼の徒を凌蔑す、故に虎關に疑す、蓋し風影的切ならざるも、虎關の東山照公に嗣法せるより使用せし也。

⑨ 龍淵、聖一國師の師無準禪師なり、海藏は東福にあり、虎關の開基也。

⑩ 萬年名山、眞如寺也。

⑪ 桑田、淨智に住す、名は道海、蓋し一路の師なり。

⑫ 夜深云々二句、一路没後の追憶より來る。

⑬ 四稜場地、四角の木材の地に墮在する也、安定不動の意あり、稜は角、場は墮也。

⑭ 通玄、通玄庵は桑田の塔所也。

⑮ 瀝乾は、したらし、かわかす也、棲雲庵は蓋し石天の寺、潛溪は聖一國師の法嗣、龍淵は徑山方丈の額、無準派を指す。

⑯ 大覺、桑田、靈巖、足庵祖師。陸地に舟を行るは、絶大の力



遍照や、籌は室中に滿つ、慈を興し悲を運らして老幼悦服し、邪を撃ち異を摧いて魔外蹤を潛む、夫れ之を曹源的派の遠孫、大雲入室の眞子、月江大禪翁と謂ふものか。

一 月僅かに出で、千江影寒し、是れ佗の面目、天上人間、叵耐なり曹源の一滴水、端なく平地に波爛を起す。

昔し典牛、策禪師の福慧に速ばざるを以てして憂ふ、策曰く、「學者は惟だ己眼の明かならざるを恐る、己眼若し明かなれば、獨り聖僧に對して飯を喫すと雖も、又何ぞ慊たらん」と、あ、策公の一言、我が師兄柏巖公の瘞處を抓著す、然りと雖も、惜むらくは、當初叢林に、好一箇の主盟に閑卻することを、如今遺像を拜瞻して、之が爲めに歎息す、其の高弟儼侍者、贊を請ふ、贊に曰く。

神采爽拔にして、面孔儼然たり、已に佛燈の密印を佩ぶ、寧ろ大覺の正傳を忝めんや、胸中毫末を掃除して、量外大千を包裹す、東寺折牀の閑熱を冷笑し、法昌泥像の因縁を仰慕す、道聲の區域に喧しきあつ

て出で、人天に應ずるに心なし、萬機泯絶す華藏界、一室高く眠る竹澗の邊り。

大 虎和尚。

江上の千山雪晴れて後、樓頭午夜月明かなるの初、吾が兄の面目只だ這れ是れ、何事を丹青太虚を繪く。

義堂和尚。

面目嚴冷にして、神宇玲瓏たり、學海枯竭し、智境掃空す、金剛王寶劍を提起して、是れ魔是れ佛、踪を潛むべし、夫れ之を東山下の左邊底、跳竈跨釜的骨の孫、義堂老禪翁と謂ふ。

無 住和尚。(雄書記の請)

簪纓の雄族、宗門の英靈、將に謂へり光を韜み復た彩を鏤ると、胡爲ぞ増々法燈の明を發する、似ては即ち不住、住は即ち寺ならず、驚峯の眞規、少室の妙旨、箇の老漢の全身を看んと要せば、且つ華の鐵樹に開くる春を待て。

一口に平吞す三世佛、妙高孤頂月明の天、應無所住而常住、大法燈

最なり。(論語)

夢中の記別、葦航和尚の夢に大覺禪師、桑田と麟沙彌を載せて、陸地に舟を行る、桑田大覺に言ふて曰く、伏して乞ふ、此沙彌に住山せしめよ、大覺曰く「諾、云々。」

通玄前出。

一山の法嗣。

一 旣は眉の太きなり、人老年に至れば、眉甚だ麗也。

二 籌室中に滿つ、優婆塞多、一人を度する毎に、一籌を石室に置く、後に籌石室に滿つ。(傳燈一)

三 大雲、寧一山なり。

四 一月千江、月江の名を打せるなり。

五 曹源、名は道生月江五世の祖なり。

六 典牛、質庫裡の典牛と云はれし人なり、九十餘にして法嗣、塗毒の策禪師を得。(黃龍下)

一 獨り、會下に、一人の參徒なきなり。  
二 東寺折牀、湖南東寺の如會禪師、學徒蠅集して僧堂内の牀榻爲めに折る、故に江湖稱して折牀會と云ふ。(傳燈五)  
三 法昌泥像、洪州の法昌猶遇禪師、行脚の僧一箇もなし、十八羅漢の泥像に說法す。(會元十六)  
四 華藏、莊嚴世界は華嚴八に出づ。  
五 大虚、名は元壽、佛燈の法嗣、下の實翁に答ふる書に、壽兄は先師最も鐘愛の子、海外に孟浪すること二十一年とあるもの是也。  
六 吾が兄、大虚。  
七 丹青太虚を繪く、赤やら青やらで大ぞらを汚して何にする、七竅塞つて渾沌死すじや。

聖一國師、鐵牛圓心、義堂知



の光萬古に傳ふ。(妙高に住す)

仲 聞和尚

松源の遠裔、桑田の的孫、遼天の閑鼻孔、鐵崑崙を笑殺す、靈虎山頭に高く坐斷す、凜々たる威風軋坤に振ふ。

無 極和尚

皇室の玉葉金枝、叢林の砒霜鳩毒、學海の波瀾渺瀾たり、何ぞ曾て元字脚を留めん、天龍に嗣いで天龍を肩はず、果然として超宗亦越格、靈龜孤頂太だ嗟峨たり、須彌を壓斷して碧落を衝く、夫れ之を高峯直下、的骨の孫、佛慈禪師眞の面目と謂ふ。

頂 山和尚

最 軟頑の時、堅うして鐵に似たり、諸訛の處に到つて、坦かなること剛の如し、巍々として坐斷す、峯の頂、衆山を下視して眼轉々青し、自ら甘んじて敢て人の爲めに出でず、出づれば它の魔外をして驚かしむ、一榻儻然として久しく淵默す、誰か聞かん徧界怒雷の轟くを。

俊 翁和尚

俊翁老子は吾が端友、談笑懐を忘じて歲月深し、別去追慕に堪へざる處、忽ち遺像を瞻て益々心を傷ましむ、心を傷ましむるを休めよ、玉峰 萬古翠千尋。

靈 叟和尚。(蔣山に住す)

面目巉岩、器材瑰璋、一句全提半提、惡聲千里萬里、無明の種草新に生じ、佛燈の光焰將に熾ならんとす、人は言ふ寶公再び蔣山に現すと、我は道ふ活龍誤つて死水に下ると、再門雷轟を欠き、叢社公議を喪す、枉げて丹青を把つて太虚に畫く、孤風凜々として來つて未だ已まず。

孤峰の徳長老

松 老い竹癯せ、氷枯れ霜烈し、胸中の古今、脚底の吳越、列祖の重關、七通八達、立機

信。

- ① 東山下の左邊底、東福寺也。
- ② 跳躑跨釜、親まさりの子と云ふこと也、龜の上に釜あり、釜と父と音同じ、又跨躑兒とも用ふ、意同じ。
- ③ 無住和尚、華山院家忠の裔也、繡綺を捨て、毛衣に従ひ、由良の法燈に法嗣す。(本朝高僧傳)
- ④ 似は即ち不住云々、是れは船子夾山の答話也、船子問ふ「何れの寺にか住す、夾山曰く、「似は即ち住ならず、住は即ち寺にあらず、云々、蓋し寂室禪師は、住するに似げ、住とは云へぬ、無住の住なればなり)、住したならば、寺ではない、(無寺の寺なり)の意に用ひられしなり。
- ⑤ 驚峰、法燈國師の住處。
- ⑥ 全身云々、蓋し牛身の像なり、故に然か云ふ。

① 妙高、無住洛西の妙高寺に住す。

② 仲閑は、桑田の孫、甲州靈虎山に住せしなり。

③ 遼天、鼻孔遼天は、鼻のあなが、天迄とほる。

④ 無極、順徳天皇四世の裔、夢窓國師に嗣法す、夢窓は高峰顯日の法嗣。

⑤ 學海の波瀾、宗鏡錄抄三十卷無極錄の著あり。

⑥ 天龍云々、師夢窓に嗣ひて、而も嗣法の香を焼かす。

⑦ 靈龜、天龍寺の山號、嵯峨にあり。

⑧ 頂山、桑田の孫、靈巖の子。(古抄)

⑨ 柔和の中、峻棘の機鋒あり。

⑩ 士峰、富士山に擬す、大士山は備前にあり、寺を慈廣寺と云ふ、即ち頂山の開創に係る。

⑪ 俊翁、江州河井の高福寺の開

⑫ 玉峰、高福の近くにあり、山の名ならん。

⑬ 靈叟、佛燈法嗣、蔣山は豐後の萬壽寺の山號。

⑭ 寶公云々、寶誌公、七歳にして鐘山の僧儉によりて得度す、蓋し蔣鐘通するを以て、寶公の再現とす。

⑮ 禹門云々、靈叟の如き大徳を、蔣山の如き小刹に放置するは、龍門の瀑の音なきが如く、全く公論にあらずと。

⑯ 孤風凜々靈圖より來る、已ますは不斷に吹き來るなり。

⑰ 松老い竹癯せは、容貌也、氷枯れ霜烈しは、禪心也、胸中に古今の典墳を藏し、脚底には吳越の雲を踏破す、蓋し孤峯は入唐せし人。

⑱ 蒼翠、山高き貌。

⑲ 圓機、温州の人、永嘉大師の女弟。



を收拾して、退いて密に藏る、烟雲は唯だ半腰を没すべし、天外の孤峯轉  
齊しゅう 翠すい たり。(半身)

南光の開山觀長老。(尼なり)

氣は丈夫を壓し、眼寰宇を空す、手に黒蛇を握つて、風を打し雨を罵  
る、圓えん 機き 無む 著ちやく も也た低頭す、山は瑞すい 雲うん を帶お ぶ千萬古。

昌快大徳。

天龍直指の玄に參得して、寥々として盡日自ら安禪す、遺芳餘烈何の極  
かあらん、桂けい 子し 蘭らん 孫そん 億いっ 萬まん 年。

前備中の太守佐々木せいこうぜんがく の西公禪閣。

皇家一十四葉の龍りゅう 胃い、武門百萬軍中の羽儀、欽すべく畏すべし、

惟れ徳惟れ威、忠義の精は日月を貫き、英雄の氣は虹霓を吐く、況や是れ  
圓顯亦方服、佛魔も須らく一頭を放はな つて低るべし。

妙喜禪尼。

夙に信根を植ゑて、心空門に遊ぶ、功徳の母となり、桂子蘭孫あり、慈容影は現す鏡中の人、虚  
幻華は開く劫外の春。

① 無着、年三十にして得度、諸方に參じ、後大慈に嗣法す。  
② 瑞雲、蓋し南光の山號ならん。  
③ 桂子蘭は芳香を放つ、好兒孫の標語。  
④ 佐々木禪閣、江州觀音寺城佐々木頼綱也、法名崇西、崇光寺殿と號す、永源寺の開基檀越氏頼の祖父。  
⑤ 皇家十四葉、佐々木源氏は宇多天皇より出づ。  
⑥ 龍胃は王孫、羽儀は天子の羽翼となつて、威儀を助くるなり、欽は恭敬なり。  
⑦ 頭を放つて低る、一手をゆるして、低頭すべしと、放は容許也。

自賛 (合計三十二首)

秀格禪人請。

大廈高堂は我れ分なし、松根石上に家風を逞しうす、茫々たる塵世誰か知己、西山に去つて亮  
公を問はんと欲す。

聖濟大師請。

水中の月影、華裡の春容、虎を畫いて狸と成し、蛇を喚んで龍と做す、  
甜瓜棚上の苦胡蘆、徳山臨濟も皆し 盧都。

莊福の天關長老請。(圓相中の半身)

幻身全からず、神光虛圓、一生甘じて自ら林泉に韜晦す、誰か是れ  
吾に替つて靈燄を發して、佛燈再び人天を照すを得ん。

道安侍者請。

心光不昧轉團圓、且喜すらくは安を覺めて能く安を得ることを、箇  
は是れ本來眞の面目、夜深けて山月秋を照して寒し。

① 亮公、西山の亮公は馬祖下の入禪中の逸隱、又宋代にも西山亮あり。  
② 大姉大師、通用。  
③ 皆盧都は、古人往々使用する處、方語也、口を閉ぢて言はざるを云ふ。  
④ 誰れか是れ吾に替ふ云々、斯の如き人は、天關長老に非らずして、誰ぞや、天關は佛燈の法孫。  
⑤ 團圓、蓋し圓相中の像、安を



曇心庵主請。

● 心や心や心や、夜來古月霜林を照す、禪や禪や禪や、無角の鐵牛飛んで天に上る、是なるときは眞我鏡像たり、非なるときは闇梨全く老僧、黒蛇三尺閑に手にあり、乾坤を吞却して曾てせざるに似たり。

元奇禪門請。

清奇閑淡たり嶺頭の雲、奔激潺湲たり澗底の水、老夫全身を隠すところなし、五彩空に畫いて還つて似す。

慈源大師請。

誰か麗妙の紫金襦を將つて、愚夫が赤肉團を包裹す、恐らくは傍人に看て便ち笑はれん、如かじ送つて舊青山に在かんには。

日進禪人請。

退いて進むことを忘じ、默爾として玄を混す、寥々終日、孤榻儵然たり、生平誓つて人世に游ばず、只だ白雲峰下に在つて眠る。

宗仁禪門請。

丹青虚空を繪く、全く似て全く似ず、身に華袈裟を披し、手に竹篋子

覺めて安を得ば、二祖安心の意を取つて、道安侍者の安を打す。

① 心心心は、曇心の心を打する也。

② 黒蛇三尺、竹篋子を持てる像。

③ 老夫全身を隠すなし、上の二句は、寂室禪師の眞面目、露堂々の處、故に全身を隠すなしと。

④ 慈源、一絲の行狀に、除體女慈源、岸本村の肥沃の田を施して齋粥の資に充つ、即ち此人なり。

⑤ 此様に、金襴掛けて、人前へ出づるのは、いやじゃはづかしい、早くもとの古巢へ還しておくれ。

⑥ 飾らず、誇らず、天真爛漫。破家、身代を、禪にふると云ふことなり。

⑦ 傑秀、秀侍者の秀を打す、其様の人、わしではない、秀

を握る、好一箇の長老、來機に赴かんと欲する底、林下の癡頑叟、幾時か敢て爾を得ん、這般の大模様、我れらの深く恥づるところなり、汝今收ち去つて人に示すことなかれ、是れ乃ち余が爲めに道義を存するなり。

松嶺秀侍者請。

咄この衰翁、禪も也た參を缺き、道も也た學を絶す、目を雲霄に縦にして身を林壑に寄す、咸く言ふ大覺、破家の孫、寔に是れ佛燈跨釜の子なりと、若何ぞ箇の傑秀の人を得て、吾が宗の已に煙墜するを扶起せん。

翼姪請。

似たることは則ち固に似たり、是なることは則ち未だ是ならず、相を離れ名を離れ、彼にあらす此れにあらす、歷劫にだも何ぞ曾て全體を現せん。

月庵居士請。

全身半身、日月月面、鏡上の幻塵、空裡の閃電、而今老いて矣圖畫に歸す、依然として早く是れ新羅の箭、退藏癡憨を放にす、誰か言ふ住院を拒むと、雲に眠ることは知んぬ幾年ぞ、山を看て長へに倦むことを忘る、我れらの活業は只だ恁麼、一生擔板自便を愛す。

淨仁禪門請。



林泉を家となし、猿猴を伴となす、眼中に烟霞あり、胸次に涯岸なし、從來智體全く具らず、宜なるかな幻影も亦半を缺くことを、嘆、渠は是れ誰ぞや、天地の間只だ一箇疎慵癡頑の寂翁老漢。

慧鏡禪者請。

幻化の空身、鏡像水月、百年は一夢、終に變滅に歸す、爾儂我をして畫圖に入らしめて、久しく烟霞山水の窟に住せしむ。

聖玖大師請。

利を視ることは塵埃にひとしく、名を懼るることは桎梏に同じ、殘月は遙峯に落ち、孤雲は空谷に老ゆ、諸方浩浩として高禪を説く、渠、儂が脚を伸べて眠るに孰れ。

元杲禪人請。

杲日天に麗き、清風地を市る、徧界藏さず、面目現在す、若し眼を頂門に具する人にあらずんば、如何ぞ箇の全體を見得せん。

元綸侍者請。

道の擔板漢、甘んじて岩叢に老ゆ、一榻默坐、萬緣皆空す、住院を勸むるの言を聞いては、耳を洗

ふにちかきも、猶ほ宗教の替るを見て、之が爲めに胸を搥つ、有時江湖夢に入り、夜寒ふして月短篷を照す、意に稱ふ金鱗直鉤に上る、絲綸掣き斷ふ白蘋の風。

超曇大德請。

參横り月落つ湖山の曉、全く本來の清淨身を露す、丹青汚卻す虚空の面、冷地從教人を笑倒するを、人を笑倒す誰か眞を識らん、試に威音劫前より看よ、曇華方に綻ぶ一枝の春。

養侍者請。(尼、松下石に坐す)

青松を屋廬となし、苔石を牀、筵となす、但佳山水を得て、居を求めて幻軀を養ふ、平生深く恥づ人に識らるるを、豈料らんや今朝畫圖に入らんとは。

守顯禪人請。

幻眞は眞にあらず、夢境は何の境ぞ、一彈指頃、百年の流景、盡十方空の諸賢聖、吾と同じく現す鏡中の影。

彌天釋侍者請。

身に釋服を披し、手に虻心を掬す、方外に獨歩し、叢林を眇視す、只だ

①胸を搥つは、手をもつて胸を搥つて嘆する也、支那人は泣くことも上手故、斯かる様子をすると見ゆ。  
②金鱗絲綸は、元綸に響く、釣糸を掣くと、白蘋の風を兩方へ吹きちぎる、英靈底の作用也。  
③參は、二十八宿の一也、星の名。  
④冷地云々、冷地は、かげなり、人知れず窺ひ見ると、誠におかしなものじや、おへその皮よ。  
⑤曇華、千年に一度咲く、優曇華なり、超曇のつらぎ、いや和尚の姿なり。  
⑥筵、牀也。  
⑦已下の三偈皆釋の字を用ふ。



風高月皎きを食つて、都て水寒く雲の深きを忘る、這般一箇の贗浮圖、古往今來覓むるに也た無し。  
 無相<sup>①</sup>を真相となし、無門を釋門となす、蹤跡を尋ねんと擬欲せば、水中に月痕を探る、畫けども成らざる時正に好し看るに、全身逼塞す盡乾坤。(預め生繪を寄せて請ふ)  
 高く釋迦を揖して、彌勒を拜せず、流行も也た得たり、坎<sup>②</sup>止も也た得たり、一生獨り自ら娛む、水色と山色と、嫌ふことなけれ幻質の完全ならざるを、且つ愛す眉は横たはり還た鼻は直なることを。

定巖の侍者請。

畫工我がために腰を沒し了る、恰も似たり當初立雪の僧に、只だ是れ曾て心法を覺めず、安閑終老して人の憎を得たり。

列岫の科侍者請。

胸<sup>③</sup>に雲夢を呑んで還た吐却す、選佛場中に甲科を占む、一句機先に曾て會得す、國師の三喚更に如何、笑ふに堪へたり山前の老農父、他に描畫せられて凌烟に上るを、枯木花開くは是れ今日、任教空體の完全ならざることを。

堅卓禪人請。

瀑泉の飛ぶを貪り觀て、盤陀の石に獨坐す、絶えて人の往還するなし、幸に今昔を話するを免る、一片の雲は百衲の衣を添へ、萬重の山は雙眸の碧に點す。

龍巖の汕長老請。

香を焚いて默坐す古岩の陰、最も愛す青山の深うして更に深きことを、同參の木上座を除却して、誰か知る這老此の時の心を。

英顔侍者請。(半身)

古道の顔色、今時の遺民、一法不存、若何んが爲人せん、憐むべし石鞏の閑弓箭、三平半箇の身に射中することを。

霜林の果侍者請。

甚の眞常體、全からざるを管せん、誰か知る鼻孔遼天を恣にすることを、祖庭將に謂へり秋已に晩ると、且喜すらくは霜林結果の圓かなるを。

靈仲の英侍者、雋彥絶綸、江湖に響を播く、忽ち平生嗜むところの奇知妙解を棄て、而も山中に來つて、單々に只だ自己を洞明せんことを圖る、厥の志良に以て嘉すべきなり、一日余が衰質を繪いて贊を求む、余謂つて曰く、「我が箇の幻化の空身を願みるに、百醜千拙なり、何の一件の贊すべき底の事あらんや」と、然も尙ほ懇に請うて

① 白絹の贊なれば斯くの如し。  
 ② 坎止、坎は八卦の一、一陽二陰の間に陷る、坎險の相、凡そ人、坎險に遇うては止まるべし、之を坎止と云ふ、流行は放行、坎止は把住なり。  
 ③ 安閑無事、無用の長物。  
 ④ 胸に雲夢の句は、岫の字を響かす、選佛場の句は、列の字を隱す、雲夢は湖の名、今は平地となる、揚子江の西にあり。  
 ⑤ 凌烟は、開の名、唐の太宗、功臣の像を開上に畫く、之を凌烟の功臣と云ふ。

① 二句、畫像の模様。  
 ② 百衲衣、鶉衣百結の意、百衲も綴つた衣。  
 ③ 禪師七十四歳の、貞治癸卯の中秋に、龍岩瑞石を訪問す、前に詩を載す。  
 ④ 三平義忠禪師、石鞏に參す、石鞏曰く、「三十年弓を張り、箭を架して、只半箇の漢を射得たり。」(傳燈)半身の像。  
 ⑤ 誰れか知る云々、畫像は半分缺けて居ても、鼻の孔は天に達つて居る。



已ます、之を奈何ともするなし、聊か二十八の閑言を綴つて、之に還すと云ふ。  
衆肉叢中に一麟を得たり、岩に隈する老衲孤貧を慰す、因つて思ふ  
歳晚天寒の日、少室峯前立雪の人。

隣松長老請。

咄者の老漢、漆桶不快、人となり百醜千拙、渾て一智半解なし、只だ  
飽餐安眠を圖る、白雲の邊り青山の外、是れ什麼の報縁ぞ、幻身完全なら  
ず、完全ならざるも卻つて 周圓、月は中秋に到つて光天に滿つ。(月夕)

荆隱瓊侍者請。

咄箇の老寂、全く準的なし、貴に逢ふても旨て瑠瓊を重んぜず、  
賤に遇うても奚んぞ亦瓦石を輕んせん、少きを多得て多きを失し、寸を進め  
て尺を退く、天壤に獨立し、今昔を眇視す、兩鬢霜は寒し八十の秋、三衣  
染め盡す千峯の碧、何れの時か手裡の黒蛇兒、白日に龍となつて霹靂を  
轟かさん。

了達禪人請。(位牌)

閑名幻質を離れ、汝に隨つて丹山に入る、壁間に掛在して看よ、同居渾て一般。

①隈は倚なり。

②二祖雪に立つて腰を没す、蓋し又半身の像。

③隣松は、備後永聖寺の山號、知庵元周禪師ならん。

④漆桶不快、不快不會と同じ、同音也、物の道理の分らぬを漆桶不快と云ふ、福州の郷談。

⑤周圓、元周の周の字を打す。

⑥準的なし、氣まぐれて平準とれぬ。

⑦瑠瓊、美玉の名、二句準的なき處。

⑧二句、活潑々地、寂翁寂ならす。

⑨閑名、牌紙に書せし名なり、丹山は丹波。

⑩壁間に掛在すは、古人の牌は紙に書して壁間に掛く。



# 國譯永源寂室和尚語錄卷之三

## 小佛事 (合計三十四篇)

飯高山に觀音像を塑す點眼并に安座。  
 ① 飯高山に觀音像を塑す點眼并に安座。  
 ② 聞を返し聞盡きて盡も亦空す、所以に根門一々無功、塵々三昧、刹々圓通、千江の月影、萬卉の春容、惟れ道人久、機巧妙にして爛泥團裡に逸想を寄す、唯だ手の翻覆の際にあつて、端嚴殊特の相を出現す、但だ人天の瞻仰を増すのみにあらず、也た魔外をして退いて答嗟せしむ、將に紫金山を回さんとす、蓋ぞ青蓮華を瞬かざる、我れ大地の諸衆生を見るに、本來誰か寶目を具せざらんや、錯つて色空明

- ① 飯高山は永源寺の山號也。
- ② 聞を返す云々、觀音修業成熟の處を云ふ。
- ③ 塵々三昧、雲門云く、「鉢裏飯桶裏水」と。
- ④ 千江の月、古句に曰く、「千江水有り千江の月、萬里雲無し萬里の天」と。
- ⑤ 道人久、頂山和尚の弟子久庵主なり、古抄人冠注本には、此の久は悟都官のこととしてあるが、是れは多分誤りであるが、一絲和尚の行狀に、舊

安置の觀音像と新作(悟都官の作)の觀音の像ありて、俱に師の供養の語ありとしてある、此佛事篇の中に成程觀音の點眼二篇あり、是れより推せば、古き方は久庵主の作、新しきは悟都官の作なるが如し、悟都官は、元より歸化せし佛工と傳ふ、冠注は、此點眼を悟都官の像と見しより悟都官頂山に投じて僧となり、名を久と改むと云ふ如き、強説を生ず。

暗等把つて、妄りに自ら一翳に翳卻す、願はくは大士の正法眼に同じく、頓に眞觀清淨觀を得ん、縦ひ虚空消殞の日あるも、巍々として坐斷せん飯高山。

### 中峯 業海兩和尚の點眼 入塔。

① 多子塔前、天目山巔、錯をもつて錯につき、傳なきを傳となす、這般の沒面目底、即今分座儼然たり、既に是れ狹路に相逢ふ、免れず佗の頂門に向つて、金剛の眼睛を點出すること、普く盡十方法界の情と無情と、同じく大光明を放ち去らん、大衆を召して云く、「好生觀」筆を以て左邊に點じて云く、「金烏啄破す瑠璃の殻。」右邊に點じて云く、「玉兔揆開す碧落の天。」

### 永源寺觀音の點眼安座。

國譯永源寂室和尚語錄 卷之三

- ② 吞嗟、痛惜又歎也。
- ③ 紫金山、峻嚴義疏九に曰く、「如來將に法座を罷めんとす、師于牀に於て七寶の几を攪り紫金山を廻り、再び來つて凭倚子普く大衆に告ぐ」と。
- ④ 寶目、同上義疏六に曰く、「二目、三目、四目、九目乃至千目萬目、八萬四千の清淨の寶目」と。
- ⑤ 眞觀清淨觀、法華普門品に見ゆ、眞は空觀、清淨は假觀也。
- ⑥ 業海は中峯の于なり、甲州天目山樓雲寺の開山也。
- ⑦ 入塔、百丈清規に、全身入塔及び靈骨入塔あり、蓋し塔廟に入るの義なるべし。
- ⑧ 多子塔、辟支佛論に云ふ、「王舍城の大長者男女各三十人を生む、適一林間を過ぐ、人の大樹を斫るを見る、枝柯條葉繁美盛茂、多衆をして引かしむるも出す能はず、次に小樹

を斫る、枝柯少くして引くに容易なり、之れより悟入す、入滅の時眷屬多子塔を立つ」と。
- ⑨ 將錯云々、世尊多子塔前に至り、摩訶迦葉に座を分けて座せしむ、僧伽利をして之れを圍ましめ、遂に告げて曰く、「我正法眼藏を以て汝を密付す、汝當に護持して將來に傳付すべし」と。
- ⑩ 金剛の眼睛、大慧武庫に曰く、「師湛堂和尚示寂により、無盡居士に謁して塔銘を求む(中略)、師曰く、何の眼睛と問ふ、無盡の曰く、金剛眼睛と、答へて曰く、若是れ金剛眼睛ならば、相公筆頭上にあリ、云々。」
- ⑪ 左眼は黄金の色を放ち、右眼は白玉の光を放つ、是れ本來具底の眞面目也、是れでこそ、眞の點眼供養がすんだ。



① 補陀の圓通大士來や、梵相端嚴にして人天敬畏す、新に清淨の寶目を開いて、靈光處として至らざるなし、甚の冥府幽都とか説かんと、法界皆煌々燐々たり、之を正法眼藏と云ひ、亦大圓鏡智と名く、夫れ吾が大聖薩埵は、昔し久遠劫の前に在つて、聞思修より三摩地に入つて、百千甚深微妙の諸大三昧を證す、所謂大解脱三昧、大寂靜三昧、大智惠三昧、大慈悲三昧、大施無畏三昧等是れなり、只だ盡大地の衆生、此の如きの三昧を具足すと雖も、迷妄に蔽はれて、現成受用するに由なきを感むが爲の故に、已むを獲ざるに迫つて、區々として起ち、箇の晨鐘暮鼓、鴉鳴鵲噪と、簷頭の雨滴と、潤下の水聲を把つて、腸を傾け膽を瀝らして、激揚揭示す、汝等諸人、甚麼として、

② 好生觀、天晴れ能き見もの也と云ふが如し。  
③ 玉兔、月の異名。  
④ 碧落、あなぞらに同じ、度人經の碧落の註に、「東方第一の天に碧霞遍滿せるあり、之れを碧落と云ふ」と。蓋し好箇の眼睛を云ふ。  
⑤ 是れは、悟都官作の像の點眼ならん、此像新に成りて、久庵主作の觀音像は龜背に收藏す。  
⑥ 補陀の圓通大士、觀音大士也。  
⑦ 冥府幽都、書の樂典に出づ、今云ふ地獄也。  
⑧ 大圓鏡智、萬德圓滿顯くる所なき佛智也。  
⑨ 應身也。  
⑩ 法身也。  
⑪ 報身也。  
⑫ 江湖集に、「金剛の正體、是非の外、鴉鳴鵲噪子時なし」と。  
⑬ 會元、順德禪師章に、「師問ふ

門外何の聲ぞ、曰く、雨滴の聲と、師云ふ、衆生顛倒已に迷ひ物を逐ふ」とあり。  
⑭ 父母所生の耳根と云ふに同じ。  
⑮ あゝ、歎聲也。  
⑯ 諸國土云々、法華普門品に、「十方諸國土無利不現身」と。  
⑰ 二首あり、何れを使用せしやを知らず、前篇は居士の作略を露すに適し、後篇は送行の時節に切なり、蓋し使用は一にして足れり、而も餘の一篇も捨て難く、俱に集中に載せしものならん。  
⑱ 拈香、人として信なければ其可なる所をしらず、拈香は信を現す所以なり。  
⑲ 龐翁、馬祖大師の法嗣、衡陽縣の人也、摩詰は佛在世の人、維摩詰、維摩羅詰といふ。在家にして良く菩薩の行を修す。

恰も娘生の耳根を塞斷するが如くに相似たるや、於戲、今朝瑞雪溪山に滿つ、限りなき風光、正に好し看るに、十方の諸國土に遊び徧きよりは如かじ歸り去つて、永く安閑ならんには。

① 當麻禪門の拈香。

塵に處して全く絶塵の作あり、無髮の龐翁摩詰の流、臺榭寥々として歳云に暮る、木人石女も也た愁を生ず、丈夫猛烈の漢、全機自ら同じからず、生死の控勒を受けず、寧ろ涅槃に羅籠せられんや、便ち與麼に承當するも、兎子何ぞ曾て窟を離れ得ん、任ひ不與麼にし去るも、徒だに死蝨を弄して活龍となす、畢竟作麼生、昨夜須彌頭倒卓す、天明に跣跳す太虛空。

又。(佛成道の日)

夫れ以みれば、正覺山中に星の燦然たるを見る、歷劫未明の事、忽爾として現前するを得たり、海印三昧を以て、一印に印定して、大地の群生をして頓に蓋纏を出でしむ、四生九類を論せず、甚の十聖三賢とか説かん、一味平等にして、密に中邊なく、幻生幻滅して、一來一去す、

② 臺榭、土高きを臺といひ、木あるを榭といふ。  
③ 控勒、束縛又は羈絆などに同じ。  
④ 羅籠、二字魚鳥の捕へられて拘束を受くること、學者の小見に囚はれ偏局に陥つて自在ならざるの意に用ひらる。  
⑤ 正覺山中云々、大慧普說下に「佛初め正覺山前に定より起きて明星を見るに、因つて忽然として悟道し便自己本來の面目を見る」とあり。  
⑥ 海印三昧、性海心印の三昧と云ふ意にして、人々箇々具足の心印にして、海印三昧の獨露眞常なり、譬へば如來全身の如し、諸佛諸祖一毛を損せず、海印三昧片滴を讓らず、汝と吾と亦かくの如し、即ち此法滅する時吾滅と云はず、前念後念、念々相待せず、前法後法、法々相對せず、是れ



月は寒水に沈み、雲は青天に掛る、是の如く領略し將ち去らば、親恩佛德酬報周圓ならん、其も或は未だ然らすんば、雪を帶ぶる梅華初めて玉を破り、清香透過す竹籬の煙。

拈香。

大日本國、備前の州、藤野の保の居住、菩薩戒の弟子、某、今亡室某七周の忌辰に値うて、大士山慈廣禪寺に就いて、滿堂の清衆を拜屈して、預め七箇日を卜して、大乘の眞詮を取つて、且つ繙閱し、且つ繕寫す、帑を啓き金を揮つて、供贖を營辨す。加以、冠を裂き緇を披し、方に三寶の數に預る、追嚴の誠至、焉より大なるはなし、仍つて某に命じて、香を焚いて諸聖に獻じ、偈を説いて證明をなさしむる者なり、一たび芙蓉城内に向つて遊び、光陰倏忽たり七周の秋、從教地を動かし悲風の起るを、山は自ら安閑、水は自ら流る、寂滅現前して觸目眞なり、迷情猶ほ自ら重津を隔つ、崑崙昨夜滄海に奔り、撲碎す珊瑚の月一輪、此より遠離す男女の相、煌々焯々たり、亦堂々たり、慚愧す德生と有徳とに、飲光は熱瞞す、紫金光、者回は千聖の轍に墮せず、身

を那畔に揚げて行履別なり、面皮を振轉してかへんなんいざ、塵々刹々皆超脱。

道浩禪門の拈香。

去來象無うして恒に儼然、追求せんと擬欲せば大千を隔つ、幾たびか清風明月の夜、黃梅の石女蒼天に哭す、飲んで一瓣の兜樓を焚いて、三寶の勝位に供養し、某禪門の爲めに、報地を莊嚴したてまつるものなり、恭しく惟みれば、靈鑑胸に懸つて生死の窠窟を照破し、智刀掌に在つて凡聖の蓋纏を裂開す、丈夫は須らく丈夫の事を辨すべし、妙は神機未だ兆さざるの前にあり、轉轉々たり、活潑々たり、切に忌む、劍去つて舷に刻するを、雪千山の頂を覆うて、孤峯碧巔を聳かす、今日風に臨んで聊か信を表す、無根の樹子香煙を起す。

脱叟和尚の拈香。(俗弟の請)

恭しく惟れば、某人、靈岩を父視し、智覺を祖とす、魔佛を平欺して來由あり、生涯を蕩盡して折合なく、當頭に坐斷して自ら甘じて休す、三十餘年孤硬を打し、眞機妙用取次に收む、輪奐たる寶坊幻出するが如

を即ち名づけて海印三昧と云ふ。

①蓋纏、行者清淨善心を覆蓋して開發せしめず、故に名づく。  
②四生九類、卵生、胎生、化生、濕生を四生といひ、卵、胎、濕、化、有色、無色、有想、無想、非有、非無想を九類と云ふ。

③十聖三賢、十住、十行、十回向を賢となす。十地を聖となす、妙覺を佛となす。

④二句現成底雪中の梅花玉を破り、清香一抹竹籬の煙は拈香の語として不盡の味あり。

⑤保、都邑の城を保と云ふ。

⑥大士山、頂山和尚開基也。

⑦大乘の眞詮云々、法華眞實の妙詮を云ふ。

⑧供云々、供養達贖也。贖はほどとすと訓す。

⑨冠を裂き云々、入道也。

⑩芙蓉城、石曼卿死して仙となり、芙蓉城の主となる(書言故事)、婦人に芙蓉城の故事甚だ切なり。

寂滅現前、無性の眞理、寂當の妙性、了然として明に現前す、故に云ふ。

重津、重疊たる要津也。  
崑崙以下二句生死關を透破し、凡を轉じて聖に入る。

德生有徳、是れは善財の參ぜし五十三員の善智識中の德生童子と、有徳童女也、此男女の童子は男女を遠離せる男女なり。

熱瞞は甚だ慚づる貌なり。

紫金光は、迦葉在家の時の家内也、迦葉は紫金光女を瞞著した、然し後に何れも無生忍を得、千聖、德生有徳飲光紫金光。

去來、生死去來の本分也。

清風明月云々、此所言外に不生不滅の當體を顯はす。



住山の氣象古を儔となす、遽かに 鋤斧を抛つて 筋斗を翻し、鶴鴿原は冷かなり幾回の秋ぞ、天倫の義は重うして山嶽に逾え、深恩厚德如何が酬いん、法中復た 昆弟たるを得、雪峯請益す老巖頭、年々斯の日追憶を増す、白雲流水空しく悠々たり。

頂山和尚の拈香

此の香は 實際理地に栽培し、大覺海中に浸爛す、然も 鉄兩なしと雖も、價直は娑婆に踰えたり、之に觸るれば則ち閻梨の 鐵面門を燎却し、嗅著すれば則ち衲僧の閉鼻孔を塞斷す、直に得たり、盡虚空徧法界の森羅萬象、四聖六凡、情と無情とより、以て從上の佛祖、出世度生し、般涅槃を唱ふるものに至るまで、渠れが資薰の力を稟けざるることあることなし、今

② 黃梅云々、禪月集に曰く、「無角の鐵牛少室に眠り、生兒石女黃梅に老ゆ」と、又雲門錄に、問ふ、「如何か四恩三有を報じ得ん」と、師曰く、「頭を抱いて蒼天に哭す」と。  
③ 兜樓、鬼人國に産する香草なりと云ふ、或は白茅香といふ。  
④ 報地、當來の果報地也。  
⑤ 劍去刺舂、呂氏春秋に、「楚人劍を舟中より水に墜す、遽に其舟を契つて曰く、是れ我劍の從墜せる所なり、舟已に行きて劍ゆかず、亦惑へるにあらずや。」  
⑥ 風に臨んでとは時に臨んでと云ふが如し。  
⑦ 關溪の法嗣、智覺禪師の法孫也。  
⑧ 孤硬、禪門寶訓に曰く、「投子和尚水庵の像を圖して贊を求む、嗣清禪人孤硬にして敵なし」と。

⑨ 輪奐、輪は廣大、奐は衆多を云ふ、又禮記に曰く、「晉、文子に室を成すを獻す、張老が曰く、美哉輪焉、美哉奐焉、註に輪を以て其周圍を美にし、奐を以て其散明を美にす」と。  
⑩ 寶坊は寺院なり。  
⑪ 筋斗を翻へすは逆さまにひつくり返ること、大智度論偶作に、「脱殼烏龜倒上天、須彌山頂翻筋斗」とあり、煩惱が即菩提、生死即涅槃と轉識する意に喩ふ。  
⑫ 天倫、穀梁傳に、「兄弟は天倫也。」  
⑬ 昆弟は猶ほ兄弟の如し。  
⑭ 雪峯請益、雪峯、石頭和尚に益を請ふ段、會元七に見ゆ、兄弟を此二師に比する也。  
⑮ 白雲流水、唐の崔顥黃鶴樓詩に「黃鶴一去不復返、白雲千

日伏して 頂山和尚小祥の辰に値うて、佗の入室の眞子感鼎の諸兄に代つて、手に信せて拈じ來つて、一 燕に燕卻して、聊か眞法供養を伸ぶ、是れを報恩謝徳とせんか、抑も又讎を復し屈を雪ぐとせんか、道ふことを見ずや、己より出づるものは己に歸ると也。

全戒禪尼の拈香

夫れ以みれば、芙蓉城内 優遊に慣れ、眞淨界中に歸り去つて休す、滿院の落花春過ぎて後、さもあらばあれ 霧慘又雲愁することを、生住異滅は恰も鏡像し水月とに同じく、愛別離苦は 舜若多神涙雨を墜す、五障三從一掃に空するを勞せず、八解六通 懷中に寓物を取る、所以に 龍女早く無垢の正覺を唱へ、喜見終に靈山の記前を受く、若し是れ

載空悠々、即ち追憶に限りなきの情也。  
① 實際理地、瀉山祐草に曰く、「實際理一塵を受けず、萬行門中一法をすてず」と、即ち眞如實相也。  
② 鉄兩、黃鐘の一會千二百黍を容るる重きこと十二鉄、二十四鉄を兩となすと、只量目を云ふのみ。  
③ 鐵面門、南院顯禪師、風穴に問ふ、「如何か、是奪塵、奪境、曰く、「新に紅爐に出づ、金彈子、閻梨鐵面門を踏破す」と。  
④ 四聖、六凡、聲聞、緣覺、菩薩、佛を四聖、六凡は即ち六通に同じ。  
⑤ 燕、燒に同じ。  
⑥ 眞法供養、科註法華七に、「我神力を以て佛に供養すと雖も、身を以て供養するに如何か、即ち諸香を服し香油を呑み、日月淨明德佛の前に於

て、天衣を身にまとひ、神通力の願を以て、自ら身を燃して光明普く八十億恒河沙世界を照らす、諸佛同時に是れ眞の精進これ眞法を以て供養すと名く」と見ゆ。  
⑦ 己より出づるものは己に返る孟子、梁惠王篇に曰く、「曾子曰く、之れを戒む、爾より出づるものは爾に返る」と。  
⑧ 芙蓉城内、自分の田地なり。  
⑨ 優遊、詩の白駒に曰く、「汝が優遊を慎み、爾が遐思を勉めよ」と。  
⑩ 眞淨界は眞如清淨法界也。  
⑪ 滿院の落花云々、死去の時節を述ぶ。  
⑫ 霧慘雲愁、會元八、「福州林陽志瑞禪師滅するの日、齊罷上堂辭衆、時に圓應長老出で、問ふ、雲愁霧慘して大衆嗚呼す、請ふ師一言未だ別れを告ぐる在らずして、師一足を垂



與麼に荷負し去らば、之を女流にして丈夫の事業を成就すと云ふ、其れ脱し未だ然らずんば、大洋海底の火一星、徧界の曇華香 拂々。

蓮阿禪尼の拈香。

夫れ以みれば、一靈の眞性、虚徹 精明、脱體現成の時、動靜形なく、去來跡を絶す、纖毫も存せざる處、三際に彌綸し十虛に充塞す、了々然として常に鑑覺の先にあり、玄々乎として廻かに思議の外に出づ、強ひて本地の風光本來の面目と名け、亦正法眼藏涅槃妙心と云ふ、背くときは則ち曠劫に漂沈し、合ふときは則ち刹那に超越す、是の故に 愛道先づ記前を靈山會上に受け、龍女始めて正覺を無垢界中に成す、彼れ既に丈夫、吾れ寧ろしからざらんや、直下に領略せよ、切に遲疑すること勿れ、五障

る」と。

- ① 生住異滅は、生老病死に同じ。
- ② 舜若とは虚空神なり。
- ③ 五障、一には梵天王たるを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪王、五には佛身、是れを五障と云ふ。
- ④ 三從、禮記にも智度論にも出づ、幼にしては父母に従ひ、嫁しては夫に従ひ、老いては子に従ふ。
- ⑤ 八解は、八解脱なり、八觀を修して羅漢果を證するなり、八觀今は略す。
- ⑥ 六通は天眼、天耳、知他心、宿命、如意、漏盡也。
- ⑦ 懷中に萬物を取る、事の易きを云ふ。
- ⑧ 龍女男子と變成して、南方無垢世界に往いて正覺を成す。
- (法華經)
- ⑨ 喜見、佛、憍曇彌に告げて曰く、「汝漸々に菩薩の道を具し

て、當に作佛を得、一切衆生喜見如來乃至天人師佛世尊と號すべし」と。

⑩ 大洋海底云々、海の底の螢火から、優曇華がすつと咲いて來る。

⑪ 拂、當さに蔕に作るべし、芬香の貌也。

⑫ 精明楞嚴義疏に曰く、「世の巧幻師の諸男女を幻作して諸根の動を見ると雖も、要らず一機を以て抽す、機息すれば寂然に歸す、諸幻無性となるが如し、六根も亦かくの如し、元一精明によりて分れて六和合となる」と。

⑬ 動靜去來、去來象を以てせず、虚空を撥轉す、動靜心を以てせず、當軒大坐と云ふ意也。

⑭ 玄玄、老子に曰く、「玄之又玄」と、幽玄微妙の義なり、又、寶藏論に曰く、「中に一寶あり、形山に秘在す、識物靈

三從は喻へば昨夢の如し、愛別離苦を脱出して、娉婷たる芙蓉新に泥裡に綻び、生住異滅を照破して、清涼の寶月高く秋空に懸る、正因を味まさずして頓に 種智を圓かにし、塵々刹々に大用現前す、只だ 沈水一爐の烟をもつて、十方の諸聖賢に奉獻す、即今 神足を運らすを惜むなかれ、請ふ爲めに證明して法筵に臨みたまへ。

東禪の 巨舟和尚。

遠く鯨波に駕して 大方を歴、魔宮虎穴 行藏に任す、一棹東に歸つて 三十白、聲名藉々として扶桑に滿つ、某人、象骨峯前に轉身の句子を得、三喚聲裡に 藏珠の自ら彰るゝを見る、海嶽を掀翻して空しく索々、賞音獨り箇の 曾郎のみあり、人天に眼目たる時龍象辨じ易く、湖海を睥睨する處氣宇量り難し、寧ろ法幢の倒れて復た立する無からんや、當に佛燈をして滅して重ねて光さしむべし、惜むらくは兩ひ鋤斧を提ぐと雖も、大いに鋒鏘を試むるに由なし、應世の緣云に終つて忽爾として一周霜、徧界大人の相巍々亦煌々たり、明月 芝嶠に上り、清風松岡を撼す、木人掌を拊つて歌笑し、石女眉を擡めて悲傷す、光や不依にして忝なく

- ① 照空然寂莫として見難し、其れを玄玄と號す」と。
- ② 刹那に超越す、妙覺の境涯にいたるを云ふ。
- ③ 愛道は憍曇彌也、後に喜見佛となるべき記前を受く。
- ④ 彼れ既に丈夫とは、彼の女人共が皆丈夫であると。
- ⑤ 娉婷は美好の貌。
- ⑥ 證道歌に、「淨瑠璃寶月を含むが如し」と。
- ⑦ 正因は正因佛性也、正は中正なり、邊邪を離れ三諦具足するもの。
- ⑧ 種知は一切種智なり、一を以て一切を知るの智也。
- ⑨ 沈水、名義集、阿伽嚧、或は亞揭嚧、即ち沈香也、又蓮華藏と名く、其木心堅くして水に沈む、故に沈水と名く。
- ⑩ 神足、神通妙足也。
- ⑪ 巨舟和尚、佛燈國師の法嗣。
- ⑫ 大方を歴、大元の叢林を歴ふ



遺芳を嗣ぐ、昔日兄呼び弟應じ、今朝義斷え情忘す、<sup>①</sup>慕離跳竈は知んぬ多少ぞ、彼に替つて聊か一炷の香を供す。

又。

此の香は萬化の<sup>②</sup>大本、群有の靈根、威音劫前に鬱然として、實際理地に卓爾たり、名を離れ、相を離れ、榮を絶し枯を絶し、倒に<sup>③</sup>不萌の枝を抽いて、強ひて無影の樹と號す、華藏海中に浸爛して、涅槃岸上に突出す、<sup>④</sup>孟八郎の漢に遭うて截つて三段となし來る、一點芬馥の氣息なしと雖も、遠つて<sup>⑤</sup>五分法身の薰聞に逾えたり、今朝風に臨んで一蕪に蕪卻す、獨り諸聖の鼻孔を驗過するのみにあらず、専ら用つて吾が巨舟師兄に奉獻す、切に冀くは、是の眞法供養を享けよ、挿香して云く、「<sup>⑥</sup>咦、道ふこと

意也。  
①行藏、論語述而篇「子、顔淵に謂ふて曰く、之れを用ゐる時は則ち行ひ、之を舍くるときは則ち藏る、惟我と爾と之れ有るか矣」と、所謂君子の素位、釋氏の隨緣也。  
②三十白は三十年と云ふに同じ。  
③象骨峯は雪峰なり、巨舟入宋の際、雪峰逸樵隱樵下にて一句子を得たり。  
④三喚聲裡、樵隱下侍者職にあり、故にし云ふ。  
⑤藏珠、如來藏裡の摩尼珠也。  
⑥曾郎、雪峯義存禪師、師は泉州南安曾氏の子、故に云ふ。  
⑦芝罘、松岡、共に東禪寺にあり、境致也。  
⑧光や不佞より以下、師の自叙也。  
⑨慕離跳竈は神足の弟子を云ふ。

⑩大本、中庸に曰く「中は天下の大本也」と、此所人々具足の妙法をいふ。  
⑪不萌の枝云々、續傳悅堂希顔の章に「鳥は棲む無影樹、花は綻ぶ不萌枝」と、元來無色無臭の一法也。  
⑫孟八郎、輕重生死を知らぬ愚人也。  
⑬五分法身、分は即ち分齊、法は戒定慧の諸法、身は衆なり、諸法を集聚して以て其身を成す、一に戒身、二に定身、三に慧身、四は解脫身、五解脫智見身。  
⑭咦、喚ぶ、又大呼也。  
⑮伴あれば即ち來る、洞山首め南泉に謁す、馬祖の諱辰に値ふ、齋を修する次、南泉衆僧に垂問して曰く「來日馬祖の齋を設く、未審かし、馬祖還り來るや否や、衆皆對ふるなり、師即ち出で、對へて曰

を見ずや、<sup>①</sup>伴あれば即ち來ると。

預脩。

日本國、遠州路、河村の莊の居住、寶心禪尼、今月十三日、謹んで誠心を發して、龍壽山永安禪院に就いて、淨財を施し、精膳を設けて、預め歿後の冥福を脩す、其の志頗る以て嘉すべきなり、竊かに念ふに、三毒熾熾にして三途の苦報招き易く、<sup>②</sup>五欲海深うして五障の淪溺免れ難し、大凡多劫の罪累、未だ懺除するに由あらず、徒らに慚惶を懷くと雖も、哀憫を陳ぶるに處なし、仰ぎ願くは、三世十方の諸佛菩薩諸賢聖等、慈悲を惜まず、道場に降臨して、且つ證明をなし、且つ加被を賜へ、専ら冀くは、寶心禪尼、壽報百年の後、世縁を厭はん時、復た女流に墮せず、常に淨海に生ずることを得、菩提心然も退かず、般若の智以て現前し、河沙の含靈を提挈して、同じく無上の妙果を證せんものなり。  
一たび眞性に惑ふてより、荏苒として各々幻業に繋がる、<sup>③</sup>蠢々たる六趣と四生と、<sup>④</sup>昇沈疲極す百千劫、偉なるかな猛烈の女道人、誓つて今生に向つて此の身を度す、一日佗の清淨衆に命じて、<sup>⑤</sup>靈山九會の文を頼

「伴あらんを待つて即ち來らん」と。  
①預脩、當時預修の佛事流行す、徳川時代には甚だ稀也、足利義政の如きは三年、七年、十三年、二十五年、五十年と、約一年に渡りて逆修の佛事を修し、當時横川月翁の徒長廣舌を振へり。  
②五欲、財欲、色欲、飲食欲、名欲、睡眠欲の五也。  
③壽報は世壽果報也。  
④仁王經に云く「衆生蠢々都て幻居の如し」と。  
⑤昇沈云々、汲井輪の如く轉々するを云ふ。  
⑥靈山九會の文、林間錄下に曰く「衡嶽楚雲上人嘗て血を刺して法經一部を寫す、皇祐の間貴人あり、山に遊んで之れを見る、其妄を疑つて人をして針を以て之を發かしむ、血あり、縷の如く出で、須臾に



寫せしむ、須らく信すべし。經王勝妙の徳、來報七分に全得を獲ることを、華鮮は本是れ海龍の兒、無垢界中に正覺を成ず、將に謂へり途を同じうして轍を同じうせずと、元來無二亦無別なり、菡萏華は開く三四枝、遍法界中香拂々たり。

見公禪門の拈香。

一度悲を風樹の邊に興してより、既に三十有三年となる、知らず今日は是れ何の日ぞ、鐵眼銅睛も涙潸然たり、某人、歷劫より今に到るまで、迷に隨ひ妄を逐ひ、頭を改め面を換へて、諸趣に輪轉す、而乃爺嬢は形生の本、三際に彌綸し、十方に充塞す、假使微塵刹土に分身し、恒沙の善因を嚴修するも、安んぞ劬勞の萬分の一を報答するを獲んや、惟だ心源に廓

して風雷山谷に震ふ。貴人即ち懺悔す」と、貫休が此事を詠める詩に曰く、「皮を剥り血を刺して誠に何の苦ぞ、爲めに寫す靈山九會の文、十指濕乾して七軸を終ふ、後來の、求法更に君無し。」

經王、法華經藥王品に曰く「帝釋の三十三天中に於けるが如く、此經も亦請經の中の王たり」と、法經一に純圓獨妙王經と云ふ、故に勝妙の徳を云ふ。

七分云々、命終の後、眷族小大爲めに福利を造らんと一切の聖事をなす、七分の中一分即ち亡者獲、六分の功德を生者自利すと、故にしか云ふのみ。

華鮮、童女成佛の名は華鮮如来即ちもと靈山會上にありし一龍女なり。

無二亦無別、大般若經に「善現色清淨なれば果清淨、果清淨なれば即色清淨、何以故に

是れ色清淨と果清淨と、二無なく二分なく別なく斷なし」とあり。

菡萏、即ち荷華なり、此段蓮華花開くを以て眞箇の法經となして拈香佛事を説くなり。

風樹の悲、楚國の相虞丘子死に臨んで曰く「夫れ樹靜ならんとして風止まず、子養はんとして親待たず、往いて返らざるものは年なり、再び見るべからざるものは親なり」と。

頭を改め面を換へ、牛となり馬となり、天となり人となるを云ふ。

爺嬢、爺は父、嬢は母なり、又爺嬢とも耶嬢とも書く、杜甫の詩に「耶嬢妻子走りて相送る」と、又古樂府に「不聞爺嬢子を哭するの聲」と。

風を繋ぐ、前漢書に「風を繋いで景を捕ふるに、終に得べからざるが如し。」

徹し、當念消融し、腳痕下の一著、卒地に折れ、曝地に斷じて、生死の相を見ることは、猶ほ空裡に風を繋ぐが如く、涅槃の心に住することは、水中に月を捉ふるに同じきを除く、是の故に寧ろ一法の情に當つるあらんや、本三界の出づべきなし、初中後善徒に設け、羊鹿牛車空しく馳す、便ち與廢に承當し去らば、罔極の深恩一時に酬畢せん、其れ或は未だ然らずんば、未だ曾て筆を點せざる前に看取せよ、菡萏花開いて徧界香し。

中峰和尚。

天目の名山に頭を倒卓し、佛魔も驚怖し鬼神も愁ふ、刹那に三十有三白、師子巖前に月秋を照す、恭しく惟みれば、某人、亞聖の大人、季世に間出す、慈を運らし物を利して、勉めて願輪に乗す、生知現前して全機活脱身を翻して乃師の死關を撻透す、方寸の内に、夫の須彌のごとく、渤澥のごとくなるもの、八九を平吞し、一毫頭上に、恒河沙數の甚深微妙の、義門を掲開す、宗通說通法界を該盡し、道富徳富乾坤に充塞す、佛祖より已來、古今の下、當に此を無業・永明・大珠・忠國

初中後善徒は即ち初善、中善、後善を云ふなり。

羊鹿牛車、法華譬喻品に「種々の羊車鹿車牛馬今門外に在り以て遊戯すべし」と。

天目云々、中峰和尚入滅を云ふ也。

三十三白は三十三年と云ふに同じ、白は梵語にして、佛燈錄に「我林間に止ること已に九白を經たり」と。

亞聖、孟子序に「顔子は聖人を去ること只毫髪の間、孟子は大賢にして聖に亞ぐの次なり」とあり、然れば此所唯賢者と云ふ程の意なり。

生知、中庸に「或は生れながらにして之れを知り、或は學んで之を知る」と。

死關を撻透す、中峰廣錄塔銘序に曰く「天目の山師子巖あり、高峰妙禪師之れに居る、死關を設けて參學の士を辨決



師伯仲の間に求むべきか、縦使ひ萬象を借つて舌となし、今より去つて稽首贊揚して、連綿として絶えず、劫より劫に到るとも、猶恐らくは百千億分の其の一分にだも敢及せず、於戲已んぬるかな、香烟一縷、涙千絲、大法の主盟は其れ復た誰ぞ。

道善禪門の拈香。

於戲虚空を夾截して兩片となす、森羅萬象哭聲連る、中に就いて去來の跡を覓めんと擬せば、獨脚の烏龜飛んで天に上る、某人志氣虹蜺を貫き、操履氷雪より潔し、郷黨に處つては則ち薄く和睦の誠を輸し、君家に事ふれば則ち固に至忠の節を持す、居を移して蘭若に近づいて、鐘梵を樂聞し、以て絲竹の聲を鄙しんず。僧に隨ひ禪床に陪して、素饌を耽嗜して、而も

す、崖を望んで退くもの多し、一人を得本公と曰ふ、是れ中峰和尚となす、死關に入るに及んで、密に心要を扣いて金剛經を誦す、荷擔如來阿耨多羅三藐三菩提の處に至つて、恍然として闕解す、流泉を見るに及んで大に發明す」と。

大珠海禪師なり。  
② 忠國師は六祖大師の法嗣也。  
③ 香烟、東坡詩集に、「但見る香烟の碧縷を横ふることを。」  
④ 主盟、盟は血を飲つて信を結ぶ也、此語左傳に出づ、即ち大法を共につぐものを云ふ也。  
⑤ 志氣虹蜺を貫く、蓋し志氣の高きを云ふのみ。  
⑥ 鄉黨、父兄、宗族の居る所也。  
⑦ 蘭若、具には阿蘭若、又阿練若、阿蘭那、單に練若とも云ふ、梵音「アーラマヤ」、遠離所、閑靜所、寂靜所、意樂所等の譯あり、比丘の住所、精舍寺院庵等云ふ。  
⑧ 芻象、草食を芻と云ひ、穀食を象と云ふ、牛馬は前者に屬し、犬豕は後者に屬す。  
⑨ 芙蓉、是に云ふ芙蓉は皆蓮の異名也、木の芙蓉とは別也。  
⑩ 嗟嘘す、嘆聲を漏らすこと。

芻象の味を忘る、塵中を出でずして、出塵の事を辨ずること、譬へば芙蓉の淤泥の裡に開くが如し、濁世安んぞ能く久しく住するに忍びんや、眉を擡めて常に自ら暗に嗟嘘す、浮世五十有二年、只一夢を將つて華胥に寄す、此の夢俄然として驚起す、手を撒し浩歌して歸らんか、遮莫雲愁霧慘すること、青山舊によつて體如々たり。

特峯和尚の拈香。

恭しく惟れば、某人、佛通的傳の英裔、大福中興の主盟、宗乘を提唱するや、雷馳せ電激し、崖崩れ石裂く、居常の懷抱や、氷枯れ霜烈しく、雲閑に水清し、咸く謂ふ龍淵復た波浪を起し、惠日重ねて高明を増すと、一回假りに生死の相を示してより、今に至るまで、雲愁ひ霧慘み、鬼哭し神驚く、老拙昔年俱に巨福山中に在つて、肩摩し衫屬し、風前月下に同坐同行す、悔ゆらくは佗のために末後の句を道著せざることを、今日狹路に相逢ふ、水を借つて花を獻じ去るを免れず、香を挿んで云く、沈水一爐茶一盞、黃梅の時節、雨晴を慳む。

川庵濟禪門の拈香。

國譯永源寂室和尚語錄 卷之三

① 列子黃帝に、「夢に華胥の國に遊ぶ、華胥氏の國は兪州の西、台州の北、齊國を去ること幾千萬里なることを知らず」と、蓋し舟車足方の及ばざる所、神遊のみ。  
② 東福癡兀の孫也。  
③ 佛通、佛通禪師諱は大慧、字癡兀、自ら平等房と號す、瑞雲山に寺を創め、大福と曰ふ。  
④ 龍淵、徑山方丈の額也、無準の法流を嗣ぐ、故に爾が云ふ。  
⑤ 惠日、惠日山東福寺。  
⑥ 肩摩衫屬は肩と肩と相すれ、衣と衣とすれ合ふ。  
⑦ 雨晴を慳むは、涙連々として乾くひまなしが。  
⑧ 湫を傾け云々、天地一時に崩壊す、即ち是れ寂滅現前する也。  
⑨ 了道禪門、播州の人也。  
⑩ 擾々役々、東西へ奔走し自ら苦む底なり。



風樹葉飛んで三たび秋を見る、忽ち驚く光景の流よりも疾きを、法身眠熟して呼べども起たず、江上の青山也た愁を著く、夫れ以みれば、幻妄境中には生あり死あるも、實際理地には去なく來なし、只だ一念頓に空了するを得ば、枯體頂門に活眼開く、便ち見る ① 湫を傾け嶽を倒し、地轉じ天旋り、全機警脱し、寂滅現前することを、只だ與麼に信得及するを要す、大家用ひす蒼天に哭するを。

了道禪門の拈香。

世間の人は生死あるを知ると雖も、生死を懼るゝもの鮮し矣、終日 擾擾役々として塵網に繋る、空しく歲月を度つて、全く前程大いに事の在るを顧みず、忽爾として臘月三十日到來するときは、則ち方に始めて ② 驚窘悵惶して手脚を頓くに處なし、宛も生死あるを知らざる者と、以て少も異なるなきなり、憐愍すべき者かな、播州の道公禪門は、獨り生死を懼るゝの人なり、何を以て之を知るや、其の平生 ③ 區々として志を究むること至誠、預め歿後の善因を修す、昨は已に信を寄せ、老僧に命じて、卒哭の佛事を營辨す、今又請じて ④ 小祥の功德をなさしむ、老僧嘉嘆す

① 驚窘悵惶は驚困狼狽に同じ。區々、文選の注に勤々と、又 齷齪也。

② 老僧は即ち寂室なり。卒哭、禪門死後百ヶ日の佛事は卒哭忌なり。

③ 小祥、一週忌也、禮記喪禮に、「期にして大祥し、又期にして小祥す、皆祭の名也、凶を去り、吉に従ふの義也。」

④ 伽陀、偈頌、又單に偈と云ふに同じ、梵 (Chaitani) 諷誦、或は單に頌と譯す、徳を頌する詩の一體にして韻文也、經文の内に漢譯せらるゝ偈は四言、五言、七言、句の字數を一定するのみにして散文に同じ、宗門古來の禪詩、禪偈、頌、頌古と稱するものは押韻平仄必らず詩の體に倣つて作る。

⑤ 婆伽梵、世尊と譯す、佛の尊稱、衆徳を總攝し、之れを有する至尊の義なり、此外或は有

ること之を久しうす、仍つて ⑥ 伽陀を唱へて、以て聊か讚揚を加ふ、云く、若し一念をして三際を空せしめば、便ち是れ吾が門の活脱の人、昔日生せず今死せず、金剛の正體本來の身。

淨霑大師の拈香。

日本國、遠州路、濱松の莊の居住、菩薩戒の弟子、義俊、今月二十日、茲に亡女比丘尼淨霑小祥の忌辰に遇うて、得々遠く來つて、永源精舎に就いて金を揮ひ供を辨じ、閩山の清衆を拜命し、蓮華經一部を繕寫し奉り、尋いで山野に命じて、此の寶香を焚いて、十方の ⑦ 婆伽梵、法界の賢聖衆に供養す、鳩むる所の善因は、専ら冀はくは淨霑の頓に多劫輪回の苦因を脱して、速かに諸佛清淨の妙果を證せん者なり。

夫れ以みれば、人生世に處するや、其の親在ますときは、則ち晨夕左右を離れず、勞苦を憚るなく、其の侍奉の誠を罄す、其の亡するに及ぶや、則ち或は ⑧ 墓畔に廬して、服を持すること三年、若し是れ出家の士は、固く心喪を守り、勤苦煉行して、歲月を限らずして冥福を薦む、之を孝の終と謂ふものなり、於戲 ⑨ 幽靈、落髮披衣、遊方の日多く、顔を承くるの

徳、又は名聲、或は能く淫怒癡を破るに名く、如斯多義ある故、五種不離の一也。

⑦ 墓畔に廬して云々、孔子世家に、「孔子魯城北の北、泗上に葬る、弟子皆服すること三年、唯子貢家上に廬すること六年」と。

⑧ 幽靈は亡者淨霑尼なり。

⑨ 遊方、四方に遊歴すること也。

⑩ 劬勞、骨を折り疲ること、詩經に「哀々父母、生我劬勞。」

⑪ 蘊志、宿志、宿望などに同じ。

⑫ 尼總持、一日達磨達かに其徒にいふて曰く、「吾西に歸るの時に至れり、各々其詣る所をいふべし」と(中略)、尼總持曰く、「我今の解する所は慶喜の阿闍佛國を見るが如く、一見更に再見せず」と、達磨の曰く、「汝我肉を得たり」と。

⑬ 鈍庵和尚は曾て寂室和尚及然可翁と共に、元に入るの同行



時は少し、素より參禪學道見性明心を念として、<sup>①</sup> 劬勞の恩に報酬せんことを庶幾ふ、争奈せん志願大なりと雖も、力用未だ充たざるを、一旦無常遽かに至つて、<sup>②</sup> 蘊志永く逝く、悲しいかな、重ねて願はくは、惟れ靈生々、尼總持の達磨の印證を得るが如く、世々大愛道の世尊の記莢を受くるに同じからんことを、幻妄境内に生滅あり、眞淨界中に去來なし、萬古秋空一輪の月、清光夜々高臺を照す。

鈍庵和尚。

① 休歇の地に到得してより、世外の 棲遲四十年、祖道さもあらばあれ都て爛卻するを、臥雲深き處に安眠を打す、某人、玄關の旨を透つて、早く 覺雄聲前の三呼に應じ、<sup>②</sup> 大鑑の門に遊んで、<sup>③</sup> 眞淨堂中の一衆を首領す、險崖の句胸襟より流出し、撥天の名海上に 雷鳴す、衰拙昔年杖屨に追陪し、吳頭楚尾江西湖南、<sup>④</sup> 伊予倦遊して 桑梓に歸隱す、殘山剩水茆屋石田、邇來 隣壁に光を分ち、共に歳晩の佳會を嘆す、遠爾として我れを棄てて長に逝く、奈んともするなし老涙の收め難きを、然も與麼なりと雖も、涅槃の後に大人の相あり、<sup>⑤</sup> 澤山巍々として蒼々を摩す、義斷え

也。

① 休歇、一切食喫癡の結縛を放下するを小休歇といひ、一切の佛法知見利生の念を放下するを大休歇といふ。

② 棲遲、詩の衡門に、「衡門の下以て棲遲すべし」とあり、遊息の意なり。

③ 覺雄、建長無範、大覺に嗣ぐ、元に入るの人也。

④ 大鑑、禪師諱は正激、清拙と號す、福州連江劉氏の子也、伯父月谿圓和尚に依つて薙髮す。

⑤ 眞淨は眞淨寺大鑑所住の寺也 ① 雷鳴、韓文、孟東野を送る序、「雷を以て夏に鳴る」と。

② 伊予は伊れ鈍庵、予れ寂室。 ③ 桑梓、郷里を稱して梓里といふ、即ち日本を云ふ也。

④ 隣壁、師米田島龍聖寺にあり、鈍庵は強澤の眞淨寺に住す、相近きを以て光を分つと云ふ

情忘するに堪へざる處、挿む此の兜樓一片の香。

洞禪人の爲めの 下火。

① 洞然として明白なるは、是れ箇の何物ぞ、擬議不來ならば、七華八裂、畢竟如何ん、火中の紙馬生鐵を嚙む。

密庵主の下火。

拳を豎つる ② 消息人の會するなし、門煙羅に掩ふ幾度の秋ぞ、<sup>①</sup> 一夜虚空消殞し了る、須彌頂上に 華球を輓す、草露 ③ 沍々たり風蕉片々たり、唯一堅密の身、一切塵中に現す、向上更に轉身の一路の在るあり、火把を以て圓相を打して云く、石火電光、一見便見。

西祖頂山和尚。

④ 西祖已に葱嶺を踰えて行く、虚空消殞して須彌倒る、山河大地悲風を起し、夜半扶桑日 杲々たり、某人、玄機妙用佛祖も窺觀するに門なく、<sup>①</sup> 潛徳の幽光魔外も伏膺するに分あり、一生の 擔板、三處の住山、<sup>②</sup> 通玄の 正傳を滅卻し、<sup>③</sup> 瑞龍の活計を掃蕩す、門庭孤峻にして具に古格の叢林を瞻る、規矩森嚴にして今時の途轍を草むるに堪へたり、一周事畢つ

のみ。梅幾巨が隣居の詩に、「壁隙燈光を透し、籬根井口を別つ。」

⑤ 澤山、眞淨寺の山號、強澤山也。

⑥ 下火、黃檗運禪師母のために炬を乘る、又普燈の四に「寶覺心入滅す、茶毘の日隣峰ために炬を乘る」と。

⑦ 信心銘に「但憎愛なくんば洞然明白」と。

⑧ 消息、易、豐卦象に、「天地盈虛消息す、而して況んや人においてをや」と、又消息を音信なりと、其推移又は様子などの意にも用ふ。

⑨ 一夜云々、即ち死を云ふ。 ⑩ 華球、綿柳絮などにて作る手毬を云ふ。

⑪ 沍々、すつぽりゆるるをいふ、詩經に「厭浥行露」と、此所不生不滅の體を明す也。

⑫ 西祖云々、達磨入滅後、之れ



て警爾として翻身す、涅槃城を拳倒し、生死の窟を踢翻す、更に末後の一句あり諸人に分付す、遠つて會すや、看よ看よ、紅爐片雪を飛ばす、  
① 丙丁童子面門寒し。

蘊上座の下火。

五蘊有にあらず、四大本空なり、泥牛夜吼ゆ澄潭の月、木馬時に嘶く碧落の風、只だ亡僧面前觸目菩提と云ふが如きは、且く作麼生か和會せん、火把を以て圓相を打して云く、其れ或は未だ委悉せずんば、大家問取せよ丙丁童子。

④ 省院主。

幻境忽ちに省して、大夢俄かに寤む、葉落ちて根に歸し、金風體露、既に是れ初秋夏末、須らく萬里無寸草の處に向つて、別に活路を求むべし、然も與麼なりと雖も、院主眉毛を惜

師の語に、「丙丁童子來つて火を求む」と、即ち有にして有ならず、無にして無ならざるを云ふ。

② 風穴延沼章に、「問ふ、如何か、是れ佛、師曰く、「風に嘶く木馬、絆しなきに縁る、角を背ふ泥牛、痛く鞭を下す」と。

③ 亡僧面前云々、傳燈十八に玄沙宗一章、「我尋常道ふ、亡僧面前正には是れ觸目菩提、萬里神光頂後の相、若し人觀得せば、妨げず陰界を出得し、汝獨樓前の意相を脱せん」と。

④ 大家は全家、又は諸人を云ふ。省院は、監寺也。

⑤ 大夢、莊子齊物篇に、「大覺ありて然る後此大夢を知る」と。

⑥ 金風體露、古語に曰く、「水落ち石出て、天地自然の眞如を知る」と、又雲門錄に曰く、「問ふ、樹凋落葉の時如何、師曰く、「體露金風」と。

- ⑦ 果々、日の輝く様をいふ。
- ⑧ 潜徳の幽光、韓文公、崔立之に答ふる文に曰く、「猶ほ將に寛閑の野に耕し、寂寞の濱に釣し、國家の遺事を求め、賢人哲士の始終を考へ、唐の一經を作り、之れを無窮に垂れ、姦諛を既死に誅する、之が潜徳の幽光を發せんとす」と。
- ⑨ 擔板、一方向きの融通のきかぬ者。
- ⑩ 通玄は通玄庵建長寺にあり、桑田塔也。
- ⑪ 正傳は正法眼藏也。
- ⑫ 瑞龍庵は淨妙寺にあり、靈岩塔なり。
- ⑬ 丙丁童子は火の神也、法眼禪

取せば好し、何が故ぞ、木佛火を渡らす。

道善禪門。

不思議、不思議、面目分明、瞥地に去り、瞥地に來る、全機獨脱、偉なるかな猛烈の大丈夫、生死の牢關當下に抜く、既に眞俗の羅籠を出づ、寧ろ凡聖の途轍に墮せんや、正與麼の時、那裡か是れ、佗の眞歸の處、紅爐片上に片雪を飛ばす。

伊大師。(燈の節の日)

一夜須彌筋斗を打す、虚空を驚かし起して雙眉を皺めしむ、從教れ明月海嶠を照す、爭奈せん悲風地を動じて吹くを、某人四十六年、路を人間に借る、惟れ道惟れ勉めて、藥苦氷寒、末山の不露頂を坐斷す、寧ろ鐵磨の牝牛欄に居らんや、甚の伊字の三點とか説かん、向上の一關を拶透す、是は則ち是、火把を豎起して云く、更に末後の句子あり、切に須らく理會して始めて得べし、其れ或は未だ然らすんば、燈王古佛に問取して看よ。

明應大師。

- ① 院主眉毛云々、會元丹霞天然章、「師慧林寺に於て天の大寒に逢ひ、木佛を取つて火に燒いて問ふ、院主呵して曰く、「何ぞ我木佛を燒くことを得人、師杖子を以て灰を撥ひて曰く、「吾燒いて舍利を取ると、主曰く、「木佛何の舍利か、あらん、師曰く、「舍利なければ更に兩尊を取つて燒む」と、主その後眉鬢墮落す」とあり。
- ② 佗は即ち道善を指す也。
- ③ 燈節の日は正月拾五日、即ち燒燈節なり。
- ④ 尼末山了然禪師は高安大愚の法嗣也、僧問ふ、「如何なるか、是れ末山、然曰く、「不露頂。」(會元四)
- ⑤ 劉鐵磨亦尼僧也、鴻山に參ず、山來るを見て即ち曰く、「老牯牛來や、磨曰く、「來。」(會元九) 牯牛は牝牛なり。



一念道と相應する時、吾が家眞の種草となるに堪へたり、瀉山門下の老牯牛、法華會上の大愛道、當頭に拔卻す生死の關、直下に掀翻す涅槃の窟、最後の句子又如何、烈焰堆中一片の雪。鏘侍者。

三呼三應、金石鏘鏘たり、最後の一句、徧界藏さず、只だ聖制を毀犯して破夏行脚するが如くんば、果して出生入死超宗越格の分ありや也た無きや、火把を擧して大衆を召して云く、看よ看よ、火中の菌苞馨香を吐く。

慈慶禪尼。(預請)

風前の 薤露は晞墜し易く、岸樹井藤良に險なる哉、五十六年惟だ一夢、任教れ殘月の西臺を照すことを、某人、受生業繫、暫く女士の輩流に處するも、是れ其の天資、甚だ丈夫の志

伊字、涅槃經哀歎品に、何をか名けて秘密の藏となす、猶ほ伊字の三點の如し、若し並ぶれば則ち伊とならず、縦しならざるも亦摩醯首羅面上の三目の如し、乃ち伊となす事を得、三點若し別なるも亦成ることを得ず、我も亦かくの如し、解脱の法も亦涅槃にあらず、如來法身も亦涅槃にあらず、摩訶般若も亦涅槃にあらず、三法各異も亦涅槃にあらず、我今如斯三法に安住して、衆生の爲め故に涅槃に入ると名く、世の伊字の如し、即ち之れによる也。因みに梵字の伊の古字はふの如く三點よりなり、其位置横ならず縦ならず、故に三即一、一即三の意味を表はす例語として用ふ。

燈王は燈光を指せるなり。

大愛道、橋曼彌、又は大生主

三呼三應は侍者故に之れを云ふ。  
鏘鏘、西征賦に曰く、佩聲の遺響を想ふに、鏘鏘として耳にあるが如し、即ち金石の聲を云ふ、又禮記に曰く、君子の音を聞く、其鏘鏘を聴くのみにあらざるなり」と、又鏘侍者の鏘に應ず。

聖制、天下の僧侶四月十五日禪刹に就いて挂搭す、之れを結夏と云ふ、蓋し長養の節外にありて、行けば則ち恐らくは草木蟲類を傷く、故に九十日安居、七月十五日に至る、之れを聖制と云ふ。同日挂搭の僧尼悉く去る、之れを解夏と云ふ、又解制とも云ふ。

薤露、漢の田橫死す、門人之れを傷んで遂に悲歌を爲りて言く、人命薤上の露の如し、瞬き易く滅し易し、又曰く、

氣に踰えたり、舊三従を守つて服勤に勞す、忽ち驚く五障の迴避し難きに、形を毀つて既に六和の衆に團り、踵を旋らして須らく諸聖の位に昇るべし、疾に染んで歳に深く、奄息時將に至らんとす、四大の空身去あり來あるも、一靈の眞性は不變不異なり、火把を拈起して云く、大衆還つて見得するや、金剛正體鎮長に存す、劫火幾回か海底を焼く。

楞猛庵主。(結夏の日)

捨俗歸眞の志に辜かず、猛烈の工夫已に十成、失脚踢翻す生死の窟、放身靠倒す涅槃城、某人、夙生に箇事あることを知つて、頂門に活眼睛を具す、百千の法門即時に蕩盡し、七十六歳幻夢忽ちに驚く、萬里渾て無し雲一點、參州は只だ是れ月孤明、火把を以て圓相を打す、諸人高く眼を著けて看よ、安居禁足の蠟人冰、卻つて紅爐焰上を踏んで行く。

靈叟和尚の爲め入塔。

佛燈滅卻す、瞎驢の邊、知る是れ無明的傳を得ることを、慚愧す頂門の正法眼、空しく夜月を餘して、青天を照す、恭しく惟みれば、某人、誤つて長勝の籌室に入つて、痛棒を喫著す、此れより命根を喪盡して此の風

「薤上の露、何ぞ瞬き易き、朝更に露あり」と。

岸樹、場所の危きを云ふ。

六和の衆、一同戒和敬、二同見和敬、三同行和敬、四身慈和敬、五口慈和敬、六意慈和敬以上の六和敬を云ふ。

月孤明、所謂心月孤圓光萬象を呑むの底也。

蠟人冰、蠟常に臘に作るべし、年臘を云ふ、天然に臘人を以て臘をなすは、其人臘に長幼あり、其行に染淨あればなり、氷とは其行の氷潔を云ふ也。

靈叟和尚、佛燈國師の法嗣なり。

瞎驢、正法眼藏以心傳心を説く、語臨濟末期三聖に垂示するに、「我正法を瞎驢邊に向つて滅却することなし」と云ふに出づ。

青天を照す、正法眼藏の露堂



骨を露す、言を出し氣を吐くの處、越格超宗、揚眉瞬目の時、釘を截り鐵を斬る、<sup>①</sup>南詢歴盡すること二十年、勘過す諸方の老古錘、便ち見る大唐國裡只だ是れ禪あつて師なきことを、還つて巨福山中に向つて風月を平分し、宏おほいに萬壽の爐轆ろはを開いて聖凡しやうはんを鍛鍊たんれんす、横拈わうねん倒用たうよう星飛せいひび電卷でんまきき、眞操しんさう實行じやうぎ氷潔ひやうけつく霜嚴しやうげんし、太古たいこの正音しやうおん和するもの寡すくなく、調しらべ無生むじやうに轉てんじて七たび春を見る、末後の一句、淵默えんもく雷轟らいこう、直ちきに如今いまに至るまで幾人いくにんをか疑殺す、一義いちぎ同心どうしん山は高たかきを缺かき海は深ふかきを缺かく、兄弟ひんてい十字じゆじ限りなき清風せいふう來つて未だ已やまず、者箇しやこは是れ某人それか平生せいじやう受用じゆよう不盡ふじん底の三昧さんまいなり、即今そくこん歸つて眞歸しんきの處ところを知らんと要せうするや、免まなれず重ねて箇この消息せうそくを通つうじ去さることを、流水りうすい潺々せんぜんたり一溪いつけいの曲まがり、白雲はくうん長ながに鎖さす碧層せきじやう巒らん、湘南しやうなん潭北たんぺい黃金わうこん國こく、自家じか田地ちの閑かんにはしかず。

心庵主しんあんじゆの入塔にふたふ。(舊ふるの明禪めいぜんの檀那だんなたり)

正因しやういんを味あじまささず、心華しんけ開發かいはつし、大基業たいきげふを立たして、法ほふの檀越だんごつたり、拳けんを豎起じゆきする處ところ、生死しやうじの牢關らうくわんを打破たは破はし、低頭ていとうして歸かへる時とき、故家こかの風月ふうげつを領略りやうりやくす、釋迦しやくかの腦蓋なうがい達磨だつまの眼睛がんじやう、畢竟ひつぎやう是れ箇この什麼なんの閑鬼骨かんきこつぞ、空くわしく三尺さんじやくの

① 痛棒いたうぼうを云々、即ち佛燈ぶつとうの義ぎなり。  
 ② 釘くわいを截きり云々、銀山ぎんざん鐵壁てつへきも喝かくすれば摧くだげ、打うてば破やぶる。  
 ③ 南詢なんじゆん、南方なんぽう諸國しよこくに道みちを詢もとふの意い、善財ぜんざい童子どうじ、南方なんぽう五十三人ごじさんにんの善智ぜんち識しを訪問ぼんもんしたる故事こじに依よる、語行ごぎやう脚けつの意いに用もちふ。  
 ④ 巨福きよふく山ざん云々、首座しゆざとして半座はんざを分わつ義ぎ也。  
 ⑤ 萬壽まんじゆ、豐後府ぶんごほ内藤山うちだてざん興聖きやうせい萬壽まんじゆ禪寺ぜんじ也。  
 ⑥ 淵默えんもく雷轟らいこう、維摩ゐまの一默いちもく雷らいの如ごとしと、蓋かきし之れより來きるなり。  
 ⑦ 明禪めいぜん寺じは、備前州びぜんしゆ番ばんにあり。  
 ⑧ 心華しんけ、正因しやういん佛心ぶつしんの種子じゆじより開ひらく也。  
 ⑨ 大基業たいきげふは、明禪めいぜん寺じを云いふなり。  
 ⑩ 故家こか、風月ふうげつ、衲僧なそう本分ほんぶんの田地ちなり。

① 浮屠ぶと兒じを留とどむ、千古せんこ萬古ばんこ峭嶽せうたつ々々たり。

覺眞かくしん禪門ぜんもんの入塔にふたふ。

出生しゆつじやう入死にふし、兩ふたながら空名くうみやう、眞しんを離はなれ妄まうを除のぞくも、也また是これ何物なにものぞ、浮屠ぶと三尺さんじやく須彌しゆみを礙まへ、虛空こくう拶出さつしゆつす、黃金わうこんの骨ほね。

① 頂山ちやうざん和尚しやうの入塔にふたふ。

千聖せんしやうの頂顛ちやうてん骨氣こつき別べつなり、當陽たうやうに突とつ出しゆつす好生觀かうさんくわん、大士たいし峰前ほうぜん全體ぜんたい現げんじ、層々そうそう落落らくらく影團かげだん々々たり、正與しやうよ麼まの時とき、是これ本寺ほんじ開山かいざん頂山ちやうざん和尚しやうの還家げんけ穩坐ゑんざ底ていの消息せうそくなるなからんや、依稀いしたり、華藏けさうの甚深じんしん海かい、髣髴はうふつたり、妙高めうかうの不動ふどう山ざん。

説せつ (合計かひけい十九章じゆしやう)

松巖しやうがんの説せつ。

作陽さくやうの操禪さうぜん人にん、予よに從したがつて遊あそぶこと久ひさし、一日いちじつ別稱べつしやうを安あんせんことを需もとむ、故ゆゑに松巖しやうがんを取とつて號がうとなす、渠かれ又また其そのの説せつを聞きかんと請こふ、且しかくため

① 浮屠ぶと、浮圖ぶと、又は寧堵波ねいと、又偷婆とと曰いふ。又私偷しと婆はとも書かす、皆訛みななり、梵名ぼんめいは(Budaha)なり、佛ぶつ或あるは佛ぶつ寺じをも指さす。  
 ② 黃金わうこんの骨ほね、古句こくごに「骨頭こつとう節せつ々々是これ黃金わうこん」也。  
 ③ 頂山ちやうざん和尚しやうは桑田そうでん海かいの孫靈そんりやう巖がん昭しやうの子こ也。  
 ④ 頂顛ちやうてん、大凡たいばん名字めいじを打うつ妙めうなり。  
 ⑤ 碧巖せきがん二にの頰かほに、「無縫むほう塔たつ見る」と還かへた難がたし、澄潭じやうたんには許ゆるさず蒼龍そうりゆうの蟠ばんることを、層々そうそう落落らくらく影團かげだん々々、影團かげだん々々。  
 ⑥ 本寺ほんじ、大士たいし山ざん慈廣じくわう寺じ也。  
 ⑦ 華藏けさう云々、華嚴わげん四法界しほふくがいの廣大くわいたい海かいなり。  
 ⑧ 妙高めうかう、南方なんぽう國こくあり、勝樂しやうらくと云いふ、又妙高めうかう峰ほうといふと。  
 ⑨ 説せつは解げなり、述じゆつなり、義理ぎりを解釋げかいして己おのれが意いを以もて之これを述じゆつぶる也、論ろんと大差たいさなし。  
 ⑩ 鳥道ちうたう支路しじゆ、禪林ぜんりん類聚るいじゆに曰いく、



に之に語つて曰く、「從上參學の士は、先づ信根を固うして深く道本を究め、志氣高く霄漢を衝いて、時人の意に入らざるを憂へず、霜雪の苦を嘗め盡すと雖も、終に歲寒の姿を改めがたし、然る後、立處孤危、八面玲瓏たり、鳥道玄路、假使佛祖も只だ斫額して仰望するのみ、其の一機を垂れ一境を示すに當つては、或は濟北の巨樹、後世に榜様して、限りなき陰涼清風已ます、或は雙峰山前、鈍鑊頭邊に、忽爾として筋斗を打翻す、再來半錢にあたらす、或は鳥花を含み落して、錯つて名言を下し、人をして境の會をなさしめ、二十年を閑過す、或は振威一喝すれば、崖崩れ石裂け、青天の迅雷身を掩ふも及ばず、汝勉勵力行して遠く先哲の勝躅を攀ぢば、乃ち顔を希ふものは顔の徒なり、正に宜しく子が子に命ずる所以の旨に負かざるべし、庶幾はくは名實相當らんか、」時に管城翁あり、旁に在つて起つて歌つて曰く。

「鶴は喬枝に嘖り、猿は落月に叫び、山は夜濤を撼かし、瀑は晴雪を飛ばす、名か實か、天風瑟瑟たり。」

材翁の説

「夾山會禪師、因に路を修する次で、雪峰問ふて曰く、世路普請して修す、玄路忽生か修せん、師曰く、瞪目して同じく迷ふ、爾が鋤を下るす所なし。」洞山玄中の銘に擧足下足、鳥道無殊坐臥經行、玄路にあらざるなし。又鳥道は飛鳥の道路空中にあり、玄路は世途にあらす、三脚の驢馬此道による。

榜様は手本也。

雙峰山前云々、宋高僧、弘忍大師の傳に、雙峰に至つて、僧業を習ふ、艱辛を憚らず、又雙峰山中裁松道者あり、再生して五祖大師となり、四祖に法を次ぐと、裁松によりて之れを齧出するなり、又鈍鑊頭と云ふ也。

半錢にあたらす、會元十九、白雲禪師章、若し衲僧秤子上に上り、秤らば一箇は重き

夫れ良木に非ざれば、大厦を締構するに由なし、是れ美器にして、庸つて先修を庶幾すべし、昔し臨濟、黃檗に在つて、寸青を栽培す、漸く巨樹となつて、宇宙を蔭涼し、叢林に標榜たり、爾よりこのかた、苗を分ち、根を連ねて、殆んど其の幾千萬章なるを知らず、繩墨を施さず斧斤を勞せざるも、長短方圓自然に度にあたる、是こを以て競うて、洪基を掘め、宏いに戸牖を開いて、天壤の間に充塞す、後來獨り石霜の慈明老人あつて、頗る破家散宅の手段を具して數々院事を領じて一椽を動せず、然る後勃然として臨濟の將に仆れんとするを興す、其の十有二世、不肖の遠孫、我が佛燈先師は、是れ法門の梁棟、天下の宗匠なり、只だ平生佛を罵り祖を呵するを以て、口業の招くところ、如

八兩、一ケは重き半斤、一ケは半分錢に直らすと。

鳥含花落、會元夾山章、「問ふ、如何か是れ夾山の境」と、師曰く、「猿子を抱いて青嶂の裏に歸り、鳥花を含んで碧巖前に落つ」と。

錯下名言、會元七、巖頭全藏章、一日徳山に參す、方に門に跨つて便問ふ、「是れ凡か是れ聖か、」山便喝す、師禮拜す、人ありて洞山に擧似す、山曰く、「若し是れ藏公ならずんば大に承當し難し、」師曰く、「洞山老人好惡を知らず、錯つて名言を下す、我當時、一手は擡げ一手は搦む」と。

巖崩れ石裂け、「俱胝初め徑山國一禪師に侍す、山中俄かに殿宇を創む、岩下石突出して平治する能はず、胝、俱胝菩薩の呪を誦し、乃ち聲を震はして喝すれば、岩之れがために

平ぐと。

管城翁は筆の異名也。

寸青、古人の句に、「青々一寸の松、中に棟梁の姿あり。」

洪基、大叢林也。

石霜の慈明、石霜楚圓慈明禪師也、汾陽の道望によつて太悟徹底す。

破家散宅云々、家屋敷も庫も什賣もたゞきつぶされれば、微妙莊嚴の寶樓閣には安坐できぬ。

孟子に、「雨沛然として下れば、苗勃然として興る」と。

平生原本處々に一平生に作る、譯者尊聞にして一平生の語に接せず、故に或は一を省し、或は平を省して一生或は平生と改む。

駿陽は駿河を云ふなり。陽といふは非なり、洛陽、汾陽などは皆洛水、汾水の陽にある故に云ふ也。



今門庭冷かなることは死灰の如し、悲しひかな、<sup>①</sup>駿陽の<sup>②</sup>梁姪、天資英敏にして亦老成なり、薄に起家の才あり、宜なるかな、<sup>③</sup>足庵材翁の二字を取つて之が別稱となすこと、唯だ望むらくは業を勤め行を勵しうし、<sup>④</sup>保社を扶立せんことを、其の實をして其の名に愧ぢざらしめんと要するなり、旃を勉めよ、旃を勉めよ。

無住の説。

關西の本姪、來つて別稱を需む、爲めに無住の二字を寫して之を還す、渠れ亦其の説を聞かんと欲す、予之に謂つて曰く、「是れ無住の本より一切の法を立するなきや、是れ應に<sup>①</sup>所住無うして其の心を生するなきや、是れ有佛の處留まるを得ず、無佛の處急に走過するなきや、摠に者般底の道理にあらず、爾而今只だ父母未生前に向つて、<sup>②</sup>猛く精彩を著けて、體究することを久しうして、<sup>③</sup>名相雙泯、人法兩空、三際平沈し、十虛消殞せば、<sup>④</sup>那の時方に見ん無住の義忽爾として現前するを、之を思へ。」

道山の説。

一 日客あり、余に謂つて曰く、「吾れ參道の志を抱くこと茲に年あり、而も復た賦性山を愛す、棲遲地を易ふると雖も、皆山を離れず、所以に目を縦にして觀るときは、<sup>①</sup>則ち疊嶂・屏を連ね、

層巒・黛を潑ひ、白雲は幽石を抱き、<sup>②</sup>赤日は高岩に下る、全く是れ道なり、耳を側て、聽くときは、<sup>③</sup>則ち溪流玉を漱ぎ、松籟濤を翻し、寒猿深崖に嘯き、老樵空谷に歌ふ、也た是れ道なり、今既に頗る<sup>④</sup>境智冥合し、<sup>⑤</sup>物我雙忘するを覺ゆ、方に知る道は本山に在らざるを、山亦何ぞ道を離れんや、<sup>⑥</sup>追思するに、古人云ふ、「平常心是れ道、」又云く、「無心是れ道、」或は云ふ、「牆外底、及び、<sup>⑦</sup>長安に透る」と、豈止だに外邊に<sup>⑧</sup>之邊を打する者ならんや、<sup>⑨</sup>時に古濃河邊の大昌主翁信公、余に從つて偈を道山の雅號に需む、余毫せり、平仄を辨せざること久し、客の語を借つて寫し、以て其の請を塞ぐと云ふ。

別禪の説。

正燈庵主、一日予に從つて道號を安かんことを需む、因つて別禪の二字を寫して其の請に酬ゆ、時に一<sup>①</sup>驅鳥あり、<sup>②</sup>旁に侍して墨を研ぐ、乃ち問うて曰く、「既に是れ別禪、想ふに四七二三稟承し將ち來る底の不立文字等の禪にはあらず、未審し甚麼の禪ぞ」と、余笑つて曰く、「今日は是れ延文巳亥臘月二十五。」

授庵の説。

相陽の傳姪、一夏余が爲めに庫務を飯高の山庵に掌る、執爨負春、<sup>①</sup>

① 梁は材翁の諱名也。  
② 足庵、祖麟靈岩の子也。  
③ 保社、山谷の時に、「本江鴻と保社を成す」と、即ち保佐、同社を云ふ、叢林をいふ也。  
④ 所住無し、其實體なきをいふ。  
⑤ 一日云々、來客を設けて寓言して自ら説くなり。  
⑥ 棲遲、悠々自適なり、ゆつくり休む也。  
⑦ 之邊、邊路也、迂曲也。  
⑧ 驅鳥、十二三位迄の小僧也、

① 赤日云々、東坡詩集に、「高岩赤日を下す、深谷悲風を來たす」と。  
② 境智は、所緣の境、能緣の智也。  
③ 古人の句に、「竹樹扶疎乳燕鳴鳩の時序を送るに任せ、物我二つながら相忘る」と。  
④ 長安云々、大道長安に透ると。  
⑤ 之邊、邊路也、迂曲也。  
⑥ 驅鳥、十二三位迄の小僧也、



區々として賤役し、事として辨せざるなし、甚だ斯の道に志あるを感ず、  
解制の後、且く辭して參方せんとし、亦別稱を需む、仍つて授庵と號す、  
爾此去つて、看山斲水游州獵縣の時、自己の大事因縁を忘するな  
れ、切に眼を著けて看よ、佛々授手し祖々相傳する底は是れ什麼邊の事ぞ  
と、忽爾として蹉腳踏得して、底に到らば、方には是れ名實厮當らん 至屬  
々々。

及庵の説。

古播の 信姪、余を近江石塔の客居に訪ひ、別稱を安かんことを需むる  
の次で、從容として語げて曰く、「我が師 大虚既に没して、慘怛未だ已  
まざるに、尋いで亦母を喪し、忽ち省す、無始より以來、業繫身に受け、  
展轉昇沈して、三有界内に無量の艱辛を喫盡す、若し今日生死の根源を  
截斷せずんば、則ち未來際を極めて超脱の日あるなけん、況んや我れ空門に  
濫廁すること十有餘年、而も此の道に於て全く些子入頭の處なし、唯だ  
是れ 波波挈々として徒らに涼燠を閱す、實に自ら慚ぢ自ら愧づるのみ、  
乃ち故里に歸つて 樹に就いて屋を縛し、終日關を掩うて萬機を休罷し、

皆顯局沙彌と名く。  
⑤ 今日臘月廿五日なれば、廿五日までなり、何の殊勝奇特もこれなし、是れ即ち別禪也。  
⑥ 區々、此所では勤貌、即ち屹々などと同じ意なり。  
⑦ 看山云々、行脚の間を云ふ。  
⑧ 至屬、至だ、汝に付屬す、忘るゝなかに云ふ程の意也。  
⑨ 信の諱に違はれて信得及を得及庵と名つけられし也。  
⑩ 從容、舒緩の貌、中庸に「從容として道に中る」と。  
⑪ 大虚、福嚴大虚元壽禪師也。  
⑫ 三有は三界なり。  
⑬ 濫廁し、瀉山警策に曰く、「濫りに僧倫に廁る」と。  
⑭ 波波挈々、又波々吒々、波々劫々に作る、波々は奔波已まざる也、挈々は休まざる貌。  
⑮ 樹に就いて屋を縛し、中峰山居の詩に「看山渾不厭居山、就樹誅茅縛半間」と。  
⑯ 無義味云々、中峯雜錄、結夏順心庵の衆に示す語中に曰く、「單々に無義味の話を提起し、最初一日より、脚頭を立定して、分毫も移動することを得ざれ、之れが與めに做して向前に去れ」と。  
⑰ 眞固得がたしとは、斯くの如く精進する漢は容易に得難しの意。  
⑱ 會元、雪峯存章、「一僧あり、山下にあり、庵を卓して多年頭を剃らず、一長柄杓を蓄へて溪邊水を汲む、時に僧あり、問ふ、如何か是れ祖師西來の意、主曰く、溪深して柄杓長しと、師聞き得て、乃ち曰く、也た奇怪なり、一日剃刀を以て侍者と同じく去つて訪ふ、纔に相見前話を擧す、問ふ、是れ庵主の語なりや否や、主曰く是、師曰く、若し道得ば即ち爾が頭を剃らず、主便ち

把つて一件となし、一則 無義味の話を靠取して、黙々として參究すれば、舊に依つて肚裡の疑團黑漫々地にして、之を奈何ともするなし、云々、予謂つて云く、「汝今此の如く信得及せば、眞箇得がたきなり、斯の志久遠にして不退ならば、安んぞ己事を辨明するを獲ざるを患へんや、古人旨を得るの後、猶は衣を拂つて遠引し、岩谷に韜晦して一生世と邈如たり、纔かに人に參扣せられて、卻つて已むを獲ずして、或は空拳を豎起し、或は門上に字を書し、或は云ふ、溪深うして杓柄長しと、這般の高風逸韻、皆最初の信得及の上より流出し將ち來つて、今に至るまで天壤の間を照映す、予汝を及庵と號す、意豈茲に在るに非ずや。」

劍關の説。

演祖趙州の 無字を頌して曰く、「趙州の露刃劍、寒霜光焰々、更に如何と問はんと擬すれば、身を分つて兩段となす、性禪者別號を安せんことを求む、因て劍關と號す、汝今よりして後、諸縁を放捨し、把つて一件となして、孜孜兀々として箇の無字に參せよ、一旦知解忘じ、能所泯じ、伎倆盡きて、關板子を撞翻せば、惟だ生死の魔網を割斷するのみにあらず、亦



須らく佛祖の命根を、勦絶すべし、之を干戈を動かさずして、坐ながら太平を致すと謂ふとしか云ふ。」

直前の説

① 少林は直指人心見性成佛と云ひ、淨名も亦直心是れ道場と云ふ、皆俯して時宜に應じ、枉げて人情に順ふ、豈翹に七曲八曲のみならんや、縦令有佛の處住するを得ず、無佛の處急に走過し、奔流刃を度し、疾焰風を過し、遼鶴三千、溟鵬九萬、杳かに羅籠を出で、窠臼を超脱し、身を那畔に揚げ、別に生涯を立するも、若し衲僧門下に約せば、正に是れ癡默の漢なり、爾若し這裡に在つて一隻頂門の眼を著得せば、須らく鐵磨總持の輩をして背後に又手せしむべきのみ、大抵如今學道の人は、一往直前して違得して手に入る能はず、多くは一機一境の上になつて途路の活計をなす、是のごとく、蹊跟し、是のごとく躊躇す、所以に未だ肯て歸家穩坐せず、實に憐愍すべきものなるかな、鏡邸の接待庵主端大師、別稱を求む、因つて直前と號す、此を寫して以て其の説となすと云ふ。

定巖の説

古人跡を岩間に晦まして、世と遯如たり、只だ専ら禪寂を以て、將樂となす、所以に孤猿月に叫ぶも、耳を亂るの聲を聞かなく、幽鳥華を銜むも、眼を遮るの色を見ず、斯の如きこと三二十年、一旦厥の道顯著して、紫詔雲に入り、出で、人天の導師となるもの之れあり、或は亦誓つて石室を下らず、芋を煨つて饑に充て、草を編んで衣となして、樵汲の外、宴坐靜默、泯々として終を待つもの之れあり、然も其の高風逸韻、尙ほ韶濩を百世の下に鳴らすは、咸く是れ那伽定の中より得來らざるものあるなし、予が賢姪字は一、予と林下の遊をなすこと久し、別稱を求む、因つて定巖と號す、略其の説を示すのみ。

南雲の説

予昔し豫章に游んで、舟滕王閣の下に泊す、一少年梢工の舷を扣いて王勃の記詞を朗誦するものあり、予蓬窓に起坐して、終宵聽を側て、私に感激を増す、良に以て騷人墨客の幽致雅韻を想見するに足るのみ、嗟乎俛仰の頃、既に三紀を逾ゆ、今鈍庵老兄、神足棟禪の爲めに、大いに南雲の二字を書して其の別稱と爲すを覩て、乃ち覺ゆ、西山南浦歷爾と

頭を洗つて胡跪す、師即ち與めに剃卻す」と。  
② 派祖、會元十九、五祖法演十五にして始めて家を棄て、祝髮す、今の頌、五祖演語録下に出づ。  
③ 勦絶、尙書に、「天用つて其命を勦絶す、きりたつ也」。  
④ 直前は尼僧也。  
⑤ 小林、淨名、小林は淺磨、淨名は維摩也。  
⑥ 遼鶴三千、遼東城門に華表柱あり、白鶴あり其トに集る、鳥詩を言うて曰く、「鳥あり、鳥あり、丁令威、家を去ること千年、今來り去り歸る、城郭は故の如くして人民は非なり、何ぞ仙を學ばざらんや、塚累累、又詩經鶴鳴に、「鶴九皋に鳴く、聲天に聞ゆ」と。  
⑦ 溟鵬九萬、莊子逍遙遊に、「北溟に魚あり、其名を鯨となす、之が大いさ其幾千里なるを知

らず、化して鳥となる、其の名を鵬と云ふ、鵬の南溟に徙る時、水に撃つこと三千里、扶搖に搏して上るもの九萬里。」  
⑧ 蹊跟「ちがい」、おろかもの也。  
⑨ 鐵磨、總持、初祖下の尼僧也。  
⑩ 蹊跟、又梁根に作る、行いて進まざるを云ふ。  
⑪ 鏡邸は江州の鏡が驛なり。  
⑫ 孤猿云々、巴峽猿啼いて三聲人の腸を斷つ。  
⑬ 幽鳥云々、會元二、四祖大匠禪師傍出の法嗣、牛頭山法融禪師章に、「牛頭山幽棲寺北巖の石室に入る、百鳥の花を銜む之異あり」と。  
⑭ 紫詔、詔を紫泥の書といふ、李白が句に、「鳳凰丹禁の裏、銜出紫泥書」と。  
⑮ 人天の導師、唐の南陽の慧忠禪師、白崖山黨子谷に居る、と四十余年、唐の肅宗に召さ



して毫端に聚り、朝雲暮雨宛然として眼底にあることを。

高原の説。

大元至治壬戌の春、袁の南源に游んで、方丈の扁榜を見るに、曰く、「水出ニ高原」と、蓋し慈明禪師此の山に住するの日、僧あり、問ふ、「如何なるか是れ佛、」答へて云く、「水は高原より出づ」といふの意を取るか、備陽長福の妙老、跋渉を憚らず、來つて飯高の巖居を訪ひ、留まること、信宿して去る、其の志嘉すべし、別に臨んで別稱を需む、之を高原と號す、切に希はくは慈明垂示の旨を參究して、其の源底に徹せば、恐らくは是れ名實厮當らん。

彌天の説。

東晉の安公は僧中の龍なり、徳名俱に高うして、其の右に出づるものあるなし、故に自ら彌天釋の道安と稱す、良に以あるなり、如今釋侍者、彌天を樹て、用て別號となす、吾が門復た希顔慕蘭の徒を獲たるを且喜するなり。

雪懷の説。

昔し王子猷雪中舟に乗じて戴安道の幽居を訪ひ、未だ其の處に到らずして乃ち棹を回らす、人其の故を問ふ、云く、「興に乗じて來り、興盡きて歸る」と、蓋し參禪行脚も亦復た是の如し、若し途中忽爾として洗面して鼻孔を摸著する底の時節あらば、何ぞ必ず宗師面前に、言を承け氣を接して、如之若何と問ふことを用ひんや、猷侍者別稱を求む、因つて號して雪懷と云ひ、迅筆亂道して之に贈ると云ふ。

霜林の説。

果侍者の別稱は霜林、蓋し霜は青冥露結んで積むこと久しうして凝白濃清なり、林は衆木叢生して年を歴て蔭涼高大なり、人は徳足り、道優にして、而る後必ず名器を成す、一朝霜露果熟し、人天推轂して、叢林凋殘の秋を扶起せば、方に始めて余が懶を霜林と號する所以の旨に孤かざるなり。

快翁の説。

若し此の事を論せば、則ち棒頭に旨を明むるも、早く是れ鈍鳥蘆に棲む、喝下に機を轉するも、困魚深に止まるを免れず、所以に高亭江を隔

れて師の禮をうく、機に應じて光宅積藍に説法すること十有六載と。

石室云々は、善導和尚の類、芋を煨るは懶瓚禪師の類、草を編むは奉初禪師の類之れなり。

韶濩は幽妙の樂なり、舜の樂を韶と云ひ、湯王の樂を濩と云ふ。

那伽は龍なり、長時蟠屈し禪定の機を得、即ち大禪定、佛定等の意に用ふ。

豫章、揚州に屬す。

王勃字は子安、絳州龍門の人也、六歳にして文を能くすと、滕王閣王勃の詩に「畫棟朝に飛ぶ南浦の雲、朱簾暮に捲く西山の雨」の句あり。

騷人、楚の屈原離騷を作る、離騷は憂に遭ふ也、今時詩人を云ふ。

三紀は三十年也、十二年を一紀とす。

元の至治二年也、本朝の元亨二年にして、和尚卅三歳、南源は慈明の曾て住持する處。

信宿、一宿を宿といひ、再宿を信といふ、三日以上を次といふ。

安公は釋の道安なり、年十二にして出家し、神性聰敏にして形貌甚だ醜と。

希顔慕蘭、顔を希ふは顔の徒なり、司馬相如、蘭相如を慕ふて其名を以て己が名とすと。

王子猷、右軍義之の子也、嘗て山陰に居し、夜雪の初めて霽れて月色清朗、四望皓然、獨酒を酌む、左思招隱の詩を詠す、忽ち戴逵を憶ふ、時に遠剡にあり、便ち夜小舟に乗じて之れに詣る、宿を経て方



て、横に趨り、南泉拂袖して便ち行るも、其の遅きこと豈翅に七刻八刻のみならんや、且く快翁禪伯に問ふ、作廢生か是れ俗例の衲僧分上の事、汝未だ口を開かざる已前に向つて、一轉語を下し得ば、名浪りに得るにあらざるなり。

石礪の説。

余が性山水に遊ぶを喜ぶ、一日飯罷んで、同志兩三輩を拉へて、屋後の山に入り、樵徑によりて行くこと數里に殆し、松風耳を吹き、空翠衣を濕す、忽ち一洞壑を見る、幽邃、嶮呀、陰風凜々たり、老木枝を交へ、古藤蔓を垂れ、兩崖對峙して翠屏を側つるが如し、中に巨石あり、高さこと丈餘許り、屹然として特立して青鐵を削るが如く、硤砢礪礪として怪奇觀るべし、潤澤物に被らしめ、草木花滋く、溪山明媚なり、蓋し疑ふ、内に美玉を含んで、乃ち然るを致すか、下に礪泉ありて色藍を按むに似たり、泓然激澗として、雲根を浸爛す、瞪目して俯して臨めば、人をして心寒く股慄せしむるのみ、亦恐らくは靈物あつて茲に蜿蜒するか、余聊か懐に感あり、即ち同志に謂つて曰く、坐れ吾れ汝に語げん、古の隱士は復かに塵世

に至る、造門前まずして返る、人其故を問ふ、曰く、本興に乗じて行く、興盡きて反る、何ぞ必ずしも安道を見んやと。

①如之若何、如之は「かくのごとくにて、斯様斯様に見ました、若何は「いかに」にて如何が御座いませうと尋ねるなり。

②青冥は蒼天也。

③人天推轂は世の中に引張り出すこと。

④鈍鳥云々、寶藏論に「夫れ道に進むの由、中に萬途あり、困魚は深に止まり、病鳥は蘆に棲む、其二者大海を識らず、叢林を知らず、人小道に趨くも又然り」と。

⑤高亭の簡禪師徳山に參す、江を隔て、纒かに見て便ち曰く、「不審」と、山乃ち扇を搖して之を招く、亭忽ち開悟、乃ち横に趨つて去り、回顧せず、(會元七)

を揖し、遠く雲山を尋ねて、空谷の中に棲遲し、寒溪の上に考築す、志を守ることを堅確にして、天翻り地覆るも、移らず、轉せず、心源淵深にして、歳積み月累ねて、彌々清く彌々澄む、唯だ世人の住所を知らんことを羞ぢ、亦聲名の江湖に流らんことを恐る、而今石澗を回觀するに、古隱士の道貌と頗る相逼似するなり、汝が意謂ふに如何、同志袂を拂つて起ち、笑つて曰く、「老夫實に毫せるか、若し但だ酷だ彼の石澗の天生清絶の佳致を愛すと謂はゞ則ち良に以て可なり、古の隱逸を引き、偷かに以て比倫せば、何ぞ其の言の軌轍是の如くなる、豈復た事を好む者にあらずや、余對ふるところを失し、赧面して休す、夕陽已に木末に懸れり、相呼んで歸る、翌旦泉姪來つて相訪ふ、茗を淪て同じく啜る次、話その事に及ぶ、泉云く、「或人吾を石澗と號す、由るところを識るなし、來つて老夫に従つて其の説を聞かんと欲す、幸に希はくは山中に見るところ語るところを記して、石澗の字の尾に在け」と、余が曰く、「前に言ふところのものは、是れ同志の捨つるところなり、汝之を用ゐてなにかせん、泉云く、「彼れ已に我にあらず、我また彼にあらず、彼我各々異なり、用捨寧ろ同じからん

①南泉拂袖は馬祖月を見るの因縁也。

②空翠、王摩詰山中の詩に「山路元と雨なし空翠人衣を濕はす」と山氣又露也。

③嶮呀は大なる貌又豁開なり。

④硤砢は石轉動の形、礪礪は石のごろ／＼分布する貌也。

⑤雲根は石也、石は雲の根なり、故に爾か云ふ、石の事を書いた書に雲根志あり。

⑥考築、詩之衛風に、「盤(たのしみ)を考(いた)して澗に在り、」即ち淵明の「古松を撫して盤桓し」の盤桓などに同じ。

⑦軌轍、軌は委也、軌轍は屈曲と云ふが如し、蓋し骨の屈曲連鎖する貌。

⑧淪て、煮てに同じ。

⑨彼れ已に我にあらず云々、莊子に曰く、「儻魚出遊從容す、



や、余已むを獲ず、毫を援き、書して贈ると云ふ。

可庭の説

老拙疇昔元朝に遊んで、夏を姑蘇の虎丘に度る、一夕竊かに堂外に出で、千人石上に經行す、時に一方の明月白うして秋霜の如し、忽爾として古人獨り腰に齊しき雪に立ち、法を覓むる艱難の至なるを追憶す、嗚呼倒指すれば今既に三紀を逾ゆ、荏苒たる光景、惟だ一日の如し、尾陽の方侍者來つて別稱を需む、爲めに可庭と號す、聊か舊事を記して以て厥の尾に書すと云ふ。

越溪の説

吾が子秀格、未だ志學を甫めざるに、來つて余が室に入つて、身を忘れて服勤し、須臾も左右を離れず、已に一紀を逾ゆ、余が住庵の所在、動もすれば三十餘輩に下らず、渠れ醇く卒歳の計を以て懷となすのみ、所以に幹蠱周旋、功として辨せざるなし、然も面に矜伐の色なく、口に勞苦の言を絶す、只だ世情の爛れて泥に似るを疾んで、吾が道貌の清くして水の如くならんことを圖るのみ、一日紙を袖にして別稱を需む、因つて

越溪と號す、蓋し越の若耶溪は、天下の勝槩なり、晉宋より今に至るまで名賢才子詩僧騷客一たび此に遊ばざるを以てして恨となすのみ、是こを以て此の地の譽、直に天と高を争ふ矣、汝實をして名に愧ぢしめざらんと欲せば、當に宜しく志を勵まして進修すべし、悟證淵沖にして、常流に卓絶し、日に玄奥に達すること、川の方に増すがごとく、大法の根源を澹うして、吾宗の正派を紹いで、名を百世の下に馳せば、豈偉ならざらんや。

書簡 (合計拾五篇)

倫上人に答ふ

久しく起居の間を致さず、慚惶の至に勝ふるなし、忽ち慈誨を領じて、道體の佳勝なるを審かにす、欣慰無量、前に既に一花五葉を惠まる、山中無事、香を焚いて披閱し、般若の縁を結ぶ、尙ほ東語西話を缺く、殆んど渴して水を思ふが如し、今又厚恩を荷ふ、何を以てか之を謝せん、去春靈

是れ魚の樂也、惠子の曰く、子、魚に非らず、安んぞ魚の樂みを知らん、莊子曰く、子、我に非らず、安んぞ我の魚の樂みを知らざること知らん、惠子曰く、我、子に非らず、固より子を知らず、子固より魚に非らず、子の魚の樂みを知らざること全しと、抱腹絶倒、盤上の玉の如し、而して事理明白、有にあらす無にあらず。

可庭、劉禹錫の詩に「一方の明月中庭に可なり」と云ふより來るとも云ふ。

虎丘千人石、大明一統に「平江府虎丘山は府城の西北九里にあり、一に海湧山と名く、中に劔池千人坐石あり。」越絶書に、「吳王闔閭を山下に葬る、葬つて三日、白虎其上に踞す、因つて名つく」と。

明月云々、李白の詩に「庭前

月光を見る、これ地上の霜かと疑ふ」と。

古人、惠可の雪中に道を求むるを云ふ。

卒歳、詩に曰く「何以卒歳」と。

幹蠱、古事を能くするを云ふ、經山雜錄に「提點は虎岩の徒弟、頗る聰明幹蠱の才あり」と。

若耶溪、越州府城東南四十五里にあり、即ち歐冶子の劍を鑄し處也。

川の方に云々、詩天保九如に、「川の方に至るが如く以て増さすといふことなし。」

一花五葉、東語西語、搭鉢序に曰く、五篇を著書す、曰く、山房夜話、曰く、擬寒山詩、曰く、梭巖微心辯見、或問曰く、信心銘開義解、曰く、幻住家訓名けて一花五葉集といふ、又金剛般若略義一卷、別



叟歿故す、諸子堅く請じて 明禪の席を繼がしむ、已むを獲ずして罪勉之に從ふ、夏罷んで、終に羈絆を脱し去れり、秋末に但州に到つて、古寺の閑房を借つて冬を過す、今夏猶ほ茲に就いて病を養ふ、鄙體輕安なり、幸に垂念を煩すなかれ、備州の忍兄、本業を律寺に隸ふ、倏爾として志を奮つて將衣を更へて參禪せんと欲す、中川雄兄の書を齎して以て介紹となし、愚に衣盂を授げんことを求む、愚佗に謂つて云く、「自己誤つて 田衣を服して、佛門を玷辱す、争でか敢て小師を度すべけんや、」子須らく大方に去つて、名師宿衲に投じて、法器を成就すべし、豈不可ならんや、今已に渠が意、<sup>①</sup>夢窓和尚、臨川の 元翁兩老の間にあり、望むらくは尊兄方便して、渠をして其の志を遂ぐるを得せしめよ、則ち亦是れ利物の一分なり、愚毎に斯の如き事を以て、神用を勞煩し奉る、僭越の罪を免れず、唯だ渠跋涉を憚らず、特に來つて懇求すること甚だ力めたり、棄て、而して絶つに忍びず、勉強して稟聞す、慈愍を恪むことなくんば幸甚なり、不宣。

又。

順公上人 尊兄の手墨を捧げて弊庵に來り、今夏聚首す、二六時中孜孜として辨道す、眞の本色の道人なり、愚疇昔衆に隨ふこと二十年に幾し、未だ曾て箇様の好兄弟を見るに及ばざるなり、豈期せんや、歲晚 幸に肉身の菩薩と同住の勝縁を結ぶことを得んとは、是れ亦偏に吾兄道義深密の中より出でたり、詎を庸てか奉謝せん、皇恐不備。

實翁和尚に寄す

前日專介急に回る、悉く所懐を寫すに暇あらず、尙ほ中に憚むことあり、今歳看々又盡く、益驚く流景の過ぎ易きを、況んや殘齡良に以て多きことなし、知心は能く幾人かあるや、顔を奉じ談を接するは時中の願望なり、只だ老懶日に増すを以て、因循として虚しく數月を度り了る、心親しく跡疎なり、幸に乞ふ怠慢をもつて我を罪するなかれ、慈亮慈亮、<sup>②</sup>挑字猶ほ未だ此に到らず、想ふに精妙神に入つて尋常と同じからず、上利の土地、殊に茲に秘惜して外に出づるを妬んで、陰かに詭計を設けて是に來るを得るの晩きを致すのみ、耐へがたし、耐へがたし、呵呵、弊寺の門前に幾箇の 潑皮あつて、近日許の魔難をなす、此に因つて、某早晚に衣を拂つて遠引せんやも也た定まらず、薄福の招くところ、怪しむに足らざる者なり、隆禪卻つて函丈に禮謁せんことを要す、冗中毫を援き、<sup>③</sup>觀縷して此に到る、時寒し、法の爲めに保重

傳覺心一卷、東語西語三卷、語錄十卷を著す、盛に世に傳ふ。  
① 備前の明禪寺なり。  
② 田衣、僧祇律に云く、「佛王舍城に住す、帝釋石窟の前に經行して稻田を見る、即ち畦畔分明なり、阿難に語つて曰く、過去諸佛の衣相かくの如し、今より之れに依りて衣相となさんと、」又增輝記に、「田畦は水を貯へ嘉苗を長し、以て形命を養ふ、法衣の田は潤すに四利の水を以てし、増すに三善の苗を以てし、以て法身の慧命を養ふ」と。  
③ 夢窓、天龍開山夢窓疎石禪師也。  
④ 元翁、南禪元翁本元禪師、高峰顯日に嗣ぐ。

① 尊兄は倫上人也。

② 挑字、蓋し墨跡扁書等を云ふなるべし。杜詩千家註に、「誰か家を錦字を挑ぐ、燭滅し翠眉頰す」と。

③ 潑皮、又波卑夜、惡といふ、釋迦出世の時魔王の名也。

④ 觀縷、委曲なり、又詳密なり。



せよ。

實翁和尚に答ふ。

上復、忽ち示諭を辱うす、且つ審かにす、官辭狀を收めて、敢て勉め強ひて、以て吾が兄の安靜の趣を撓さざるを、竊かに之が爲めに助喜す、忻幸忻幸、壽兄は先師の最も鍾愛の子、海外に孟浪すること二十年、今已に歸り來る、猶ほ落包の地を缺く、誠に是れ憐むべきものなり、如今幾箇の法眷の占むるところの院子は、咸く是れ先師の遺席なり、何ぞ一箇を與へて、佗をして安頓せしめざるや、宛も蚯蚓の窟を戀ふが如くに相似たり、筒様の破落戸、如何ぞ把つて人となして看ん、天寒く歳暮る、春風一策便ち是れ相見の時なり、來人急に回る、萬が一を伸ぶるを獲る能はず、恐愧の至り、伏して冀はくは法の爲めに珍重せよ。

又。

越弟來つて賜ふ所の手教を出し示す、香を焚いて繙閱す、仍つて審かにす、此日道福兼昌にして、興寢清勝なるを、欣慰已むことなし、細かに來諭を味ふに、區々として、愚が林下に關を掩うて世に趨くに懶きを痛責す、又云く、「風雲の際會、以て峻擢に膺らん」と、夫れ何ぞ期せらる、

① 鍾愛は、最愛に同じ。  
 ② 落包の地は卓錫の地を云ふなり。  
 ③ 破落戸云々、善意にも惡意にも解せらる、譯者は善意に解して壽兄の如き破家散宅の英物を人ごとの如くにほつては置けまい、是非一院を與ふる義務ありの意、破落戸は身代つふし也、或處にては「ころつき」と用ふ。  
 ④ 萬一、文公李愿盤谷に歸るを送る序に「萬一を僥倖して老死して後止む」と。  
 ⑤ 興寢は起臥なり。

の太だ過ぎたるや、何を以てか敢て當らん、厚く存撫を荷ふにあらざるよりは、則ち安んぞ此に到るを得んや、銘感の至に勝ふるなし、愚壯歳衆に隨ふの日、東西の班列すら、尚ほ以て敢て意に措かず、何に況んや焉れより大なるものをや、是れ他なし、蓋し深く自ら己を量り分を知ればなり、類齡耳順に幾く、蒙昧年とともに相稱ふ、當初師友に得る處のもの、十に一を記せず、好一箇の棄物なり、天壤の間我を顧みるものある鮮し、獨り頂山の居兄、平日道義寒からず、退いて此の廢院子を與ふ、素山田數畦、蔬圃二三畝あり、甘じて箇の禿頭の老農となつて、躬耕手種、聊か以て歳を卒ふるを分とす、亦以て自ら娛むに足れり、幸に憂懸を煩すことなかれ、但だ此の生の中、左 右及び 方山竺峰諸公の高躡に追隨して、嵩山に詣つて、祖塔を拜し罷んで、龍峰に歸つて、茗を啜り舊を話するを得んと欲するも、亦未だ得べからざるなり、徒に悵快を増すのみ、似かに聞く、上利嘗て元弘の兵火に罹つて、衆屋一燼すと、如今經營するところのもの、佛殿の一舉に止まるのみ、厨下清淡にして、時に或は米を俵にして日を度ること多しと、常人の分上ならば、必ず少勞慮なきを獲す、

① 易の文言に「同聲相應」と同氣相求む、水は濕に流れ、火は燥に就く、雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ」と、又文選、吳の季重魏太子に答ふる牋に曰く「臣幸下愚の才を得て風雲の會に値へり」と。  
 ② 存撫は恤安なり。  
 ③ 耳順、孔子曰く「六十にして耳順ふ」と。  
 ④ 左右、實翁をさす也。  
 ⑤ 方山、壽福方山元矩也。  
 ⑥ 嵩山、建長寺西來庵の山號也。  
 ⑦ 龍峰は佛燈塔なり、建長にあり。  
 ⑧ 上利、實翁の住する所也。  
 ⑨ 常人ならば心配もせようが、貴下は豪傑の士、斯かる小事に鑿鑿せられまじと、左右は實翁を指す、下亦同じ。  
 ⑩ 世故は世業也。  
 ⑪ 乃祖は佛燈禪師也。  
 ⑫ 問及云々、事の序に御尋に成



左右寛量大度、寧ろ復た目前の世故高懐に介するに足らんや、切に希はくは、乃祖の道危きこと累卵の如きを垂念し、槌拂に倦ます、正宗を發揮し、無窮の法利薄く迷徒を賑はゞ、是れ則ち愚不肖小弟等が渴望する所以に副はん、至祝至禱、問及の元泰は、今夏此に在つて聚首す、渠れ又日として左右の道風を慕はざるなし、怕らくは是れ秋涼宗禪を將ゐて、同じく去つて座下に執待せんも也た定まらず、姑く此に略布す、極熱、法の爲めに保蓄せよ、不宣。

又。

久しく上問を稽す、愧負劇だ深し、區々として東望、徒に懷仰を増すのみ、此日槌拂の餘、法候清勝、左右方に國に歸つて、未だ周歲に及ばざるに、辟命を榮領すること兩次、竊かに喜ぶ、巨瑞の遷、伊にあらすんば、師祖の法燈滅して再び燄するを後つべけんや、後來關東京師の名刹、屢々庸主を換ふれども、我が左右に到つて、猶ほ未だ登擢を聞かざるは何ぞや、胡爲ぞ、公道遽然として坎珂する、度るに亦、黒衣の宰相の議論、己を執して爾るか、凡そ叢林に意あるもの、孰か嘆息せざらん豈獨契眷の末のみならんや。左右の大節實行は、當に克く晚節に振ふべし、

つたあの元泰は、自分の會下で修行して居ますと。  
①稽は稽留なり。  
②左右は足下と云ふが如し。  
③辟命は公侯の命を云ふなり。  
④巨瑞は巨福瑞鹿の略、建長圓覺也、伊は向上の一者と見るを可とす、又賞翁とするも通す、前後皆左右と云ひ、茲に伊と云ふ、斟酌あるに似たり。  
⑤坎珂は差跌坎珂と用ひて、つまづくことなり。  
⑥黒衣宰相は佛祖通載に僧の惠琳才學を以て幸を天子に得、與つて政事を決す、時に黒衣の宰相と號す云々、此處蓋し指す處あり、而も何人なるを知らず。

切に冀はくは益々保蓄を加へよ、禱祝の極なり、去年の秋、西祖の頂山兄疾、既に亟かなり、愚を招いで、涕を垂れて訣別し、苦に其の徒に囑して曰く、我が渣然を待つて、愚を請じて用て遺席を補せよと、大いに欲するところにあらずと雖も、情義の在るところ、存没を以て其の心を二にするに忍びず、故に勉強して之に従ふ、小祥已に除いて、乃ち尺田の明禪に歸隱す、尋いで安國の灑掃に任すべきもの無きを以て、又諦兄に擲撥せられて、已むを獲ずして兩寺の間に往來し、分に隨つて常住に従事す、時に或は少冗煩慮するを免れず、報縁逃れ難く、累りに村院の主名に廢がる、自ら羞ぢ自ら笑ふのみ、輒ち少しく于聞に懇なるあり、僧嗣禪人は頂山兄鍾愛の子なり、人となり柔和質直にして、敢て衲子の過なし、本師に侍奉して八たび裘葛を更ふ、其の没するに及び、愚に従つて遊ぶこと又一年、蓋し佗の遺付を受くるのみ、徳に嚮ひ風を慕ふこと久し、特に去つて左右に依棲するを求めんと要す、其れ許さるゝや否や、渠れ亦茲に勤幹の資あり、事に蒞んで恐らくは失あらず、衣鉢閣の裡、如し其の人を闕かば試に之を用ふべきに似たり、伏して乞ふ、収録を賜へ、餘は望むところなし、此の間の刀子は古今名あり、只た剃刀底は和州の好きには如かず、適々人有りて一雙を

①渣然は奄忽を云ふ也、離廢に、寧ろ渣死以て亡すとも、余此態を爲すに忍びずと。  
②灑掃、住寺をいふ、卑下して而かひふ。  
③擲撥、俗にとらまへるの意なり。  
④于聞、于は、こゝ、ゆく、なす等の意ありて、茲に聞くなり、于歸、于歸などと熟字して、皆こゝの意にとれり。  
⑤衲子の過とは梶白縫逸の行狀を云へるならん、昔から靈的は奔馬の如くなれと見ゆ。  
⑥収録は收納記録を云ふ。  
⑦長船正宗は備前の産、蓋し其



寄せ来る、謾に此に馳納す、幸に<sup>①</sup>微澆を恕せよ、會見何れの日ぞ、書に臨んで<sup>②</sup>惘然たり、法の爲めに自重せよ、不備<sup>③</sup>。

又。

上覆す、茲に區々として奉屈すること佗なし、祇に共に苦茗を啜り、淡飯を食うて、少しく遠別の懷を慰せんと欲するのみ、想ふに亦人事繁冗にして、行李を打疊すること未だ辨せざらん、今既に敢て勉め強ひて到り請せず、前に進發の日<sup>④</sup>面違を賜ふを蒙るべきを許さる、至意を感戴す、然れども、迂回兩里の路なり、是れ許多の擔閣なり、切に下訪せらるゝなきを幸となす、乃ち米麵等の零碎の物子、件々少許り上納す、愧作量るべし、要兄候謁參隨す、<sup>⑤</sup>一舉他と商量せば好し、昨は數昏を以て神用を干瀆す、得罪得罪、餘は要兄に附して道達す、不備。

又。

再拜、明禪堂上和尚侍者、<sup>⑥</sup>三陽交泰して萬物榮を發す、伏して惟みれば、即辰尊候動止起居萬福、來る二十八日は、故靈叟の七周忌辰なり、是によつて<sup>⑦</sup>燈節以後、此に來つて佗の徒弟等と相共に<sup>⑧</sup>五部の大乘經を

看讀す、預め今日を取つて啓建す、忙冗に牽かれて、尙ほ上間に及ばず、獲罪の至なり、更に五日を過ぎ、看讀事畢らば、即ち上利に詣して、以て瞻拜の忱を竭さん、敢て望むらくは慈察せよ、不宣。

又。

久しく起居の間を致さず、<sup>⑨</sup>企仰益々深し、此日伏して惟みれば、壽體清勝、動止萬福、近ごろ<sup>⑩</sup>金峰の名藍に榮遷すと承る、是れ乃ち湖海衲子の共に欽羨するところ、矧んや吾儕<sup>⑪</sup>忝く友末に居す、忻慰豈言ふに勝ふべけんや、第恨むらくは、<sup>⑫</sup>相違すること濶遠にして、參慶するに縁なきを、只だ法席を望んで、徒に副情を馳するのみ、亦聞く、<sup>⑬</sup>象外和尚已に巨福を領し、<sup>⑭</sup>雲山蛋に<sup>⑮</sup>龜峰を董すと、意はざりき師祖の道、復た世に振はんとは、私かに以て喜となすこと少からず、某此の山中に在つて、粗衰晩を要す、<sup>⑯</sup>春薇秋栗、枯淡の中極めて味あり、惜しむらくは人の能く斯の樂を知るものなきを、<sup>⑰</sup>阿々、嗣兄昨に賜ふ所の手簡を齎して歸る、既にして路上<sup>⑱</sup>赤眉輩の爲めに奪得し去らる、以て教へらるゝ所の旨を知るなし、今に至るまで憾を抱くこと良に多し、便に因つて再び

以前より名刀を打ちしと見ゆ、刀子はかたなり、備前の刀は有名なれども、剃刀は大和の者がよい、然し一對貴ふたから進上しますと、歴史家の材料になりさうな記事なり。

① 微澆は汚賤也。

② 惘然、惘然自失などと云ふて、きぬけしたるを云ふ。

③ 行李打疊は荷ごしらへ也。

④ 面違、違は乖離なり、面會して離別する義。

⑤ 擔閣は中峰録十二に「焉鼻に頭を換回して、始めて從來自ら擔閣するを信ぜん」の語あり、譯者按するに、擔は負擔なり、閣は捨置也、或は擔ひ或は置く、故に手數の掛るの義に用ふるなり。

⑥ 一舉は俗に云ふ萬事と云ふが如し、萬事要兄と相談なさつたら好かるゝ、要兄は備前の人、神用は前出、神慮の意。

⑦ 三陽交泰、泰は易の地天泰の卦也、舊曆十一月は地復、即ち一陽來復に配し、同十二月は地澤臨、正月は即ち三陽交泰、易泰の卦傳に「坤陰上にあり、乾陽下に在り、天地陰陽の氣相交る、而して和すれば萬物生成す」と、又象に「天地交泰」と、泰の卦は下の如し、☳。

⑧ 燈節は正月十五日也。

⑨ 五部は華嚴大集大品般若、法華涅槃也。

⑩ 企仰、企は爪立つる也、爪立て、遠くを見る也、慕の切なる也。

⑪ 金峰、金寶山淨智寺、鎌倉五山の隨一也。

⑫ 違は隔離の義。

⑬ 象外和尚、圓覺桃溪德悟禪師法嗣也。

⑭ 雲山、圓覺雲山智越禪師也、



一字を示し及ばば幸甚、少懇に奉白す、此の椿禪者は乃ち智覺の法孫なり、人となり穩實にして薄英敏の資あり、學に進んで倦まず、恐らくは法器を成就せん者か、如今千里の艱辛を憚からず、特に往いて函丈に致拜す、其の志勤めたり、敢て希はくは一たび延見を賜はらば、眞に幸とせんものなり、區々たる所懐、百に一を盡さず、餘は惟だく萬々上大法の爲めに益々保齋を加へよ、不宣。

濟禪人に寄す。

昨日安國寺に到つて一宿す、齋罷んで明禪に歸るに當つて、早晨に偶々行李を檢點するに、忽ち前日惠まる綿襖を得たり、且つ驚き且つ愧づ、竊かに己が行解を付るに、尋常衆と同じく受用する底の粥飯すら、尙ほ其れ異時の鐵丸銅汁ならんことを恐るゝなり、何に況んや別に常住の巨費を領するをや、是れ虚飾謝遣して貪るなきの譽を求めんと要するにあらず、實に龍天の鑑裁を愧づるのみ、今抑へて之を受けしめば、更に地獄の業因を増さん、豈是れ道人の法友に推及する所以の義ならんや、重ねて取つて回納す、望むらくは慈容せよ、只だ恐らくは諸兄の厚意に負くことあらんことを、慚惶の極なり、不宣。

又。

早晨爲めに紙筆蓋子等を取つて、僕夫に撥遣し去り了れり、然も專价送り來る、感作の極なり、綿襖昨已に盛意に違拒す、何を以てか、憊を免れん、還つて過稱を蒙ること此の如し、惶愧曷ぞ言ふに勝ふべけんや、上元の後、必ず回るべし、餘は面既を俟つ。

無夢和尚に寄す。

某甲、拜覆す、雄峯前の前版座元禪師、遠奉せしより、既に是れ幾乎三十有餘年、然も一日として風采を瞻望するの中にあらざるなし、忽ち過訪を辱す、忻慰の至り、豈言ふに勝ふべけんや、第だ恨むらくは、象駕途に登ること太だ疾かにして、清談に陪従し、歎曲を究盡するを獲ざることを、羚羊皮一片、龜茶二袋、聊か微忱を表するのみ、幸に浼瀆を罪するなかれ、伏して慈亮を希ふ、道の爲めに自重せよ、不備。

震巖和尚に寄す。

揖別より倏ち晦朔を更ふ、唯だ日に馳仰を増すのみ、昨は忽ち手教を領す、時に洛中にあり、來人も亦急に回らんことを求む、仍つて裁答するに暇なし、因循として今に到る、愧悚の至なり、尊兄乍ち上刹に住す、恐らくは是れ不濟事多からん、道慮を干煩せん、然れども吾が兄才識超卓にして、量度宏深なり、誠を推して宗を護り、慈を垂れて物を拯ふを以て

- ① 無隱範師に嗣ぐ。
- ② 龜峯山壽福寺也。
- ③ 春薇はぜんまい也、古人の句に「黎羹飯中天地自然の淡泊を知る」と。
- ④ 赤眉は盜賊なり、綠林の豪、赤眉の賊、皆盜賊に代用す、後漢の初めに蜂起せしもの。
- ⑤ 少懇奉白は下の頼み事に係る語也。
- ⑥ 智覺は桑田の禪師號なり。
- ⑦ 寂室和尚嘗つて住院。
- ⑧ 鐵丸銅汁は、阿鼻地獄の苦也。
- ⑨ 龍天、護法龍天也。

- ① 感作、感激愧作也。
- ② 憊、とが也。
- ③ 上元は正月十五日、面既は面悉なり。
- ④ 舊注に、聖一國師の孫、無夢一清ならんと、一清は元に遊び道譽あり。
- ⑤ 過訪、來尋也。
- ⑥ 微忱は少しの誠也。
- ⑦ 不濟事は事をなさずの義より込み入りたる事件に用ひしならん。
- ⑧ 干煩、又干犯とも用ふ。



念となさば、則ち兇肝無狀の徒も當に自ら 衽を斂めて服膺すべし、凡そ  
忍の一字を消して、衆魔を調伏するの器械となすべきものか、稍々盜賊衰  
止し、路途の清平を待つて、即ち往いて展奉せん、面にあらずんば既すな  
けん、略布、不宣。

① 月心和尚に與ふ。

新命 定林堂上月心和尚座前、即辰伏して審かにす、公府の峻擢に光膺  
して、定林の名藍を榮領することを、惟だ重ねて佛燈の光輝を揚ぐるのみ  
にあらず、具に祖室の梁棟を 鼎新するを瞻る、矧んや月翁昔日最初開法  
の場にして、吾が兄今朝の應世此に權輿す、各自に道行時至ると雖も、是  
れ因縁際遇甚だ奇なり、大凡群祐咸く忻誠を増す、況んや復た孤貧忝  
く眷末に居す、多幸なり、弊庵と上刹と、相距ること多程に涉らず、竹杖  
芒鞋屢々詣つて清話に奉接せんとす、豈圖らんや衰暮に茲の佳期を獲んと  
は、日に象駕の過かに臻るを望んで、時に 犢廬を出で、佇立す、切に冀  
はくは快く猊座に登つて朗に雷音を振へ、人天を聳動せんことを何ぞ疑は  
ん、高く 巨瑞に遷らんこと、未だ晩からず、時にしたがつて珍育して、式

て願言に酬へ、不備。

② 三條殿に啓す。

某甲、誠恐頓首、謹んで三條殿 閣下に啓す、比日伏して承る、宸翰を下  
さると、言く、「山中平生提持の一句を進奉し、并に一日 長安の土を踏む  
べし云々、」茲者 某天を望んで香を焚き、跪き讀んで驚き且つ寤す、竊か  
に顧みれば、某 識性蒙昧にして道學空疎なり、退いて窮山に臥して、殘  
喘を盡すを待つ、寧ろ亦俚言の而も 窺覽に備ふべきあらんや、實に 明  
詔に應じ難し、唯だ深く自ら愧嘆するのみ、切に冀はくは閣下、區々の微忱を導いて、聖聽に上達せ  
よ、下情激切 屏營銘感の至に堪ふるなし、某、誠恐頓首、謹んで啓す。

① 衽を斂む、文選魏都賦に、「影坐首の蒙、錄耳の傑、荒服を服て衽を魏闕に斂む」と、即ち袖を斂めて帝闕の下に拜す也、先方に敬意を表するを云ふ。又心服するを云ふ。  
② 月心、南禪月心慶圓禪師也。  
③ 定林、美濃土岐郡定林寺、伯州太守の建つる所なり。  
④ 鼎新は新しきをとる也。  
⑤ 犢廬、犢廬などと同じ、自ら己の居を稱するに用ふ。  
⑥ 巨瑞、巨福山、瑞鹿山を云ふ。  
⑦ 按ずるに、三條殿は三條實繼、公豊の父子の何れかを指せるも、其何れなるを知らず、實繼は貞治六年内大臣に任じ、嘉慶元年出家、公豊は應永二年正二位内大臣、同年十一月出家とあり。  
⑧ 閣下は三公に對する敬稱、今の閣下などと稍同じ意也、古制を按ずるに、三公は天子と

禮數相違く、故に其闕を實にし、(黄を正色にして上位を示す)是れ漢の制なり、閣下の稱これより出づ。

⑨ 長安は京都を云ふ也。即ち京都五山の一に住持すべきを云ふ也。

⑩ 屏營は文選三十七の注に、颯也とあり、李善は驚惶也と釋せり。

⑪ 聖聽に上達せ



# 國譯永源寂室和尚語錄卷之四

## 法語

再び 手詔を賜ふに奉答す。

昔し 法常和尚、馬大師に問ふ、「如何なるか是れ佛、大師云く、「即心即佛、常言下に於て大悟す、便ち大梅山に往いて庵を卓して住す、馬大師聞き得て、僧をして去つて問はしむ、「和尚、馬大師に見へて箇の甚麼を得てか便ち此の山に住する、」常云く、「馬大師道ふ、即心即佛と、我れ者裡に向つて住す、」僧云く、「馬大師近日の佛法、又別なり、」常云く、「作麼生か別なる、」僧云く、「近日又道ふ、非心非佛と、」常云く、「這の老漢、人を惑亂して未だ了日あらざることあり、さもあらばあれ、爾は非心非佛、我れは只だ是れ即心即佛と、」僧歸りて馬大師に擧示す、師云く、「梅子熟せり、」恭しく惟みれば、辱く 手詔を下さるゝを蒙り、一句子を懇求したまふ、私かに顧ふ、某、法社の庸流、叢林の晩學、全く宗乘に味うして、退いて頑愚を守るのみ、竊かに念ふ、古徳云く、吾宗に語句なく、亦一法の

① 再び手詔を賜ふ。貞治元年壬寅、師七十三、帝復た手詔を給ふ。  
 ② 法常和尚、馬祖法嗣、大梅法常師也。

人に與ふる無しと、此の説の下、間に髪を容れず、直に得たり三世の諸佛も舌を縮め、歴代の祖師も聲を呑むことを、然も斯の如くなりと雖も、既に詔旨を賜ふこと更に及ぶ、逃避するところなし、勉強して如上の因縁を繕寫し、謹んで以て進奏す、伏して願はくは陛下萬機の餘暇、一切時中に、箇の即心即佛の四言を將つて宸襟に置き、大疑情を起して、勇猛精進に擧覺提撕したまへ、嘗て聽く、大疑の下に大悟あり、小疑の下に小悟ありと、疑ひ來り疑ひ去つて、忽爾として疑情破れば、則ち頓に本來の面目を見、明らかに本地の風光に徹せん、那の時、心を覓むるに終に不可得ならん、寧ろ復た何の佛と之云かあらんや、翅だ 報化佛頭を坐斷するのみにあらず、亦須らく唐虞の帝業を恢興すべきものか、至祝至祝。

鎌倉の源左典既に答ふ。(基氏)

願はくは公只だ疑情破れざるところに向つて參せよ、行住坐臥放捨することを得ざれ、僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く、「無」と、遮の一字子、便ち是れ箇の生死の疑心を破る底の刀子なり、遮の刀子の欄柄、只だ當人の手中にあり、別人をして手を下さしむること得ず、須らく是れ自家に手を下して始めて得べ

① 大疑。蒙山曰く、「大疑あつて必ず大悟あり」と。  
 ② 臨濟錄に、「道流山僧見處せば報化佛頭を坐斷す」と、言は佛法王法共に成就すべきを云ふ。  
 ③ 貞治二年癸卯師七十四、鎌倉元帥源公基氏心要を問ふと、蓋し之れに答ふるなるべし。  
 ④ 無。有無の無に非ず、眞無の無に非ず、眼を著けて參究すべき也と。  
 ⑤ 千疑萬疑。如來八萬四千の法門、祖師一千七百則の公案等を云ふ也。



し、又云く、「千疑萬疑只だ是れ一疑なり、話頭上に疑ひ破れば、則ち千疑萬疑一時に破る」と、又云く、「但だ長遠の心を辨取して、狗子無佛性の話と厩崖め、崖め去り崖め來つて、心之くところ無うして、忽然として睡夢の覺むるが如く、蓮花の開くが如く、雲を披いて日を見るが如くならん、恁麼の時に到つて自然に一片とならん、但だ日用七顛八倒のところ、只だ箇の無字を看よ、悟と不悟と徹と不徹に管するなかれ、三世の諸佛も只だ是れ箇の無事の人、諸代の祖師亦只だ是れ箇の無事の人、又云く、「僧趙州に問ふ、狗子に還つて佛性ありや也た無きや。」州云く、「無」と、只管提撕舉覺せよ、左來も也た不是、右來も也た不是、又心を將つて悟を等つことを得ざれ、又舉起のところに向つて承當することを得ざれ、又玄妙の領略をなすことを得ざれ、有無の商量をなすことを得ざれ、又眞無の無となして卜度するを得ざれ、又無事甲裡に坐在することを得ざれ、又擊石火閃電光のところに向つて會することを得ざれ、直に用心するところなく、心之くところなきを得るの時、空に落つるを怕るゝなかれ、這裡卻つて是れ好處なり、慕然として、老鼠牛角に入らば、便ち倒斷を見るなり、伏して承も、速く、台輪を馳せて、悉く工夫用心の旨訣を問及せらるゝを羸る、衰朽何人ぞ、仰いで

- ① 三世の諸佛。眼横鼻直別様の事なし。
- ② 左來右來。萬般の知見解會也、語を借りて云ふのみ。
- ③ 舉起の所。公案話頭を舉揚提起する處也。
- ④ 無事甲裡。又無事閑裡に造る、唐土棚を構へて重々に作り、甲乙丙丁の十千の字を以て銘に書す、第一甲の棚には一物をも置かず、故に之れを云ふ。
- ⑤ 老鼠云々。牛角に入れば出路なく、伎倆盡くる也。
- ⑥ 台輪。白氏六帖に三台星は三公之象、基氏公今三公に比する也、故に其書をしか云ふ也。

台誠を荷ふこと偏に此に至るや、下情慚惶の至りに勝ゆるなし、是を以て、大慧書中の數句を抄寫し、聊か嚴覽に備ふ、大凡そ話頭を提し工夫を做すは、最も捷徑簡直、成佛做祖の基本なり、然りと雖も、只だ當人の信得及に在るのみ、切に冀はくは、閣下箇の無字を將つて、鈞抱に置いて、四威儀の内、二六時中猛く精彩を著け、疑情を逼起して、參じ去り參じ來つて、間斷あるなくんば、所謂重昏麤散、浮念雜想、遣るを待たずして自ら遣らん、厥の志堅密にして不退ならば、參じて未だ透らず、悟つて未だ徹せざるも、八識田中<sup>①</sup>に在つて、永く道種となり、生々に人身を失せず、世々に惡趣に墮せず、再び出頭し來らば、一聞千悟せん、先哲の垂訓、豈人を欺かんや、假使臘月三十日に還到するも、生死魔軍甲を卸して歸降し、閻家老子<sup>②</sup>を斂めて服膺せん、夫れ之を横に金剛王寶劍を按じて、宇宙を坐斷する、没量の大人と謂ふものか。

月舟居士に示す。

參禪は猛烈大丈夫の事業、怯弱劣機の宜しく、趾及すべきところにあらざるなり、所以に云く、「若し戰を論せば、箇々力轉處にあり、亦云く、「一人と萬人と戰ふが如くに相似たり、」或は云く、「賊馬に騎つて賊を追ふ」と、

- ① 大慧書。大慧書問又は大慧覺禪師書といふ、大慧語錄三十卷中廿五卷より三十卷迄、即ち之れに當る。
- ② 鈞抱は胸裡、襟懷裡などに同じ。鈞はなもり宰相のむれの内。
- ③ 八識田中。中峰語錄山房夜語に、若し是れ箇の眞實、生死事大の爲めにする底の好人ならば、縱ひ是れ達磨世間に出現して、諸佛祖主要の道理を把り情を盡して、彼が八識田中に放在すとも、也た須らく根に化して吐卻すべく、何を以てかかくの如くなる、蓋し悟は、須らく自悟すべし、豈に他人半錢の事にあづからんや」と。



及び、臨濟の兒孫は單刀直入、恰も勇夫の敵に赴き、危亡を顧みざるが如し、然る後、腳踏地を踏み、手に吹毛を握つて、一斬一切斬、一了一切了、須らく是れ如上の體裁を具して、生死の魔軍を摧伏すべき者なるかな、昔し馮給事偈あり、云く、「公事の餘坐禪を喜ぶ、何ぞ曾て脇をもつて床に到つて眠らん、然も宰官の相を現出すと雖も、長老の名四海に傳ふ」と、又李駙馬云く、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち判す、直に無上菩提に趣いて、一切の是非管するなかれ」と、從上の士大夫の學道、かくの如く穩實に、かくのごとく勇猛なり、望むらくは、公、慕蘭希顔の志を奮發し、猛く精彩を著けて看よ、父母未生前、那箇か是れ本來の面目と看よ、時節到來して、幕地に瞥脱せば、心華燦發して、十方空を照さん、只だ久遠不退轉の身心を辨取して、綿々密々に究め來り究め去らんことを要す、假使ひ、今生に打未徹なりと雖も、生々に人身を失はず、世々に善處に生ずるを得て、眞正の知識に遇うて、之れ一聞千悟せんこと必せり、更に一句子あり、未だ筆を點せざる以前に向つて、兩手に分付し了んぬ、急に眼を著けて看よ。

廬山居士に示す。

參禪は猛烈大丈夫の事業なり、手に金剛王寶劍を掲げて、佛來魔來を問はず、若し之に嬰るあれば、屍萬里に横ふ、縦ひ威音那畔空劫以前に向つて行履するも、正に是れ階下の默漢なり、實に它の知解情量、葛藤露布のために、羅籠せらるゝ底の窺覷すべきところにあらざるものか、脱し遮般の田地に到らずんば、且く不是心不是佛不是物、是れ什麼の話頭に參せよ、二六時中、四威儀の内、萬縁を放下して、把つて一件となし、綿々密々に究め將ち去つて、間斷あらしむるを得ざれ、慕忽に桶底子を打破せば、方に本來の面目は只だ此の山中に在ることを知らん、廬山居士遠く來つて紙を出して語を求めて、警策とせんとす、筆を迅らして來命を塞ぐ。

絶倫居士に示す。

參禪は實に限々種々たる淺根劣機の宜しく企及すべきところにあらず、須らく向上の人の直下に坐斷し、横に吹毛を按じて、佛來るも也た斬し、祖來るも也た斬せんことを要すべし、更に甚麼の生死無明、菩提涅槃とか説かん、かくの如く行履し、かくのごとく受用せば、方に自己脚跟下の事と、少分相應せんものなり、其れ倘し或は這般の田地に到らずんば、只だ僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く、「無」の話

- ① 闍家老子。即ち闍闍王なり、鬼官の總司也、閻浮提の南二鐵圍山の外に當り、閻魔王宮殿ありと。
- ② 趾及。珍らしき文字なり、普通は企及と用ふ。
- ③ 吹毛は名劍、名刀也。
- ④ 給事は本朝の少納言に當ると、馮給事は即ち馮揖濟川居士也。
- ⑤ 李駙馬は、都城邊廬居士也。
- ⑥ 時節到來。瓜熟して蒂落つ、春秋の間營養何ぞ間斷あらんや

- ① 階下云々。金峰志禪師、僧問ふ、「四海安清の時如何ん、」師云ふ、「猶ほ是れ階下漢」と、默漢は痴漢に同じ。
- ② 葛藤露布。文字言句等、修業者の手足ままとひとなるを云ふ。
- ③ 方に云々。東坡詩集廿三、横看成嶺、側成峰、遠近高低無二同、不識廬山真面目、只緣身在此山中こと。即ち即心即佛也。
- ④ 限々種々。逡巡姑息を云ふ、限は水曲、種は風舞也、因つて義とする也。
- ⑤ 佛來斬。中峰廣錄、西祖露双



を將つて、二六時中行住坐臥、切に須臾も放捨することなかれ、一人と萬人と戦ふがごとく、亦頭燃を救ふが如く、綿々密々に力を著けて參究せよ、是れ什麼の道理ぞと、日久しく歳深くして工夫熟し、伎倆盡き、能所忘じ、知解泯して、忽爾として、漆桶を打破し、牢關を拶透せば、乃ち之を猛烈の大丈夫の事業と謂ふ者なるかな、絶倫居士特々として山中に來つて、語を需む、已むを獲ずして筆を迅らすと云ふ。

道觀禪門に示す。

弟子道觀、常に雲水の僧を接す、其の志實に嘉すべきなり、昔し宣律師、章駄天神に問ふ、「世間の功德何者が最大なる、天神の曰く、「齋僧の功德最も大なり」と、教中に又曰く、「三世の諸佛に供養せんより、一無心の道人に供養せんにしかず、汝今有心無心聖僧凡僧を揀擇するを須ひす、一味平等にして、用つて供養せば、如上の功德に超越すること豈惟に百千萬倍のみならんや、仍つて示すに偈を以てして云く、「齋僧の功德誠に測り難し、聖凡を問ふことなく同じく慈を運らすべし、若し是れ此の心長へに退かすんば、直に佛地に登らんこと何の疑かあらん。」

了清道人に示す。

僧、馬大師に問ふ、「如何なるか是れ佛、祖云く、「即心是佛、其の僧言下に大悟す、凡そ太だ近うして

見難きものは心なり、太だ遠うして、親み易きものは佛なり、心に迷へば則ち凡、心を悟れば則ち聖、全く男女老幼智愚人畜等の異なし、是の故に法華會上に、則ち南方無垢世界に往いて、寶蓮華に坐して、等正覺を成するは、豈八歳龍女の倣にあらすや、昔し巖頭和尚嘗て渡子となる、一婆子あり、兒を抱いて來り問ふ、棖を呈し棹を舞するは即ち問はず、婆子手中の兒子、何れの處よりか得來る、巖頭便ち打つこと一棒、婆子云く、「我れ七子を乳す、六箇は知音に遇はず、這箇も亦消得せず」と、乃ち水中に抛つ、是れ箇の婆子、便ち即心是れ佛に參得する底の様子なり、了清道人、紙を寄せ來つて、警策を求む、直に筆して以て贈る。

眞照居士に示す。

眞照居士、予に請ふて別稱を需む、因つて號して徹源と云ふ、蓋し名と實とは猶ほ影と形との如し、形を捨て、影を覓めば、是の處あるなし、實を捨てて名を覓むるも、亦復た是の如し、汝今既に此の名を得たり、其の實と相應するを得んと欲せば、正に宜しく生死事大無常迅速を以て念となし、乃しひ萬法一に歸す、一何れの處に歸すの話を把つて、綿々密々に參じ去り參じ來るべし、忽爾として萬法の根源に照徹せば、方に老拙の浪りに號を安せざるを知らん、亦豈塵勞を出でずして、聖賢の事業を成

劍を握つて佛來るも斬り亂來るも亦斬ると。  
① 大慧書に、「忽然として漆桶を打破し、一笑中に於て千了百當ならん」と。  
② 如上功德は未だ差別の相を離れず。  
③ 了清は尼歟。

① 親み易き云々。擧手、動足、左右、源に逢ふ也。  
② 八歳龍女。法華提婆品にあり、文殊の化導によりて諸法實相の理を悟り、釋迦佛の前に來りて變じて男子となり、南方無垢世界に成佛すと、女人に因ある故に擯出せる也。  
③ 巖頭嘗つて渡子となる。通塞志に曰く、「唐武宗、會昌五年、趙歸眞、李德裕等」と、天下の沙門をして悉く還俗せしむ、之れ沙汰の時也、頭即ち渡子となる、渡子は渡し守、又は



辨するものにあらずや。

昌宗道人に示す。

水潦和尚、馬祖に參じて、佛法的々の大意を問ふ、馬祖一踢を與ふ、潦遂に大悟す、乃ち曰く、「百千の法門、無量の妙義も、只だ一毫頭上に向つて根源を識得す」と、即ち呵々大笑す、平生衆に示して云く、「一たび馬師の踢を喫してより、直に如今に至るまで笑ひ未だ休せず」と、又た復た呵々大笑す、又良遂麻谷に見ゆ、第一番に見ゆるときは、谷便ち方丈に入つて門を閉卻す、渠れ疑着す、第二次に至るに及び、谷驟歩して菜園裡に去る、渠れ便ち警地なり、乃ち谷に謂つて曰く、「和尚、良遂を護するなかれ、若し來つて和尚に見えずんば、泊んど」十二本の經論に一生を賺過せらん」と、既に歸つて、徒に謂つて曰く、「諸人知るところ、良遂聰に知る、良遂知るところ、諸人知らず」と、昌宗道人紙を寄せて語を需め、進道の警策とせんとす、仍つて二則の因縁を寫して以て贈る、若し把つて無言無説とせば、則ち大いに賊を認めて子となすが如くに相似たり、爾らずんば、則ち馬祖、麻谷甚麼の指示のところあつて、它の二人斯くの如く悟り去る、

渡船場にて渡す者也。

⑤消得せずは。用得せず也。

⑥法華の註に、「舍利弗此比丘、比丘尼自ら己に阿羅漢を得て、其最後の身、究竟涅槃と謂ふて復た阿耨多羅三藐三菩提を志求せざれば、此輩は皆増上慢の人、所以何となれば、若し比丘あつて、實に阿羅漢を得たるもの、若し此の法を信ぜずとならば、是の處り有らず」と。

⑦生死事大。生じて來處を知らず、之れを生大といふ、死して去所を知らず、之れを死大と云ふと。

⑧萬法一に歸す。傳燈十八趙州章、「僧問、萬法一に歸す、一何の處に歸すと、師曰く、老僧青州に有り、一領の布衫を作り得たり、重きと七斤」と。

⑨警地なり。警脱悟了底也。

⑩十二本經は十二部經、又は十

汝只だ茲に於て猛く精彩を著けて、參じ去り參じ來れ、年深く日久しければ必ず須らく宗門下に果して大機大用奇特殊勝の事あることを知るべし、至祝至祝。

聖巖道人に示す。

龐居士曰く、「難々、百斛の油麻樹上に攤す、老婆曰く、「易々、百草頭邊の祖師意、靈照女曰く、「也た難からず、也た易からず、飢え來れば飯を喫し、困じ來れば睡る」と、聖巖道人千里を遠しとせずして、特々として來つて、予が巖居を訪ふ、其の志以だ嘉すべきに似たり。因つて如上の因縁を寫して、以て之に贈る、庶幾はくは之を座右に置いて、時々眼を著けて看よ、未審し三人の中、那箇を擇んで師とせん、若し優劣ありと謂はゞ、也た不是、優劣なしと謂はゞ、也た不是、二六時中四威儀の内、念々爾く、心々爾く、猛く精彩を加へて參取せよ、久しうして必ず飯は是れ米做する底の道理あることを知らん。

雪江禪閣に示す。(大悲の語は録せず)

法語の作、其の來ること尙し、大凡大眼目を具し、佛に代つて化を揚ぐ

二分教とも云ふ。所謂、契經

(素咀羅)重頌(祇夜)授記(和伽羅那)諷誦(伽陀)無問自說(優陀那)因緣(尼陀那)譬喻(阿波陀那)本事(伊帝目多迦)本生(闍他迦)方廣(毘佛羅)希法(阿浮多達摩)論議(優婆提舍)の十二種の内容を云ふ。

①二則。馬祖、麻谷因縁也。

②年深く日久しく。川潤ふこと九里。

③龐居士、一日茅廬裡にあり、坐して驚忽として云ふ、「難々、十碩の油麻樹上に攤る、老婆曰く易々眼牀に下りて脚地を踏むが如し、靈照女曰く也た不難也た不易百草頭上の祖師意と、靈照女は居士の女なり。

④古徳の語に曰く、飢來喫飯倦來眠。

⑤雪江禪閣は永源檀那崇永大居士、宇多天皇十一世の孫六角



る本色の宗匠にあらざるよりは、豈末學庸流の容易に擬すべきの事業ならんや、倘し或は勉め強ひて、倣うて之を爲すも、焉んぞ敢て妄談般若の誚を逃るべけんや、而今忽ち老拙が語を需めて、用つて警策となさるゝを辱うす、老拙深く、僭越を慮り、嚴命を沮むるあり、愧悚の極、大慧禪師呂舍人に答ふる一篇を録呈す、伏して希はくは、此に憑つて行すること久しければ、必ず悟明の日あらん。

禪達道人に示す。

六祖大師、章使君に答ふる、其の略に云く、「迷人は佛を念じて彼に生せんことを求む、悟人は自ら其心を淨む、所以に佛の言はく、『其の心の淨きに随つて淨土淨し』と、使君は、東方の人、但心淨ければ即ち罪なし、西方の人と雖も心淨からずんば、亦憊あらん、東方の人罪を造らば、佛を念じて西方に生せんことを求むべし、西方の人罪を造らば、佛を念じて何れの國に生ずることを求めん、凡愚は自性を了せず、身中の淨土を識らず、東を願ひ西を願ふ」云々と、大凡そ念佛は生死を脱せんと要し、參禪は心性を悟らんと欲す、未だ心性を悟る底の人、生死を脱せざるを聞かず、生死

判官氏頼公也、曆應元年十一月元服す、加冠は足利尊氏也、延文三年尊氏薨す、次で氏頼出家す、先妣菩提の爲め寺塔を瓶むること十三、本朝大般若經を刊行すること氏頼に始る。寂室和尚を江州叡笠山より請來して、飯高山永源寺を建て開山の祖となす。

① 管越は、自己大眼目なくして、法語を示すなり。嚴命を沮むるは、辭して法語を呈せずんば、誠意に戻る。仍つて已むを得ず、他の古人垂示の語を録呈すと。

② 禪達道人は元と淨家の人か。  
③ 章使君は紹州刺史章瑛也。  
④ 東方西方。古歌に云ふ、「限りなき心の空の廣ければ、雲より西もよそならんやは」と。  
⑤ 大凡云云。源俊基の末後の一偈に曰く、「古來一句、死なく生なし、萬里靈靈き、長江水

を脱する底の人、豈亦心性に迷はんや、當に知るべし、名異にして體同じきことを、然りと雖も、古人云く、「毫釐も繫念すれば三塗の業因、瞥爾として情生すれば萬劫の羈鎖」と、與麼なれば、則ち念佛も也た鏡上に塵を生じ、參禪も也た眼中に屑を著く、只だ此の如く信得及せば、則ち必ずしも相賺さず、禪達道人、念佛三昧を勤修すること此に年あり、忽ち余が室中に來つて、衣盃を授け兼て大戒を受けんことを請ふ、因つて日用の警策を需む、筆を迅らし、以て贈ると云ふ。

盲者通明に示す。

昔し阿那律尊者、睡眠を耽著す、佛呵して曰く、「蚌蛤の類なり」と、仍つて七日寝ねず、天眼通を發して、三千大千世界を見ること、掌中の庵摩羅果を見るが如し云々、汝眞箇に生死の大事に志あらば、須らく即心即佛の公案を將つて、時々擧覺し、處々に提撕すべし、一旦忽爾として漆桶を打破し去らば、之を頂門に正法眼を具すと謂ふものなるかな、那時豈翅に三千大千世界を見るのみならんや、百億の須彌、無量の佛刹、一毫頭上に在つて看卻して、更に餘りなきなり、至囑至囑。

嗣道禪者に示す。

學道の士は、先づ須らく身口意を慎護し、貪瞋癡を屏除して、名を視ることは浮雲に等しく、利

清し」と。よつて其生死の境其微性の如何を味ふべし。  
⑥ 毫釐。月元團々淨雲の能くこれを覆が故に、千種萬端なり。  
⑦ 庵摩羅果。庵羅、或は庵羅羅、或は庵羅婆利と云ふ。即ち柰を云ふ。之れを食す風冷を除く、時に手に是の果を執りたまふ。故に以て喩と爲と。



を棄つることは糞土の如くすべし、言を出すや詐僞虚妄を祛くことを要し、行を立つるや穩實端  
 潔を圖るを尊ぶ、任ひ世間種々違順の境縁に遇ふも、一々に夢幻空華の中に收在して、然る後已事  
 未だ明かならざるを以て、常に自ら勉勵せよ、古人すら尚ほ剪爪の暇を容さず、吾は是れ何人ぞや、  
 荏苒として一生虚しく光陰を度らんや、乃しひ能く精神を抖擻し、志力を奮起して、精進上に精進  
 を加へ、勇猛に更に勇猛を添へて、朝に參じ、暮に參じ、行にも究め、坐にも究めて、一旦漆桶連底に  
 脱去せば、頓に本來の面目を見、本地の風光に挿著せん、之を出家行脚の本志一時に酬畢する底の解  
 脱自在の活潑僧と謂ふものか、爾予が住庵を輔けて、七たび涼煖を更ふ、  
 一たび庫下に歸してより、今に到るまで、祁寒隆暑を憚らず、備に艱辛  
 を嘗め、井臼蔬圃の間に勤役し、敢て寧居するに違あらず、料想するに、  
 爾が日用の工夫、之が爲めに純密を致さざるなり、若し爾が道業を、成辨  
 するあたはざらしめば、職として我れに之れ由る、各誰にか歸せんや、今  
 日より去つて、庵中卒歲の計、都て懷に介むことを要せざれ、切に望  
 むらくは、生死事大を把つて、須臾も忘念せざらんことを、老拙力めて此  
 の葛藤を寫して、以て勞徠に代ふと云ふ。

旨廣禪人に示す。

① 祛は却に同じ。

② 夢幻空花。三祖心銘に、夢幻空花何んぞ把捉を勞せん、得失是非一時に放却せよと。

③ 剪爪の暇。舍利弗の舅俱希羅出家して梵志となり、西天竺に入り、誓つて爪を剪らず、十八種の經を讀めりと、蓋し寸陰を惜しむ也。

④ 抖擻は打拂ふなり、畢竟精を出すなり。

⑤ 涼煖は夏冬の意味也。

單傳直指の道は、實に情識の測るところに

あらず、得て名狀すべからず、所以に南岳は徒に古軌を磨し、龍潭は紙燭を吹滅し、徳山の棒は雨點の如く、臨濟の喝は雷轟の如く、香嚴の擊竹、靈雲の桃花、俱胝一生指を豎て、祕魔只箇に杖を擎げ、南泉は拂袖して便ち行き、永嘉は錫を振つて立ち、投子の油々、薦福の莫々、金剛圈と栗棘蓬、破沙盆と鐵酸漿、各々門庭を立つ、巨いに鋪席を開いて、箭鋒相拄へ、機境互に陳す、龍驤虎躍、電馳雷動、疾焰過風、奔流度刃、豈小根劣機の企及すべきところならんや、然も此の如くなり

と雖も、若し我が祖師門下に約せば、則ち唯に自己を埋没するのみにあらず、抑も亦宗風を忝辱せん、其れ或は未だ如上の田地に到らずんば

① 祁寒は酷寒也、祁は大也。② 去つて。以後と云ふが如し。③ 勞徠。書の堯典に、之を勞し、之を來しの語あり、勞徠は之に基く、蓋し勞するものは之を勞ひ、來るものは之を來すなり、之を勞ひ、之を來すは煩瑣の務なり、故に其勤めに剛ゆと云はれしなり。

④ 情識云々。非思量の所、情識測り難し。⑤ 南岳古軌は沙門道一との因縁。⑥ 龍潭吹滅。徳山和尚との因縁。⑦ 徳山雨點。佛殿を立てず、大凡そ僧の入るを看ては便ち棒すと。

⑧ 臨濟の喝。出世の後唯棒喝を以て徒に示す。⑨ 靈雲の桃花。靈雲禪師、瀉山に就いて大悟す、即ち桃花に由る也、偶あり、曰く三十年來劍客を尋ね、幾回か落葉枝

を抽く、桃花を一見してより後直ちに如今にいたるまで更に疑はずと。⑩ 俱胝の一指。師金華に住す、天龍和尚到る、師前夜の神夢を告ぐ、天龍一指を豎つ、師當下に大悟す、以來參學の僧いたれば一指を擎けて別の提唱なしと。⑪ 祕魔。五臺山祕魔和尚、嘗一木叉を持し、僧來つて禮拜するを見る毎に、頭を叉却して云ふ。那箇の魔魅か汝を出家せしむと、那箇の魔魅か汝をして行脚せしむ、道得するも又双下に死し、道得せざるも也た双下に死せん、速かに道へし學僧答ふるものあるなし。

⑫ 投子の油油。一日趙州諡和尚桐城縣に到る、投子禪師も又山を出づ、途中相遇ふも未だ相識らず、趙州潛かに俗士にきいて其投子なるを知つて、



但だ生死事大無常迅速を將つて、二六時中、造次顛沛も、孜孜兀々として、  
茲を念ふこと茲にあつて、一切の得失是非、苦樂逆順等、一時に放下せよ。  
然る後我が佛戒むところの事は、寧ろ身命を喪するも、敢て毫髪計りを  
違犯せず、山林を問はず、市朝を問はず、穩便の所在を得ば、乃ち打住  
して、一則無義味の話を提起して、與に參究せよ、著衣喫飯、屙屎送尿の  
處、一切時中、要す之を忘せざれ、寢を廢し餐を忘し、冰を噛み藥を嘗め、  
斯須少間も、徒らに光陰を喪するを用ひざれ、乃ち與麼に工夫を做さば、  
甚の三二十年とか管せん、只だ悟を以て期とせよ、日久しく歳深くして、  
念謝して慮消し、能所忘し、伎倆盡さば、忽然として桶底子の脱し、水底  
に火發するが如くに相似ん、然る後、千七百則の爛葛藤を返觀せば、豈嘗に  
飛埃の目を過ぐるが如くなるのみならんや、古人云く、「參禪に秘訣なし、  
只だ生死の切ならんことを要す」と、至祝至祝。

眞源禪者に示す。

法弟眞源、一日紙を出して法語を需め、日用の警策となさんとす、予謂  
らく、「法語は、道眼明白底、本色の宗匠の事業なり、其の宗説俱に通じ、

意句圓に活するを以て、衲子取つて參禪の標式とするのみ、是の故に、之  
を得るものは、隋珠卞璧を袖にして、家に歸るが如きなり、實に、單見  
淺識の流の容易に議するところにあらず、縱令勉強して作すも、唯だ佗に  
益なきのみにあらず、恐らくは、謗を己に招かんこと必せり、老拙法に於  
て未だ、夢にだも見ざるごとあり、語も也た曾て學得し來らず、筆を下す  
に分なきを爭奈せん、何に況んや、我宗に語句無く、亦一法の人に與ふる  
なし、此の説の下、間に髪を容れず、然りと雖も、汝今懇に請ふこと  
勤めたり、己を獲ずして此の屋裡の話を打す、汝は既に屋裡の人なり、想  
ふに亦外頭に出ださじ、今時學道の兄弟、十箇に五雙あり、知解の過患  
あるを免れず、汝知らざるべからず、纔に衆に入り來つて、手腳未だ穩  
かならず、無始曠劫の無明煩惱、未だ曾て一點も屏除し將ち去らず、又た  
嘗て著實に工夫をなさず、亦曾て箇の悟由を得ず、遽かに、他の從上過  
量底の人の説話を偷んで、以て己が有となし、口を開いて便ち道ふ、元來  
法の得べき無く、道の修すべきなし、三業必ずしも慎まず、諸戒必ずしも  
守らず、元生死の相なし、豈涅槃の心あらんや、」又云く、「一代藏經の文

乃ち逆へて問ふて曰く、「是れ  
投子の山主なることなしや、」  
師曰く、「茶鹽錢一箇を乞ふ、」  
趙州先づ庵中に到りて坐す、  
師後に一餅の油を携へて庵に  
歸る、趙州曰く、「久しく投子  
と嚮く、到り來れば但此賣油  
翁を見る」と、師曰く、「汝只  
だ賣油翁を見て且投子を識ら  
ず」と、曰く、「如何か是投子」  
と、師曰く、「油々」と。

② 罵福の莫莫。罵福承左禪師、  
僧問ふ、「大善知識何を以て人  
の爲めにす、」師曰く、「莫し、」  
曰く、「慙麼なれば、問あり、  
答あり、去るや、」師曰く、「莫  
し。」

③ 破沙盆。永明、延壽智覺禪師  
問ふ、「如何かは大圓鏡」師曰  
く、「破沙盆」と。

④ 鐵酸醜。五祖法演禪師、「某甲  
十有餘年海上參尋數人の尊宿  
に見ゆ、自「了當」と思へり、

後日雲門下に到り、一箇の鐵  
酸醜を齒破して直ちに百味具  
足するを得たり、且つ道謙  
子の一句作麼生か道はん」と。  
① 然る後云々。文意を按ずるに  
正に斯くの如く誓願すべし  
と、希望の邊に布辭せられし  
なり。

② 穩便云々。范蜀公、圓悟の行  
脚を勸むる文に、「成都況んや  
是れ繁華の國、打住只だ花酒  
の惑に因る」と。

③ 隋珠は隋侯の珠、隋侯齊國に  
住きて一蛇の沙中にありて頭  
上より血出るを見る杖を以て  
挑れて水中に放つ、後回りに  
蛇の所に到る、乃ち蛇の一球  
を啣みて來るを見る隨侯敢へ  
て取らず、夜夢に脚下に一蛇  
を踏む驚き覺めて珠を得た  
り、光明日の如く輝く、號し  
て隨侯の珠と云ふ、卞璧は卞  
和の璧也、秦昭王十五城を以



は瘡を拭ふの故帯、千七百の公案は、腐爛の葛藤なり」と、忽ち人に如何なるか是れ禪と問著せられて、便ち拳を擧て、喝を下し、目を怒らし、眉を擡へて、胡亂に支へ將ち去る、甚だしきものは、佛を罵り祖を呵し、神を欺き鬼を瞞じて、因果を撥無し、事として爲さざるなし、之を地獄の滓と云ふ、佛も也た救ひ難し、有る底は、聰明の資を以て、内外の典籍を漁獵し、言と談じ、妙と談し、心と説き、性と説き、江月松風を諷詠して、心地の印となし、青山綠水を和會して、本來の身となす、有る底は只管淨潔の球子を打して、是句も也た刻り、非句も也た刻り、但だ一塵立せざるところに向つて行履す、全く知らず、箇は是れ 陰識の會通なるを、更に一等の人あり、諸家の語録を把つて數百句を抄寫し、一冊となして懷中に收在し、密々に背取して、到るところ互に相問酬す、一句多き底は、憍慢の色面に溢れ、一句少き底は、忿懣の氣胸に塞る、者般底の參禪に似たらば、如何か生死に敵し得ん、臘月三十日到來せば、悔ゆとも將た及ばざらん、汝既に箇の事を知らば、須らく是れ歩を退け、己に就いて、眞參實究し去るべきなり、老拙汝が爲めに、輒ち十件の要須を述して、具に後に

て之を買はんとす皆名玉也。  
① 夢にだも云々。孔子曰く吾復夢にたも周公を見ず徳の衰へたる哉と。  
② 十箇に五雙ありは、十人が十人皆知解の過愚ありと、下に掛けて云はれしなり。  
③ 之を地獄の滓と云ふ。人間の滓どころでない、地獄の滓じやと、かんで嘔き出す様に云ふてある。  
④ 漁獵。唐史に「經史を見ること猶ほ漁獵の如し」と。  
⑤ 陰識會通。中峰廣錄山房夜話に曰く「或は靜默の中に坐して、塵勞暫息の頃に於て、忽ち陰識中に於て遽に箇の相似底の道理を省得する有れば便ち依約して是となし、經本中の語言を句引して證果して心中に含む、知らず此病是れ陰識の會通、眞の生死の本にして、見性に非ざるを」と。

在く。汝當に齒を没ふる迄、遵守して行すべし。庶幾はくは虚に、袈裟下の士と作らざらんことを。

- 一には、生死事大無上迅速、須臾も忘念せざらんことを要須す。
- 二には、行住坐臥、身心を檢束して、律儀を毀犯せざらんことを要須す。
- 三には、偏空を執せず、精進に誇らず、二乗の見到に墮するなきを要須す。

- 四には、意を攝し、語を慎み、日夜靜坐して、閑妄想を遠離せんことを要須す。
- 五には、照々靈々を認めて、<sup>①</sup> 黑山下の鬼窟裡に坐するなきを要須す。
- 六には、寢を廢し餐を忘じ、壁立萬仞にして、鐵脊梁を堅起せんことを要須す。

- 七には、父母未生前、那箇か我が本來の面目と看んことを要須す。
- 八には、話頭に參じて、工夫綿密なりと雖も、急に悟明を求むるなきを要須す。
- 九には、寧ろ發明せずして百千劫を経るも、<sup>②</sup> 第二念を生ぜざらんことを要須す。
- 十には大心不退、大法洞明、佛の慧命を紹續せんことを要須す。

陰識は五陰、意識也。  
① 二乗は聲聞緣覺の二門也。  
② 黑山下。圓悟心要上に曰く、「終に肯て言句の中、話頭古人公案の間に向つて埋没し、鬼窟裏、黑山下に向つて活計を作さざれ。」  
③ 第二念とは初めの一念の變ずるを云ふ、舍利弗因地に菩薩の行を修す、第六住にいたり波羅門のために眼睛を乞はれて終に大心退轉して、今日親しく釋迦の弟子となり、小乗聲聞の行を修し、最后法華會坐に於て得記せり、かくの如く途中の變心を云ふ也。



希運大師に示す。

世間一切の憎愛取捨、得失是非、顛倒妄想等の念慮、一時に放下して、須らく死了燒了、那箇か是れ我が性の語を將て、二六時中、綿々密々に、間斷あるなく、參究し去るべきなり、是れ乃ち生死岸頭に臨んで、大いに得力底の消息なり、此を除いて外、別に方便なし、至囑至囑。

明大師に示す。

元男女の相なし、寧ろ迷悟の間あらんや、若し明かに本來の面目、本地の風光を見んと要せば、只だ、四大分散の時、甚麼の處に向つて安身立命せんの話をして、二六時中、斯須少間となく、究め來り究め去れ、古人云く、「參禪に秘訣なし、只だ生死の切なるを要すし」、所以に世間の憎愛取捨、得失是非、凡そ目前の一切の境縁、一時に放下して綿々密々に參究し去れ、歳深く日久しくして、工夫純熟せば、忽然として睡夢の醒むるが如く、蓮華の開くが如くならん、那の時甚の生死の怖るべく、涅槃の求むべきあらん、劉鐵磨尼總持が輩と、手を把つて共に行かば、豈平生を慶快するものにあらずや、明大師孜孜として、道に在り、一日紙を袖にして日用の警策を需む、因つて筆を迅らせて之を書すと云ふ。

① 死了燒了云々、元代の宗匠、鐵山紹瓊禪師の垂示の語なり、禪師の墨痕、時に日本に傳ふ、極めて能筆なり。

② 四大分散。四大は地、水、火、風を云ふも、元箇々別々の萬物無し、四大假に和合して形色をなし、何ぞ自我生死あらんや。

③ 劉鐵磨尼。滄山門下、總持初祖門下共に比丘尼なり、明大師

元參禪人に示す。

古人云く、「參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし、是故に善財は五十三人の知識に參じ、汾陽は七十餘員の知識に參ず、大凡佛祖より以來、大機を發し、大用を顯し、宗旨を立し、法幢を建つる底の人、參の字の上より出頭し來らざるものあるなきなり、汝が諱は參なり、身も亦參禪流輩の中に處る、尤も宜しく志を奮ひ、精を勵まし、跋渉を憚らず、師を尋ね友を擇ぶべし、忽爾として警頭の宗匠に撞著し、惡辣の鉗鎚を喫盡して、直に妄識妄情をして、箇の妙解妙會に和して、一時に蕩除せしむ、然る後、灑々落落、超宗越格、俊快伶俐の活漢と做り得ん、豈偉ならずや、其れ或は未だ然らずんば、萬慮を泯絶し、諸縁を放捨して、一則無義味の話頭を把つて、四威儀の中、少間斷なく、參じ去り參じ來れ、甚の十年五歳とか説かん、假使百劫千生も、悟らずんば休せざれ、是の如く信受し、是の如く操守する、之を眞の本色の道人と云ふ、若し如上の二途を離卻して、諸の道業に於て一として辨ずるところなく、終日閑散、無根を游談して、荏苒として、空しく一生を過さば、舊に依つて六趣に輪轉

尼なる故に、之を配する也。道に在りは、念慮道を明むるにあるなり。

④ 實參。神鼎洪諷和尚嘗て數書宿と襄澗間に至る、一僧宗乘を擧げて頗る敏捷なり、師曰く、「三界唯心、萬法唯識、眼聲耳色、是れ甚麼人の語ぞ、僧曰く、「法眼の語、師曰く、「其義如何」、曰く、「唯心なるが故に根境相到らず、唯識なるが故に聲色從然」、師曰く、「舌味是れ根境なりや否や、曰く、「是」、師箸を以て菜を筴し、口中に置き、含糊して語げて曰く、「何ぞ相入る」と謂はんや、坐者駭然たり、僧答ふる能はず、師曰く、「途路の樂、終に家に到らず、見解微に入るも遂に見道と名づけず、參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし」と。

⑤ 善財童子。南方五十三の善智



せん、偏ひとへに徒たに參禪さんぜんの名なのみあつて、全く悟入ごにふの實じつなきが爲ためなり、愧はづべし、畏おそるべし、之これを思おもひ之これを勉つとめよ。

秀格禪人に示す。

汝なんぢが年とし甚しばだ少すくしと雖いへども、言ことを出いだすこと頗すこぶる以をて老おいいたり矣つね、常だうじうに道友だうじうに語つげて云いは、「某甲そがし、忝かたじけなせんて、芋いもを煨ういして涕なだを唾たれ、茹はうを移うつして深しんに入るのかうふう高風かうふうを慕したふこと久ひさし、異時いじ必ず須すべらく、我われを巖谷がんこくの中に索もとむべし」と、其そのの志こころざし尚ぜんほ善ぜんは則すなはち固まことに善ぜんなり、惟ただ師友しいうを遠離えんりして提誨ていかいを聽きくなく、閑遊安眠かんいうあんして甘あまんじて庸輩ようはいに墮だせんことを恐おそる、汝なんぢ當たまに深ふかく空山くうざん 閨爾けにじとして辨道べんだうに便たよりあるを念おもふべし、生死しやうじは呼吸こきふにあり、如何いかんぞ虚むなしく日ひを度わたらん、幸さいはひに現成げんじやうの公案こうあんあり、今汝いまなんぢに擧こせし、僧そう 古德ことくに問とふ、「如何いかんなるか是れ清淨しやうじやう法身ほつしん、云いは、山華さんくわ開ひらいて錦にしきに似にたり、澗水かんすゐ満みて藍あゐの如ごとし」と、又問またとふ、「深山しんせん巖崖がんがい還かへつて佛性ぶつじやうありや也なた無なきや、云いは、石頭せきとう大底だいたいは大だい、小底せうていは小せう」と、猛たけく精彩せいさいを著つけて看みよ、是れ什麼なんの道理だうりぞと、蒲團竹椅ふとんちきの上うへは、良よに言ことに在あらざるなり、薪たきぎを採とり葉はを拾ひろひ、圃はたを鋤すき溪たにを汲くむところ、正まさに好よし參究底さんきうていの時節じせつあり、忽爾こつじとして 祖關そくわんを透得とうとくし、己事こじを發明はつみんせば、之これを自

識しに參まじ、終はつに彌勒みらくに見みゆと。  
②汾陽ふんやう。汾州ふんしゅう太子たいし院いん善昭ぜんしやう禪師ぜんじ、剃髮ていはつ受具じゆ杖じやうを策さくいて遊方いうほうす、至いたる所ところ少すくく留とどる、機きに隨したがつて叩發くわふつす、知識ちきしき七十一員しちじゅういちゑんに歴參れきさんし後に首山しゆざんに到いたる、百丈ひやくぢやう席せきを卷まいて「意旨いし如何いかん」と問とふ、山曰さんいく、「龍抽りゆうしゆ拂開ひつひして全體ぜんたい現あらす」と、曰いく、「師しの意い如何いかん」、山曰さんいく、「象王じやうわう行ゆく所ところ狐蹤こしゆを絶たす、師し言い下に大悟だいごす、拜起はいきして曰いく、「萬古まんこ碧潭ひつたん空海くうかい月げつ、再三さんさん撈ら携たして始はめて應おに知しるべし」と。

③贊頭さんとう。未なだ明解めいげに接せせず、蜀しやくの方かたの方語かたごなり、「つむじまがり」と云いふが如ごとし、語錄ごろく詩文しぶんに多く使用しゆじゆうす、元布げんぷ袋ふくろと云いふ和尚わしやうへの印可いんかに、圓悟えんご頌しゆして、「平生へいぜい只說ただいふ整頭せいとう禪ぜん、撞つ著ちやく整頭せいとう、如ごとく鐵壁てつへき」の句くあり、「いちぢわる」と見みれば、差支さしなき様ようなり。

證自悟じやうじこの活道人くわつたごんと謂いふものか。

又。

大凡人おほびとの子こたるものは、父ちちの氣分きぶんを稟うく、天下てんか古今ここん理りの然しからしむる所ところ以もなり、必かならず求もとめて之これを得え、學まなんで之これを取とるにあらず、汝なんぢ余あなが室むろに入いつて、余あなが法子ほつしたり、然しかく癡頑ちくわん疎慵そゆうの性せい、余あなと毫釐ごうりも差さはず、益々ますます夙生しゆくじやうに師資ししの緣熟えんじやくするを感かんず、其そのの性せいや既すでに而しかく相あひ同どうじ、其そのの跡あとも也なた寧なろ然しからざるべけんや、汝なんぢ須すらく余あなが溘か然ぜんの後のちを俟まつて、三箇さんこ五箇ごこの所在しよざんと雖いへども、人ひとと首かうべを聚あつめて遊處いうしよするを要せうせざれ、只ただ溪邊けいへん林下りんかに去さつて、旋やや尖頭せんとうの茹はう廬いを縛ひして、形影けいゑい相弔あひたうし、分ぶんに隨したがつて修持しゆぢして、此このの生しやうを終おへんことを謀はかるべきなり、余あなに緊要きんやうの一訣いつけつあり、寶秘ほうひすること久ひさし、今當いままに汝なんぢに付つすべし、輕かろしく人ひとに語かたるなかれ、汝なんぢ毎まい日にち晨しんに興きやうきて、先まづ須すらく手てを引ひいて自みづから頭顱づらうを摩なで、亦また目を以もつて身上しんじやうの袈裟けさを顧かへみて、心こころに念ねんじ口に演えんすべし、吾われは是これ釋迦しやくか文佛もんぶつの遠裔えんゑいなり、縱たとひ使さ喪身さうしん失命しつめいするも、誓ちかつて毘尼びにの規き範はんを壞こせすと、至し囑しよく至しよく囑しよく。

應山善庵主おうざんぜんあんじゆに示しす。

- ①秀格禪人は江州高野佛日山退藏寺、第一世圓照佛慧禪師也。
- ②志尙。尙は高尙の尙、易に曰く、「王侯に仕へず、其事を高尙にす」と、志尙は志の高尙なり。
- ③闍爾。寂靜なることを云ふ。
- ④現成公案。傳燈睦州章に曰く、「師、僧來を見て云ふ、見成公案汝に三十棒を放たん」と。
- ⑤古德は大龍和尚。
- ⑥言に在らずとは、猶ほ勿論と云ふが如く、言ふ迄も無し之意。
- ⑦大龍歸宗等の答話を指す。
- ⑧眞情流露の文、詞意又未だ人の道破せざる處、一讀爽然たり。
- ⑨師資。善人は不善人の師、不善人は善人の資と、即ち師弟を云ふ。
- ⑩尖頭云々、老素首座山居の句に、「尖頭の屋子低きを嫌は



昔し出家學道の流は、才かに衆に入り來つて、  
 ①三篋腰を縛し、執爨負舂し、勞苦を憚らず、  
 殆んど危亡に臨んで顧みず、蓋し法の爲めに軀  
 を忘るゝのみ、所以に、②盧郎は碓を黃梅の糟  
 廠に踏み、③演祖は磨を白雲山中に主り、  
 ④百丈は大義を説かんだために、預め田を  
 開き、⑤木平は新到を見る毎に、其れをして土  
 を搬ばしむ、或は薪を折つて榮枯を論じ、或は  
 ⑥茶を摘んで體用を辨じ、或は⑦井を掘んで肩  
 に上せて擔を折つて道を悟り、或は⑧桶を束ね  
 手を失し、地に墮して禪を了す、皆是れ外は盡  
 日務に順做して奔波するが若くなれども、内は  
 須臾も參玄の正念を忘れず、故に往々に一機一  
 境に、築著、碯著す、方に知る、此の事は必ず  
 しも竹椅蒲團面壁靜默の中にあらざることぞ、

上に長林あり下に池あり、夜  
 久しくして驚鷹黃葉を掠むる  
 を、恰も蓬底雨來る時の如し  
 と。

⑦形影相弔し、李劉伯陳情の表  
 に「執々として孤立して形影  
 相弔す」と、其獨り語るべき  
 なきを云ふ、然れども道を以  
 て友とす、一人即ち萬人、一  
 心即萬象也、又何の闕爾たる  
 ことかあらん。

⑧三篋腰を縛す、會元五に、馬  
 祖藥山に告ぐるの語に「三條  
 の篋をもつて、肚皮を束取し  
 て、隨處に遊山し去れ」とあ  
 り、之に原く、篋は葛なり、  
 葛を以て帶に代ふるなり、船  
 屋を葺くの竹篋とは別なり。  
 ⑨盧郎は即ち六祖慧能禪師也。  
 ⑩演祖主磨、會元十九、五祖演  
 禪師章、白雲に至り、遂に僧  
 南泉に問ふ、摩尼珠の話を舉  
 す、雲之を叱す、師領悟す、

す、投機偈を獻じて曰く「山  
 前一片の閑田地、又手丁寧に  
 祖翁に問ふ、篋度賣り來つて  
 還た自ら買ふ、爲めに憐む松  
 村の清風を引くことを」と。  
 ⑪百丈開田。百丈山涅槃和尚、  
 一日衆に謂ふて曰く「汝等我  
 と田を開けよ、我汝がために  
 大義を説かん、衆田を開きた  
 つて歸つて大義を説かれんこ  
 とを乞ふ、師乃ち兩手を伸ぶ、  
 衆措くことなしと。

⑫木平搬土。會元六袁州木平山  
 の普道禪師章、凡そ新到あれ  
 ば未だ參禮を許さず、先づ土  
 三擔を運ばしむ、而して偈を  
 示して曰く「南山の路側たち  
 東山低れり、新到辭する勿れ  
 三轉の土、嗟す汝が途にあり  
 て田を經ること久しきこと  
 を、明々として曉らすんば却  
 つて途となる」と。  
 ⑬茶を摘むは瀟仰禪の話を云

吾が應山善公、空門に入つてより以來、未だ嘗  
 て①一雲も偷安逸體せず、初め松泉を開き、今  
 明光に據つて、山を鑿り址を夷げ、崖を穿つ  
 て泉を引き、松を栽る、竹を種る、籬を縛り、  
 圃を鋤くに、咸く躬をもつてなし、敢て人を役  
 せんことを欲せず、酷だ古徳の風度あり、遐邇嘆  
 服せざるなし、老拙公と②傾蓋の日久しからず  
 と雖も、其の義情の濃厚なること、喩をなすに  
 よしなし、一日紙を出して字を求む、之を寫し  
 て以て其の請に酬ゆと云ふ。  
 ③是乘知客の居山するに示す。  
 上古の禪衲は、千峰萬嶽、幽巖邃谷の間に韜  
 晦して、④身世兩ながら忘るを得、草木と俱に  
 腐るもの、計ふるに勝ふべからず、吾が佛も亦  
 説く、寂靜無爲安樂を求めんと欲せば、當に

ふ。

④井を對むは、天衣懷禪師の話  
 頭也、曰く、明覺を翠峰に禮  
 す、尋いで水頭となる、水を  
 汲み擔を折りて忽ち悟る、投  
 擔偈を作りて曰く「一二三四  
 五六七、萬仞峰頭獨足にして  
 立つ、驪龍領下明珠を奪ふ、  
 一言勘破す維摩詰、覺闍いて  
 几を拊つて善しと稱す。

⑤束桶了禪。會元十二、雲峰文  
 悅禪師、大愚曰く「今日雪寒  
 し、衆の爲めに炭を乞へ」と、  
 師又命を奉ず、能事畢つて又  
 方丈に至る、愚曰く「堂司人  
 を闕く、今以て汝を煩はす」  
 と、師之れを受く、樂します、  
 愚を恨むること心に去らず、  
 後架に地坐す、桶籠忽ち散じ  
 て、架より墮落し、忽焉とし  
 て開悟すと。

⑥築著碯着。會元七、保福院從  
 展禪師、師因に僧侍立す、問

うて曰く「汝恁麼に驢心なる  
 ことを得たる、」僧曰く、「何  
 れの處が是れ某甲驢心の處」  
 と、師、一塊の石を拈じて僧  
 に度與して曰く「向門前に抛  
 てよ、僧抛ち了つて卻來して  
 曰く「甚麼の處が是れ某甲驢  
 心の處、師曰く「我築著碯着  
 することを見る、所以に汝を  
 鹿心なりと云ふ」と。

⑦一雲は一寸などの意に同じ。  
 ⑧傾蓋。一村雨の宿に相逢ふて、  
 知音になるを云ふ、又家語に、  
 「孔子鄭に之く、程子に塗に  
 遭ふ、蓋を傾けて語る、終日  
 甚だ相親し」と。  
 ⑨雪舟是乘知客也。  
 ⑩雲臥紀談の序に曰く「予始め  
 南閩より出て、遠く江表に歸  
 る、草木と俱に腐るゝことな  
 分甘して、茅を城山に誅して、  
 尙書孫公仲益の書する所の雲  
 臥庵の字を以て焉れに掲ぐ、



闔閭を離れて、獨處に閑居すべし、乃至若しくは山間に於ても、若しくは空澤の中、若しくは樹下閑處靜室に在つても、所受の法を念じて、忘失せしむるなかれ」と、何に況んや、叢林衰替して、看て眼に上らず、苟も辨道に意あるの人は、彼の境界を望んで、當に蚊虻の窟を畏れ、蠱毒の郷を避くるがごとくすべきのみ、雪舟乗知客、京師相陽の諸刹を徧歴して、寒酸の風味を嘗め盡す、而して乃ち衣を拂つて遠引し、林丘に臥せんことを圖る、去秋此に來つて同志五七輩と、首を蝸屋の下に聚め、一冬を過ぎ訖つて、猶ほ山の淺きを嫌ひ、且つ深きより深に入らんと欲す、其の高尙の趣、以だ嘉すべきに足れり、大抵學道の要は、最も明心を貴ぶ、明心の捷徑は、只だ生死の切なるにあり、生死切なるときは、即ち頭々物々、在々處々、我の警策たるにあらざる者なし、何ぞ必ずしも、師友に求むるを假らんや、谿聲山色、白雲青松、凡そ見聞に屬するもの、一々汝が爲めに禪機妙用を助發するものか、所以に古人云く、「本來の心を識らんと欲せば、青山綠水深し」と、又云く、「心外無法、滿目の青山」と、之を思へ、之を勉めよ

公又詩を以て寄せらる、身也兩ながら相違ふ「雲閑に臥して飛ばず」之句あり、蓋し其れ予を知るもの也」と。

⑦眼に上らずとは、眼に上ずには堪へずの意、見れば目の汚れなり。  
⑧蠱毒の郷、蠱の毒たるや、醫書に載する所數種ありと雖も、而も中土之れを見る少し、古今相傳ふ、多く是れ閩、廣、深山の人、端午の日に於て、蛇虺、蜈蚣、蝦蟇の三物を以て同器に之れを貯へ、其互に相食啖するを聽き、一物獨存せるを待つ、則ち之れを蠱と謂ふ、其人を害せんとせば、其毒をとりて酒食の中之れを啖はす、雪峰の贊に曰く、「蠱毒郷に生る、寧ろ小過なからん」と、福建路、廣南路に此人を殺す邪法あり、宮中甚だこれを禁ず、雪峰は福州にあ

① 簞侍者に示す。

簞侍者は、雪村和尚の高弟なり、天資聰俊にして、事業絶倫なり、異時祖庭の末運を扶起せんもの、兄にあらずんば誰ぞや、一日忽ち學解機智の道に輔けなきを省して、掃蕩淨盡して、元字脚を留めず、孜孜兀々として寸陰を棄てず、自己躬下の事を究明す、亦去つて亂山の深うして更に深き處を尋ね、一平生を盡して、永く名字をもつて、人間に落さざらんと欲す、甚だ敬愛すべきかな、切に煨芋の烟を放つて戶外に出でしむるなかれ、恐らくは是れ九重城中に薰徹して、誤つて詔書を引いて雲に入らんのみ、正に宜しく慎護すべし、正に宜しく慎護すべし、老拙別に臨んで、一聯 落韻の詩を吟じて、之に贈ると云ふ。  
② 隱山は庵を焼いて何の處にか去る、大梅茆を移して跡已に空し、今日君丘壑の志を懷いて、千歳の舊高風を挽回す。

正印大師に示す。

昔し僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、州云く「無」と、只だ這の一字、便ち生死の命根を截斷する底の利器、本來の面目を照

り、故に蠱毒の郷といふ也。

①のものが、寂室禪師は謙恭の人、故に文中斷定を下すべき處に往々謙して疑問の詞をなす、大抵一文中一箇兩箇あらざるなし、此處亦然り、讀者例して知るべし。

② 古人云は、大慧普說に曰く、「修山主の道ふ、本來の心を知らんと欲せば、青山綠水深し、是れ心身の境にあらず、徒に聞見を以て尋ねんとす、識得せば即ち識取せよ、更に沈吟を用ゐず」と、又天台韶國師、通玄峰頂、是れ人間にあらず、心外無法、萬目青山」と。

③ 簞侍者は雪村友梅の弟子なり、村は南禪寧一山に嗣ぐ。  
④ 寸陰、大禹は聖人也、即ち寸陰を惜む、衆人に至りては當さに分陰を惜むべしと。(陶侃



破するの鏡光なり、汝只だ二六時中、四威儀の内、諸縁を放捨し、打成一片、鐵槌子を咬むが如く、栗棘蓬を呑むに似て、參じ去り參じ來つて、斯須少間も退志あるなかれ、忽爾として漆桶を打破せば、心華發明して、十方空を照さん、那の時縦ひ尼摠持劉鐵磨と雖も、也た須らく枉を斂めて伏膺すべきものか。

南大師に示す。

汝只だ須らく勇猛向道の力を勵まして、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅を把つて、束ねて一箇の無字となして、大疑團を起して、孜孜として參究せよ、則ち、正に堅兵嚴城の犯干すべからざるに似て、所謂昏散等の諸魔、色聲等の六賊、崖を望んで退くべし、此の志久遠不變ならば、何ぞ悟明の日あるなきを患へんや、我れ今生死事大無常迅速の八字を大書して以て汝に付す、好し收拾し去つて、切に須臾も身邊を離卻することなかれ、才かに工夫間斷あるを覺ゆるの時、當に取つて之を見るべし、其の策發勸誘の功、百千の良導善友と雖も、以て諸に逾ゆるなけん、至祝至祝。

龍禪者に示す。

參學の要は、専ら己事を洞明するにあり、若し直捷相應じ去らんと欲せば、只だ僧趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く「無し、」の話を將つて、大疑團を起して、孜孜として打捱せよ、忽爾として上頭の關槌子を撞翻せば、惟だ生死の根株を抜却するのみにあらず、佗の佛病祖病に和して、同時に打失せん、那の時龍の水を得、虎の山に靠るが如くに相似て、平生を慶快せん、豈躋ならずや、龍姪病中に紙を寄せて語を求む、汗を揮ひ筆を迅らして、其の請を塞ぐと云ふ。

山上人に示す。

波州の山上人、辛丑の春、山中に來つて道聚す、夏罷んで別を告ぐるの次、袖より帡を出して法語を求む、余笑つて曰く、「我れ未だ一法の得べきを見ず、夫れ復た何の語をか云はんや、」山云く、「胡爲れぞ區々として辭を格むこと斯の如くなるや、唯だ望むらくは、一則古人の因縁を示し及ぼせ、用つて前程の警策と爲さんと要す」と、勉め請ふこと至れり、余已むを獲ず、之に謂つて曰く、「昔し僧、雲門に問ふ、『不起一念還つて過ありや也た無きや、』門云く、『須彌山』と、汝只だ這の話を將つて、一切四威儀の中、綿密に打捱せよ、久々にして工夫純熟し、打成一

曰

此の様な燒き芋の烟ならば、ちつとやをつとは揚げても苦しかるまじ、其れもすなと。  
① 落韻即ち踏落を云ふ、然し唯だ比興にして韻律に合はざるの意也。

② 隱山燒庵。會元三、龍山和尚章、洞山辭退す、師即ち偈を述ぶ、曰く、「三間の茅屋從來の住、一道の神光萬境間なり、是非を把つて來つて我を辨する莫れ、浮生の穿鑿相關せず」と、これに因つて庵を燒く。

③ 三百六十骨節等、無門關に曰く、「參禪は須らく祖師の關を通るべし、妙語は心路を窮め絶せんことを要す、祖關通せず、心路絶せずんば、盡く是れ依草附木の精靈ならん、且く道へ、如何か是れ祖師の關、只だ者の一箇の無字、乃ち宗門の一關也、遂に之れを名づけ

て禪宗の無門關と云ふ、透得し過者は但だ親しく趙州を見るのみならず、歴代の祖師と把手共行、眉毛相結び、同一眼に見、同一耳に聞く、豈慶快ならずや、透關を要する底、有ること莫らんや、三百六十の骨節、八萬四千の毫竅、通身に箇の疑團を起して、箇の無字に參せよ」と。

④ 龍禪者は師の法姪也。

⑤ 打捱。江湖集上、盧堂人の母を省するを送るの頌に、「十年來往浙の東西、捱得す頭荒伏摩を露すことな、捱は極め得るの義也。

⑥ 躋は是に同じ、左傳隱公十一年、「五の不躋を犯して以つて人を伐り、其れ師を喪ふこと又宜ならずや」と。



片ならば、須彌山便ち是れ自己、自己便ち是れ須彌山、須彌山を自己と、間に髪を容れず、甚の無明煩惱とか論せん、以て菩提涅槃真如佛性に至るまで、亦須らく崖を望んで退くべし、汝此の如く信得及し去らば、直饒未だ直下に打徹するを得ずと雖も、定めて是れ知見解會露布葛藤に籠絡せられざる底の本色の辨道人たらんか、乃ち毫を援つて之を寫し、贈ると云ふ。

禪燈新戒に示す。

世尊拈華、迦葉微笑より以降、相傳へて、焰を續ぎ、輝を接して、直に而今に至るまで、天壤を照映して、幽として燭さざるなし、是を教外別傳の禪と謂ふなり、爾既に他家の種草となる、操履當に上流を攀づべし、絡始庸輩に墮するなかれ、志力を勉勵して、晝も參じ夜も參じ、一旦心光爆發して十方空を照さば、惟だ法燈門風を碩大するのみにあらず、亦自己名實厮當るを見るのみ、禪燈新戒紙を袖にして字を需む、筆を迅らして其の請を塞ぐと云ふ。

增禪人に示す。

僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、州云く「無し」と、只だ這の語頭を將つて、行にも參じ坐しても參せよ、切に忌む忘念すること、大凡學道の人、正に生死の二字を以て鼻尖

①籠絡。俗に「とりこにせらるるの意、班孟堅西都賦に「山を籠す野を絡す」と。  
②冷齊夜話に曰く「漢の高帝大事に臨み、印を續し印を消し、兒戯より甚だし、然るに其の正明直白、千古に照映たり。」  
③他家、即ち禪門を指す也、新戒故に爾か云ふ。  
④生死の二字。大慧書に曰く、「黃知縣に答へて曰く、但生死兩字を把りて鼻尖頭上に貼在して忘るを要せず」と。

頭上に貼在して、百千違順の境界現前するも即時に放下して、孜孜兀々として、之を究め之を明むべし、光陰倏忽として、時人を待たず、努力して今生に須らく了卻すべし、永劫に餘殃を受けしむるなかれ、增禪者山中に在つて首を聚む、參禪に志ある佳道人なり、別に臨んで語を需む、筆を迅らして以て贈る。

山禪人に示す。

通玄峰頂是れ人間にあらず、心外無法、滿目の青山と、且く古人恁麼に道ふ意、何の處にかある、此に於て一隻眼を著得せば、汝即青山、青山即汝、汝と青山と、無二無二分、無別無斷故、然も此のごとくなりと雖も、若し衲僧門下に約せば、猶ほ鐵圍を隔つることあり、直に須らく身を那畔に揚げ、五須彌を踢倒して、方に此の事と少分相應すべきかな、山姪語を需めて以て警策となさんとす、筆を迅らして之に付すと云ふ。

善教大徳に示す。

若し生死を超脱して、直に佛祖の位に至らんと欲せば、只だ十二時中、四威儀の内、寸陰を棄てず、間斷あることなく、無義味の語頭を參究せよ、且く甚麼を呼んでか無義の語頭とせん、父母未生以前、那箇か是れ我が本來の面目と、只だ此の語頭

①餘殃、易坤封文言に「積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり」と。  
②通玄峰頂是れ人間に非ず。詔國師投機の偈也。  
③一隻眼、碧岩錄一、靈峰曰く、「靈大地是れ沙門の一隻眼、汝等諸人什麼の處に向つて、觸せん」と。  
④無二無二分。大般若百八十三、善現色清淨なれば即ち果清淨、果清淨なれば即色清淨、何を以ての故に是色清淨と、果清淨と無二無二分、無別無斷故」とあり。  
⑤觀無量壽經に「眉間の白毫右に旋つて婉轉すること五須彌の如し」と。



を將つて、大疑團を起し、寢食を忘じ、寒暑を廢し、綿々密々に、參じ去り參じ來つて、恰も鐵椀子を咬み、栗棘蓬を吞むが如くに相似て、直に背を下す處無きことを得て、忽然として蹉口に咬得破し吞得下せば、之を大徹大悟底の人と謂ふ、唯だ此の如く修行し去れ、直繞今生に打未徹なりと雖も、此の志堅固にして永く退失せずんば、臨命終の時に還到して、人身失せず、惡趣に墮せず、重ねて出頭し來らば、必ず是れ一聞千悟せん、豈般若の靈驗なるものに非ざらんや、記取せよ記取せよ、旃れを勉めよ。

元杲上人に示す。

趙州の無字は、乃ち是れ諸聖の骨髓、列祖の眼睛、百千の法門、無量の妙義流出し、唯だ箇の無字上より流出し得來るなり、正に此の話を參究するに當つて、全く義味思量の及ぶべきにあらず、鐵椀子を咬み、栗棘蓬を吞むが如くに相似て、直に爾が背を下す處無うして、情盡き識銷し、知解泯し、能所忘するの時に至つて、忽爾として、因地下せば、則ち生死の根株を拔御するのみにあらず、亦須らく涅槃の牢獄を掀翻すべし、豈平生を慶快するにあらざるならんや。

先天の兆庵主に示す。

①因地下は、一足踏み出せばの意、即ち涅槃の地を得る也、間一髪を越すなり、大慧書上、張提刑に答へて曰く、老居士所作所爲、冥に道と合ふ、但だ未だ因地下を得る能はざる耳、若し日用縁に應じて故歩を失はずんば、未だ因地下を得る能はずと雖も臘月三十日、闍家老子も亦手を拱して歸降せん」と。

古人云く、「盡三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一箇の無字となして、與麼に提起せば、更に甚麼の昏沈散亂をか討ね來らん」と、老拙は然らず、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅を併せて、打つて一枚の鐵團圓となして參究せば、則ち所謂昏沈散亂、卻つて我が伴侶とならん、還つて古人と相見の分ありや、也たなきや、只だ綿々密々にして、間に髪を容れざらんことを要す、若し此の如く做し將ち去らば、縦ひ直下に透徹すること能はずと雖も、臘月三十日に捱到せば、力を獲ること少からず。

玉禪者に示す。

②地の山を撃つて山の孤峻なるを知らざるが如く、石の玉を含んで玉の瑕なきを知らざるが如く、汝が十二時中、屙屎送尿、著衣喫飯は、誰が恩力を承くるや、若し此に於て、尙ほ未だ力を得ずんば、只だ箇の僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く、「無」の公案を將つて、綿々密々に、孜孜兀々として、之に參じ之を究めよ、工夫熟し、時節至らば、漆桶を打破し去らん、豈平生を慶快するものにあらずや。

鏡大師に示す。

③一枚の鐵團圓は一箇の鐵丸也、故は猶ほ箇と云ふが如し。  
④我が伴侶、物我凡聖無二なり。  
⑤地撃山云々、傳燈七、盤山寶積章、上堂、禪德可の中の學道は地の山を撃ぐるに、山の孤峻なるを知らず、石の玉を含む、玉の瑕なきを知らざるが如くに似たりと、若しかくの如くんばこれを出家と名くと、而して此盤山和尚は之れを無心に譬へたるものなれども、此寂室和尚は蓋し隨義轉用して地及び石の山及び玉の存在を知らぬ、即ち自己の心珠の大寶を知らぬに譬へたるものならんや。



昔し瀉山鏡を封じて仰山に送與す、仰山提起して衆に示して云く、「道ひ得ば撲破せず、衆無對、山乃ち撲破す、汝這の語に於て薦得せば、妨げず明かに本地の風光、本來の面目を見ることを、脱し或は未だ然らずんば、破鏡重ねて照さず、落華枝に上り難し、參。

從本禪者に示す。

出家學道の士は、宜しく師を尋ね、衣を擲おれもつて、要緊となすべきなり、汝今慈廣和尚の道風を仰慕し、去つて依棲を求む、厥の志良に嘉なり、聞説らく掌中數十輩、箇々自分の兄弟にして、晝夜孜孜兀々、坐して枯株のごとしと、咸謂ふ、石霜の風規千載墮ちすと、汝萬一掛錫を許さるれば、當に須らく先づ三年を以て一期限となすべし、足は門を出づるを禁じ、脇は席に到るを愧ぢ、口戯嘲を絶し、意攀縁を離れ、只だ二六時中、綿々密々に死了燒了、那箇か我が性の話を參究せよ、既に此の如きの師に遇ひ、此の如きの友を得、此の如き便當の所在に居る、汝彼に在つて道業を轉せずんば、更に何の日をか待つべきや、其れ或は州に遊び縣に獵し、水を看山を觀て、徒らに時光を喪せば、全く予が法屬にあらざるものか、異日歸り來ると雖も、斷じて相見の分あるべからず、從本之を勉め之を思へ。

破鏡云々、禪林類聚五、華嚴靜禪師、僧問ふ、「大悟底の人其麼んが爲めに却つて迷ふ、」師曰く、「破鏡重ねて照さず、落華枝に上り難し。」  
備前の大士山慈廣寺頂山和尚也。  
石霜の風規、傳燈、石霜山慶諸禪師章、師石霜山に止る二十年の間、學業長坐して臥せず、株兀の如くなるあり、天下之れを枯木衆と云ふ。  
脇は席に到るを愧ぢ、脇尊者伏默尊者に値ひて、左右に執侍して未だ嘗て睡眠せずと。

道芽侍者に示す。

余が忘年の友子、芽侍者は、天資爽拔にして、道貌穩實なり、已事未だ明かならざるを以て念となして、天龍の法席を棄て、此の山中に來つて、同志五七輩と首を茹茨に俯して、一夏尺壁寸陰、孜孜として參究す、眞に佳弟子なり、秋風一策、忽ち歸歟の興を催す、別に臨んで紙を出して拙字を需む、余筆を絶つこと久し、手を揮つて謝遣するのみ、然れども猶ほ懇求して已まず、因つて問うて曰く、「黑豆芽を生せざる時、如何、」云く、「知らず、」又問ふ、「黑豆已に芽を生じて後、如何、」云く、「知らず、」又問ふ、「黑豆の芽を生ずると、未だ生せざる時、如何、」云く、「知らず、」余笑つて云く、「百千の法門無量の妙義、咸く箇の三不知の下にあつて、冰消瓦解了んぬ、佗唯々たるのみ、余乃ち毫を援いて之を寫し、其の請を塞ぐと云ふ。

圓林の方長老に示す。

言前に旨を領じ、句外に宗を明め、乾坤に獨立し、眼宇宙を空するも若し衲僧門下に約せば、則ち喚び來つて、他をして脚を洗はしめて始めて得ん、這般現成の説話、正に是れ家常茶飯のみ、宜しく且つ高閑すべし、眞箇に要らず生死の根株を截斷し、佛祖の田地に撈到せんことを欲せば、當に須らく歩を退けて己に就き、頻りに鈍工を下して、趙州の無字を參

忘年の友子。學問才徳上にて親密に交際することにて、年の老弱にかかはらぬを云ふ、書言故事に「福衡逸才有り、少くして孔融と交る、時に衡未だ二十に滿たず、而して融已に五十、忘年の交をなす」と、友子兄弟と書經にあり。  
尺壁寸陰。淮南子に曰く、「夫れ日回つて月周り、時人と遊ぶ、故に聖人尺壁を貴ばず



取すべし、是れ則ち把本の修行なり、圓林の圭巖長老、既に住院、徒を匡すと雖も、大事因縁を以て念となし、問及せらるゝを獲、厥の志嘉すべし、仍つて筆を迅らして以て贈ると云ふ。

開翁の譽侍者に示す。

佛性泰禪師云く、「五祖師翁、趙州の無字を頌して曰く、「趙州の露刃劍、寒霜光焰々、更に如何と問はんと擬せば、身を分つて兩段となる、只だ露刃劍を消せば足れり、下面の三句を剩し了る」と、余が見處に據らば、争でか我が箇の箇外の數株の梅花、忽ち昨夜の狂風暴雨に一時に空盡せられて、片も也た見えすと、者箇卻つて是れ頌し得て恰好なるに如かんや、然りと雖も、若し又恁麼に領略せば、未だ眼中に華を生じ去ることを免れざるなり、唯だ者の僧未だ問を設けず、趙州亦口を開かざる以前に向つて、是れ箇の甚麼の道理ぞと參取せよ、則ち歳久月深、必ず悟明の時あらんかな、開翁侍者、趙州の無字に參するによつて、紙を出して其の旨訣を求む、之を寫して厥の請を塞ぐと云ふ。

定巖の一侍者に示す。

天の一を得て清く、地一を得て寧し、衲僧一を得て作廢生、僧、趙州に問ふ、「萬法一に歸す、一何の處に歸す、」州云く、「我れ青州に在つて一領の布衫を做す、重きこと七斤」と、爾既に參禪に志あり、只だ這の話を將つて專一に厮捱せよ、捱し去り捱し來つて、積むに歲月を以てし、捱して捱すべきなきの處に到らば、直に三世の諸佛、横説豎説、雲の如く雨の如く、它の千七百則の陳爛葛藤に和して、一々に打して自己に歸し去るを得ん、影は形に由つて生じ、名は實を以て顯る、方に知る、當初一を用つて諱とすることの甚だ偶然ならざるを。

霜林の果侍者に示す。

臨濟大師唯だ一喝を以て事を用ひ、道常情を出で、測度すべきことと難し、間々慈を垂れ物を救ふことあつて、乃し三玄三要を區分し、四賓主を排列し、四料簡を施設する等、皆大火聚吹毛劍の如く、之に觸れ之に近かば、喪身失命を獲ざるものあるなし、是の故に、其の直下の的孫、燈々相傳へて、細々として絶えず、我が松源師祖に到つて、僅かに十有五葉、家業墜ちず、赤手に全提す、儘門に登る者を見れば、恰も金翅の

して寸陰を重んず」と。  
① 黑豆云々、會元五、大顛通の法嗣王平章、問ふ、「黑豆未だ芽を生ぜざる時如何、」師云く、「佛も亦不知」と。

② 其男に脚を洗はさせてやる。  
③ 高閑すべしは、高閑に束ぬべし略語なり。

④ 鈍工、大慧書上、曾侍郎問書に、「兩則の因縁を擧して鈍工を下さしむ」と。

⑤ 匡徒、碧岩十一則、擧す黃蘗示衆して曰く、「汝等諸人盡く是れ嗜酒糟漢、恁麼に行脚せば何の處にか今日有らん、還た大唐國裏に禪師無きを知るや」と、時に僧有り、出で、「云く、只だ諸方便を匡し、衆を領するが如くには作廢生」と。

⑥ 身を分つて兩段となる後の箇外數株の梅花、忽ち昨夜の狂風暴雨に一時に空盡せられて、片も又見えずに懸する也。

⑦ 唯だ、即ち四大未生前の天地、父母未生前の本來の面目也、何の無と説き有と云ふことを須んや。

⑧ 老子に曰く、「天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧、神は一を得て以て靈、其の之れを致すや一也、一は即ち道也。

⑨ 霜林は即ち霜林中果梵窓の法嗣なり。

⑩ 道常情を出で、會元十二、慈明禪師章、師一夕訴へて曰く、「法席に至つてより已に再夏、指示を蒙らず、但だ俗の塵勞を増す、念ふに歲月飄忽として已事明めず、出家の利を失はん、語未だ卒らず、汾陽熱視して罵りて曰く、「是れ惡智識、敢て我を禪販す、怒つて杖を擧げて之れを逐ふ、師伸救せんとす、陽師の口を掩ふ、乃ち大悟す、是に知



海を擊き直に龍をとつて呑み、師子の一吼すれば百獸腦裂するが如し、亦三獅の鹽兒節を弄して行く、鐵駿、破砂盆、口を開くことは舌頭上にあらず等の句あり、其の鋒に嬰り、其の毒に中たる底は、箇々羅籠を出で、窠臼を離れ、電馳星飛し、龍驤虎驟す、偉なるかな盛なるかな、鉤々乎として一時に雷霆し、晃々焉として萬古を照映す、嗚呼、如今遺風餘烈、幾んど地を掃つて休す、斯道に意あるの士、豈坐視するに忍びんや、只だ箇の伶俐底の後生の、出で、它家の種草となるを憑むのみ、其の人脱し或は命時に遇はず、力志に違ふなくんば、只だ去つて巖棲林居、草衣菓食して、専ら己躬の下の事を究めよ、夫の今時猊床に踞し、塵尾を握つて般若を妄談し、累に罪愆を招くの輩と、豈翅に霄壤の俸しからざるのみならんや、古に云く、水を看山を看て坐す、名も無く利も無き身しと、其の詞は頗る淺近に似るも、意味極めて深くして深し、余一夕客と談此に及ぶ、果侍者旁に在つて竊かに聴き、翌旦に紙筆を備へ、來つて余をして此を寫さしむ、因つて勉めて其の請に應ずと云ふ。

平基藏主に示す。

昔し水潦和尚、馬祖に參じて、佛法的々の大意を問ふ、祖一踏を與ふ、水潦遂に大悟す、乃ち曰く、「百千の法門、無量の妙義、一毫頭に向つて根源を識得す」と、呵々大笑す、平生衆に示すに、「一たび馬師の踏を喫してより、直に而今に至るまで笑ひ休せず」と、又復た呵々大笑す、汝久しく教衆を翫んで、玄理を研究す、未審し、三乘十二分教の内、水潦の得處を將つて那の教にか攝し去らん、須らく知るべし、宗門に果して箇の奇特の事あることを、若し奇特の想をなさば、又是れ不是にし了んぬ、子細に參取せよ、將つて等閑となすことなかれ、只だ一櫛を嘗めて鼎味を知らんことを要す、其れ尙し未だ然らずんば、只だ今休し去らば即ち休し去れ、了時を覚めんと欲するも了時なけん。

興性禪人に示す。

興性禪人、此の山中にあること既に三載、庫務の間に勞役して、晨夕寧居に違なし、其の志良に勤めたり、蓋し余と俗門の瓜葛あるによるものなり、今亦暫く去つて京都に歸る、只だ望むらくは、爾此の大事因縁を以て念となし、諸縁を放下し、打つて一件の事となして、此の道を參究

んぬ、臨濟の道は常情に出づと、服役七年にして辭去すと。三玄三要。人天眼目上に曰く、「師云ふ、大凡宗乘を演唱せんとするものは、須らく一言に三玄の門を具ふべく、一玄門に須らく三要を具ふべし、權あり、實あり、照あり、用あり、汝等諸人作麼生、會せん」と、詳くは人天眼目に有り。四賓主、臨濟爲人の施設也、賓中の賓、賓中の主、主中の賓、主中の主これ也、賓は途中往來の客、主は歸來穩坐の主人、賓主相見して眞箇第一人たる主人公の一位に歸するを以て最終の目的とす。全提。全部提起のことにして、まるだしのことなり、半提に對す、從容錄に「默々として正令を全提す」とあり。金翅、名義集二、迦樓羅といひ、此には金翅と云ふ、迦樓

金色兩翅相去ること三百三十六萬里、頸に如意珠あり、龍を以て食となす」と。師子一吼。臨濟錄、師子の一吼野干腦裂す」と。三脚驢兒。會元十九、楊岐禪師章、問ふ、「如何か佛」、師曰く、「三脚驢子蹄を弄して行く。」口を開く云々、枯崖漫錄中、「松源岳禪師、傳ふる所の白雲端禪師法衣を以て亟かに人に付せんとす、三轉語を垂す、曰く、口を開けば舌頭上にあらず、大力量の人什麼としてか、脚根下紅線不斷而して契ふもの無し」と。鐘々乎。鐘、鼓、同時に聲相雜ふるを言ふ。草衣菓食、輔教編四、廣原教要義十六に、「深山幽谷に其衣



せよ、余已に桑榆に迫り、且夕保ち難し、千萬久しく外に在るを要せざれ、歳の晩には歸り來つて、舊に依つて衰朽を輔弼せよ、是れ庶幾するところなり。

昇侍者に示す。

四大分散の時、甚麼の處に向つてか安身立命せんと、只だ要す、這の話を將つて、呻吟痛言の中にあつて、刹那も間斷あるなく、參じ去り參じ來れ、忽爾として噴地一下せば、則ち翅だに膏肓必死の疾を去卻するのみにあらず、亦須らく佛病祖病禪病等を屏除して、更に餘りなかるべきものなり、昇侍者病中に紙を寄せて語を求め、以て涅槃堂裡の警策となさんとす、因つて此を寫して之に酬ゆと云ふ。

靈仲英侍者に示す。

嘗て聞く、「公案を提撕し、工夫を做す底は、手に鑊錘を握るが如く、塗毒鼓を撃つが如くに相似たり」と、之に嬰り之に觸る、者は、尸萬里に横ふのみ、甚の生死の魔軍、煩惱の結賊とか説かん、以て眞如實相、菩提涅槃に至るまで、敢て近傍するに由なし、假使黃頭老碧眼胡も、亦須らく

を草し、其食を木にすと雖も、晏然として自得す」と。

①水を看云々。僧修睦睡起の作に曰く、「長空秋雨歇み、睡起清神を覺ゆ、水を看、山を看て坐す、名無く身なき身、偶は諸祖の意を吟じ、茶は去年の春に癢る、此外誰か識らん、孤雲砌に到ること類りなり。」

②祖一踏を與ふ、どぎつい、馬じや、水潦の體は一時に踏みつぶされた。

③一變云々、一斑を看て全彪を知ると云ふが如き意、一切れの肉を骨むれば自ら一鼎の大味を識るならん。

④休し去らば、如今休し去らんと欲せば當下に休し去れ、了時を待たば了時なげんと。

⑤瓜葛は親族に譬ふ、其の延蔓綿遠たるを以てなり。

⑥桑榆。西日影を垂れ樹端にあるを桑榆と云ふ、晩年を日没

倒退三千里すべきものか、僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た

無きや、」州云く、「無し、唯だ箇の無の字に於て大疑情を起し、痛く精彩を

著けて、看よ、是れ什麼の道理ぞと、忽爾として一旦噴地一下せば、則ち

千七百則の陳爛葛藤、這の無字に和して一時に瓦解氷消せん、豈快ならず

や、豈快ならずや、吾郷の英靈仲、特に山中に來つて芥茨の下に道聚す、

夏罷んで告辭するとき、紙を出して語を求む、因つて筆に信せて此を寫

し、以て其の請に酬ゆ、蓋し世の所謂法語の類にはあらず、只だ家裡の人

に向つて、些の家裡の話を説くのみ、切に乞ふ、前程に出して人に示すな

かれ、恐らくは譏誚を招かんかな。

松嶺の秀侍者に示す。

松嶺の秀侍者、久しく實翁に侍して、以て言行の師となす、得ると

ころ酷だ多し、二十年前に、余が巖居を訪ひしよりして後、或は去り或は來る、厥の道義の篤きこと、

今に至るまで、敢て少しも渝らざるなり、今夏亦來つて首を芥茨の下に聚む、向道の志唯だ進むこ

とを知つて、退くことを知らず、加ふるに機辯峻捷を以てし、衲子の體裁を失はず、良に以て嘉すべ

きに足るかな、解制の前一日、來つて告辭するの次で、予に従つて臨濟黃檗に參する因縁を請益す、

に比する也。

⑦膏肓。病膏の上、膏の下に入れば治せず」と、左傳成公十

年に、「晉侯病む、醫曰く、病膏肓に入る治すべからず」と。

⑧靈仲英侍者は曹源の開山也。

⑨鑊錘。又莫耶に作る、吳越春秋に千將は吳人也、歐冶子と師を同じうし、闔閭劍二枝を作らしむ、一を千將と云ひ、一を莫耶と云ふ、莫耶は千將が妻の名也。

⑩夏罷む、結夏の罷むを云ふ。

⑪實翁は大覺禪師の法孫也。

⑫言行の師、易繫辭の上に、「言行は君子の樞機」と。



予渠に謂つて云く、「臨濟道ふ、我れ初め先師に詣つて三度佛法的々の大意を問ふ、它的六十の鳥藤を喫し了る、恰も蒿枝の拂ふが如くに相似たり、而今一頓を喫せんことを思ふ、誰か當に手を下さすべき、惜むらくは當時等閑に它を放過し了ることを、若し箇の漢出で來つて、某手を下し得んと曰はゞ、它的口を開かんと擬するを待つて、彈指一下して云はん、「蒼天蒼天」と、它的氣を吐き身を轉するの分なきを管取せん、秀曰く、「千載の下不肖の孫、還つて如上の手段を具する底あるなしや、予笑つて秀を指して云く、「嘆、子にあらずんば、夫れ復た誰ぞや、予毫を援いて此を記し、以て贈ると云ふ。

聖賢大師に示す。

僧趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、州云く、「無し、二十二中、一切處に、精彩を著けて看よ、箇は是れ甚麼の道理ぞと、有無の會を做すなけれ、無無の會を做すなけれ、眞無の會をなすなけれ、世間の得失是非、人我憎愛、顛倒妄想等、佗方世界に瞥在して、脊梁骨を堅起し、蒲團上を離れず、久遠不退轉の身心を、拈取して、一生兩生、乃至、盡未來際も、悟らすんば休せじと、是のごとく工夫を做し去らば、徹證の日無きことを患ひず、只だ要す、生死事大無常迅速、

- ① 鳥藤は拄杖を云ふ、又鳥藤杖とも云ふ。
- ② 蒿枝は「よもぎ」の枝也、蒿枝を拂ふは、草でも拂ふ様ぢやと云ふ程の意。
- ③ 而今は臨濟出世してよりの事を云ふ也。
- ④ 蒼天、蒼天若し此の漢出で來たる云々。
- ⑤ 有無の會、大慧書八三、張舍人に答へて曰く、「有無商量をなすことを得ざれ、又眞無の無と作し、卜度することを得ざれ」と。
- ⑥ 拈取、辨取と同じく、「こしらへる」こと也。

この八箇の字、胸中に蘊んで、須臾少間も、敢て忘れざらんことを、若し然らずんば、則ち昏散の二魔の爲めに侵撓せられて、永劫にも道業を成辨する能はざるなり、老夫今年六十八、餘算幾くもなし、想ふに復た相見の日なからん、唯だ此に依つて修行せば、大圓鏡中、時々に対談せんなり。

天機庵主に示す。

參禪は、愚と智と、男と女とを論せず、只だ是れ天機俊捷に、識見超邁にして、氣乾坤を蒙ひ、眼古今を空する伶俐の活漢にして、方に箇の事と少分相應じ去ることを獲んなり、是の故に、末山・無着・尼總持・劉鐵磨、皆是れ大法の淵源に徹して、祖師の骨髓を得たり、宜なるかな、其の遺風餘烈、今に至るまで天壤の間に凛々然たり、之を身女流に處して、大丈夫の事業を成辨する者と謂ふ、爾如今眞箇に此の道に志あらば、惟だ生死事大無常迅速を將つて念となして、即ち世間一切の是非愛憎苦樂逆順等の妄情亂想を把つて一時に放下して、乃ち僧、古徳に問ふ、「一念未起過ありや也た無きや、徳云く、「須彌山の話を把つて、綿々密々、孜孜兀々として、行にも參じ、坐にも參じ、朝にも究め、夕にも究めよ、甚の三十年二十年とか説かん、縦ひ百千劫を歴るも、悟らすんば休せず」と、此の如く不退轉の身心を辨取して、參究し將ち去らば、必ず明めざるの理無けん、忽爾と

- ① 大圓鏡智、中智の一也、法身邊の田地也、死了、燒了の以後、盡未來際に於て時々に対談せん、圭濟、古鼎を送りて西湖の上に到る、曰く、「此別れ未だ會期を卜せず、古鼎の曰く、「大圓鏡中、未だ嘗て公と相別れず」と。
- ② 末山は大愚下、無着は大惠下、尼總持は初祖下、劉鐵磨は潞山下、何れも傑出せる尼僧也。



して心華燦發して、十方空を照さば、那の時惟だ它の古人と臂を把つて並び行くのみにあらず、正に能く佛祖の頂額を坐斷せん、豈平生を慶快する者にあらずや、天機庵主、春秋富盛にして、遼爾として落髮披緇し、三寶の數に墮す、加ふるに賦性純真を以てして、惟れ道を惟れ勤む、夙に般若を薰するの甚深に非ざるよりは、豈克く斯の若くならんや、而今紙を出して語を需め、進道の警策となさんと欲す、輒ち毫を援いて、此の葛藤を寫して、其の請を塞ぐと云ふ。

齊雲の均侍者に示す。

我が松源大祖翁は、乃ち是れ臨濟十有五世の傳の高弟なり、宋の嘉泰開禧の間に在つて、所得底の一百二十鈞の重擔子を以て、天下の衲子の肩の上に送在す、多くは恐怖驚走して、是の任を堪忍するもの鮮し、如今此の擔子、西來嵩山の下に留止す、予齊雲老兄を見るに、この重擔子を荷擔するに力あるものなり、切に望らくは、忽にするなかれ、且く道へ、那箇か是れこの重擔子、大量量の人什麼としてか脚を擡げ起さざる、明眼の人什麼としてか脚跟下紅絲線不斷なる。

棋庵主に示す。(先輩の語は録せず)

棋玉田は、積代の將爵、貴權功名の家に生れて、忽ち幻生の厭ふべきを省して、冠を裂いて緇を披す、一たび空門に入つてより、日夕精勤、脇席に到らず、直に古人眞證の地に至つて後やまんと要す、大鑑聊か夙因を感じて、名を安じ、衣を附す、其の驗此に於て見るべし、甲辰の春、余が巖居を訪うて、首を弗茨に俯し、既に是れ一葺、一日告辭して曰く、「且く別山に去つて夏を過さん、秋風孤杖必ず是れ再會の日なり」と、乃ち紙を出して語を需め、以て途中の警策となさんとす、余容易に語を發して、輒ち妄談般若の請を招かんことを欲せず、而も懇求して已まず、因つて嗜昔聞くところの先輩の數語を寫して、以て其の請を塞ぐと云ふ。

子景大師に示す。(中峰の語は録せず)

子景大師、須叟も生死事大を忘れず、致々兀々として茲を念ふこと茲にあり、余垂木の嘉陰庵に寓せしとき、佗最初に來つて相見、問ふに此の道を以てす、余野邊の山中に遷つて、苜を縛して居するに及び、又來つて民間に、鐵屋し、乃ち一夏を度る、前後來往すること三歲、其の志嘉すべきなり、而今中峯和尚の法語一篇を繕寫して之に贈る、是の如く實痛快に、是の如く深切著明なり、汝此に依つて修行せば、當に須らく鐵磨の瀉山に參じ、摠持の少林に見ゆると、以て異なるなかるべきなり。

① 所得底云々、崇岳松源和尚の假設せる爲人の三轉等を云ふなり、曰く、「大量量の人、甚に因つてか脚を擡げ起たさる、口を開くこと甚としてか舌頭上にあらざる、明眼の人甚に因つてか脚跟下紅絲線斷えざる」と、これ也。

② 棋玉田は支那の人也、清拙禪師に隨つて來る、大鑑は清拙の禪師號なり。  
③ 古人眞證、大慧書、轉侍郎問書に、悟は則ち須らく直ちに古人眞證の所に到つて方に大休歇の把となす。  
④ 野邊、遼州野邊也。  
⑤ 鐵屋、借家に同じ。



珍禪者に示す。

大元延祐庚申の冬、然可翁俊鈍庵と同じく天目山に登つて幻住老人に謁せし時、雪千巖に満ち、一庵閭爾たり、吾儕三輩、前立列拜して、各親しく鼻祖に少室峯前に見ゆるの想をなす、因つて扣くに宗門の要訣を以てす、第だ恨むらくは、疎鈍の跡、委曲垂示の旨を領會すること能はざるを、嗚呼、倒指すれば既に三十有七白、惟だ一日の如し、眞の間世の哲人なり、豈復た見るを獲んや、遠江の珍禪者、妙年英俊にして孜孜として辨道す、一夏首を荊檐の下に聚む、忽ち進道警策の説を需む、即ち如上の法語を抄寫して、以て其の請を塞ぐと云ふ。

中峰法語の後に書す。

中峰の道三傳して雪巖に到る、破沙盆を將つて空に和して擊碎して七零八落、將に謂へり、今已に子遺あるなしと、幸に不肖の的孫幻住老人あつて出でて、從頭に整頓して、舊によつて圓陀々地、甚生だ觀るべし、夫れ之を後中峰と謂ふものか、如し未だ證據せずんば、請ふ這の葛藤を把つて、子細に眼を著けて看よ。

壽位の下に書す。

愚平生、人の爲めに知らるゝを欲せず、是を以て、巖壑に棲遲して、積んで年あり、邇來意はざりき、多く同志あつて尋訪し、屋を並べて散處す、關防するに由なきなり、亦是れ報縁の爾らしむる、之を奈何ともするなきなり、即休の覺兄、愚をして如上の數字を寫さしめ、永く身に隨へんと欲す、蓋し道義の過厚のみ、愚老いんたり、殘喘幾くもなし、我が兄、愚が物故せしを聞かば、此の軸子を把つて、急に須らく火くべし、愚は深く閑名を留取して、久しく塵世に在くを嗟する者なり。

朴禪人の十願十誓の文の後に書す。

關西愚隱の朴上人、翅だ參道の志酷だ切なるのみにあらず、旁ら亦頂を煉り指を然して、刻苦精修、殆んど身を遺るにちかし、矧や嘗て十願十誓の文を設けて、之を護すること、恰も目睛の如し、毎に人に謂つて云く、「寧ろ此の一身を三途に淪墜せしめて、多劫を経歴せしむべきも、肯て如上の誓願若く毫髮計りを破犯せず、あらゆる善因は、専ら用ひて無上佛果菩提に回向せんもの」と、余嘉嘆の至に勝ふるなし、筆に命じて厥の文尾に書して以て贈ると云ふ。

是れ亦中峰の法語に附する跋語なり、珍禪者に示すと云ふ題は穩かならず、然れ共只其の傳燈の由来をのべて、開花十方世界を照すの道程を示すのみ、末文妙年英俊と見れば必らずしも當らすと云ふことなし。

天目山は即ち中峰和尚の道を振ふの所なり、本朝の元應庚申師年三十一歳、天目中峰和尚道を華夷に振ふと聞き、船便に附して天目山に登る、日方に晡に及ぶ、積雪庭に滿つ、同行の然可翁、俊鈍庵、與俱に侍立して退かず、峰、師の臂端に獨り「明日來也」四字を書す、師徑に後架に趨つて水

を擲して之れを洗ふと。

如上の法語、蓋し中峰の法語ならん。

中峰の道三傳、中峰は密庵傑禪師なり、双徑の中峰に居る、三傳は破庵、無準、雪巖の順序なり。

破沙盆は破れ「すりばち」なり、又ものを研ぐ器也、密庵、應庵に答ふるの語頭にあり。

的孫、雪岩は高峰に傳へ、峯は中峰に傳ふ、故に中峰は雪岩の的孫に當る。

從頭に整頓、初めから、やりなほすの意。

圓陀々地、圓くして美麗なること玉の如きを云ふ、陀々は梵語此には圓といふ。

二卷の終に了達禪人の牌下に偈を題せらる、是は牌下に文を記せられしなり、釋迦の牌でも遼磨の牌でも文殊の牌でも唐紙半切位に大書してあ



遺誠

老拙如今世緣將に盡さんとす、因つて諸の法屬等に、顧命す、余が溘然の後を待つて、宜しく林下に迹を晦し、火種刀耕して、一生を終ふるを圖るべし、契經に曰く、當に闍闍を離れて、獨處に閑居すべし、山間空澤云々、是れ乃ち吾佛最後の慈訓なり、寧んぞ遵奉せざるべけんや、汝等各々精嚴勤修せよ、庶はくは、袈裟の下に向つて人身を失却せざらん、是れ余が深く汝輩に望むところなり、汝等余の氣の絶ゆるを見れば、急に須らく收寔すべし、切に遺骸を留めて、以て人に之を見せしむべからず、土を掩ひ石を疊み、既に畢らば、只だ首楞嚴神咒を誦すること一遍せんのみ、然る後、熊原を把つて、太守に還し、苾庵を以て高野の父老等に付與して各自に散じ去れ、父老若し又固辭の意あらば、汝等諸の道友と相議して、一老成の宿衲を請じて、以て庵主に充て、佗の柴水の便當を討ぬる底の雲水兄弟の爲めに、一夏一冬、安禪辨道の所在となさんも亦可なり、餘は復た言ふべきなし、遺屬遺屬。

遺偈

屋後の青山、檻前の流水、鶴林の雙趺、熊耳の隻履、又是れ空華空子を結ぶ。

跋

寂室和尚南遊の後、跡を岩谷に晦まして、世と遯如たり、人事を謝遣し、筆を絶するこゝと久し、晩年衲子の懇請によつて、已むをえざるに迫られ、往々一言半句江湖に流落す、或は争ふて暗誦し、或は私かに傳寫す、烏焉の誤り蓋し亦少からず、其遺失を恐れ、本に據つて印行し、敢て加損せず、差誤なきを望むのみ。

時に 永和丁巳冬節の前三日、釋沙門性均謹んで白す。

り、昔しは高德に頼んで牌名を書ひて貰ふたものである、大燈國師や一休和尚の書かれた牌は所々に存在して居る。

① 如上の數字、寂室禪師の名字、頂を煉り指を然す。梵網經に「身を焼き、臂を焼き、指を焼くべし、若し身指を焼いて諸佛を供養せざらんば、出家菩薩に非ず」と、又禪門寶訓下に、「黃龍種翠に居る、病に因つて三月出でず、眞淨、宵夜懇禱す、以至、頂を焼き臂を煉つて仰いで陰相を祈る」と。

② 目晴云々。中峰雜錄上に、「佛印元禪師、痛識の文に曰く、已悟は益々持守すべし、盤水を撃ぐるが如く、至寶を執るが如く、目睛を護るが如く、危険を踐むが如し」と。

③ 師貞治六丁未九月一日入滅、壽七十八歳、末後の垂誠也。

④ 顧命、書の顧命の註に「顧は

還り視る也、成王將に崩ぜんとす、群臣に命じて康王を立つ、史其事を序して篇を作る、之れを顧命と謂ふ、死に臨んで回顧して命を發する也。」

⑤ 契經。十二部經の一、梵名修多羅也、この文は遺教經。

⑥ 闍闍。市門を云ふ也。

⑦ 收。棺を土に下す也、埋没の意也。

⑧ 熊原は永源之前邸也。

⑨ 大守は江州大守佐々木氏頼公を云ふ也。

⑩ 鶴林の雙趺、沙羅雙林に於て釋尊入滅の時、世尊の大悲二足の千幅輪相を即現して棺外に出し、迦葉に廻示し、千幅輪より千の光明を放ち、徧く十方一切界を照し、還ら棺に入る封閉して故無なしと。

⑪ 熊耳隻履。津磨入滅後、熊耳山に葬る、後三年魏の宋雲、使を西域に奉じ回るや、祖に

葱嶺に逢ふ、手に隻履を携へて歸々として獨り逝く、雲問ふ、「師何處にや行く」と、祖曰く、「西天に去る」と、雲歸りて具に其の事を説く、門人壤を啓くに及んで、唯だ空棺、一隻の革履存す焉、朝を擧げて之れが爲めに驚嘆す、詔を奉じて遺履を取り、小林寺に於て供養すと。

⑫ 空華云々、棧嚴義疏四上、「相を觀る元無し、指陳すべきなし、猶ほ空華の空果を結ぶな遊つが如し。」

⑬ 南遊。雪堂の拾遺錄に、「五祖字を逐ふて蓮經を禮す、一夕屎の字に遇ふ、唱禮せんと欲して遂に疑つて乃ち諸老宿に白して云く、如何ぞ屎の字亦稱して法寶とせん、老宿曰く、汝が所問によらば以て南詢すべし、汝正に是れ宗門中の根器也と、祖遂に南遊す。」



増補

俊上人に示す。

昔し僧趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性有りや無しや」と、云く、「無し」と、只這の一字、便ち生死の根株を截断する利器、本來の面目を照破するの鏡光也、汝只だ二六時中、四威儀の内、諸縁を放捨して、一片に打成して、鐵槌子を咬むが如く、栗棘蓬を呑むに似て、參じ去り參じ來つて、斯須少間も退志あること靡く、忽爾として漆桶を打破せば、心華發明して、十方空を照らさんか。

南遊は善財童子の故事による、即ち行脚の意に用ふ。  
① 永和丁巳は禪師没後の十一年也、此時此の録初めて出版せらる、寛永中再版して一絲の行狀を添へたり、其後元祿十年に至り四卷本の頭書本出づ、此の時寛永の誤謬を訂正せしが、更に五十餘年後の寛

延四年に至り、元祿頭書本を重刊冠注と改め出版す、此時寛本、木活本、元祿本の三種により、各卷末に校讎を添ふ、此板今尙存す、然れども是れ亦校正疎にして新なる誤りを添ふる處多し、其永和版の舊本は甚だ少し、然れども尙所々に珍襲せらる。

國譯永源寂室和尚語錄卷之四 終

近江州瑞石山永源禪寺開山教諭 圓應禪師寂室和尚 行狀

師諱は元光、字は寂室、世姓は藤氏、作州の高田縣に隸す、  
村上天皇の時に當つて、小野宮左府實賴公政を攝す、其の玄孫、小野の宮少將某、某を生む、某平氏の女を聘して、師を生む、寔に伏見天皇の正應三年庚寅五月十五日也、母氏憂なく、神光室に滿つ、宗族皆賀して曰く、「此の兒必ず異人たらんか、祥何ぞ斯の如くなるや、七歳のとき、郷閭の群兒、小魚を釣る、纒に之を得れば則ち師に屬して護せしむ、師謂らく、「此の魚微物なりと雖も、皆命あるの屬なり、其れ殺すに忍ぶべけんや」と、悉く縦つ、群兒怫然たり、  
① 牛角より天稟超慧なり、父母命じて釋に歸せしむ、遂に作の舊梓を辭して、京の東福に造り、大智海禪師に依つて緇を披す、一日姨母延いて、葦を茹はしむ、師色を正して曰く、釋門に入るもの、豈佛禁を犯さんや」と、聽かず、斯の年十五、落髮受具して、江州の田上縣に適く、偶、一僧の關より返つて宴坐するを見て、心竊かに愛慕す、此

① 圓應禪師は北朝第四代後光嚴天皇應安二年賜ふ所也。  
② 行狀は蓋し死者の世系名字爵里、行治、壽年等の詳を具するなり。  
③ 村上天皇は第六十二代也。  
④ 小野宮左府、太政大臣忠平公の嫡男、攝政實賴公なり證して清慎公といふ。  
⑤ 伏見天皇は第九十一代也。  
⑥ 牛角。兩鬢の「ちこまげ」、小兒の結髮也、故に幼少を牛角と云ふ。  
⑦ 大智海、東福寺第七世無爲昭元禪師。  
⑧ 葦を茹、莊子人間世に出づ、顔回が私には貧亡て酒も飲まず葦も茹はず、物思みは充分



より離文字の法を學ばんと要す、一日衆に隨つて茶を摘む、一僧あり、師を視て、以爲らく、「奇貨なり」と、謂つて曰く、「汝の才不凡なり、胡ぞ其れ此に 匏繫せらるゝ、方今關左に約翁儉公あり、天下縉徒の龍門なり、汝儼し彼の鑑輪に入らば、則ち大器必ず成せん」と、師其の言に依つて、乃ち其の僧を拉して偕に行く、翁時に 禪興の席を董す、師到れば則ち弟子の禮を執る、前夜翁夢らく、「諸聖降現して、光明山河を照燭するが如し」と、故に元光を以て法諱となす、瑞を志すなり、徳治二年、約翁公命に膺つて、京の建仁に 視篆す、師湯藥に供奉す、此の時徒弟數輩、班次に列す、時論紛然たり、翁曰く、「古の善く人を用ふる者は、内親を避けず、外讎を避けず、惟だ材を是れ庸ふるのみ、流俗の言我に於て何渠ぞやと、職既に滿ち、潛かに和州の安部に詣り、文殊の像前に於て七日を期して 煉頂す、修道の成るに抵ることを祈るなり、業畢つて又翁に侍す、翁適々不安なり、師問うて曰く、「如何なるか是れ最後の一句、」翁幕面に打つこと一掌す、師豁然として領悟す、時に十八歳なり、明年偶々雪達磨の頰を作る、曰く、「暫く空華を借つて半標を示す、普通年の事未だ迢々なら

出來てゐると、茹葷の二字之に本づく、葷は五辛也。  
①關、關東より西歸せる也。  
②奇貨、珍らしき寶なり、天稟超慧を器物に喩へし也、奇貨居くべし、秦の呂布草の言。  
③匏繫、瓢箪もほこりまみれに繫け置かれては用をなさず。  
④禪興は鎌倉福源山禪興寺也。  
⑤視篆、新命晋山するを云ふ也。  
⑥煉頂、頭香を焼く苦行を云ふ。  
⑦一山國師は一寧一山禪師也。  
⑧毘尼、三藏經中の律なり。  
⑨巾匣、巾は手巾、匣は手を洗ふ器、柄あり水を注ぐに用ふ、巾匣に侍すは左右に侍すに同じ。  
⑩芟潤は添消と云ふに同じ、非を去り善を補ふ也。  
⑪桃李春風二千は世尊傳法以後の綿々たるを云ふ也。  
⑫謝郎は釣魚の船にあらず、會

す、西天此の土飄零の恨、縱使ひ春風吹けども消せず、<sup>①</sup>一山國師是の作を見て、掌を撫して稱賞す、延慶二年、約翁の誨を受け、金澤の慧雲律師に隨つて 毘尼の學を習ふ、纔かに三月に決つて、其梗槩に涉る、辛酸の攻むるところ、血爲めに溺す、廼ち舍て、以て去る、翁時に龍峰に住す、又巾匣に侍す、佛涅槃に大衆、頰を作り、<sup>②</sup>芟潤を約翁に求む、翁從頭より一々之を校す、卷尾に逮び、<sup>③</sup>「桃李春風二千歳、<sup>④</sup>謝郎は釣魚の船にあらず」の句あり、翁曰く、「此れ必ず光侍者の作ならん」と、果して然り、一山國師南禪に住す、師を擧げて 侍香たらしむ、時に歳二十八なり、文保四年師歳三十一、天目中峰和尚の道、華夷に振ふと聞いて、船便に附して南邁し、天目山に登る、日方に脯に逮び、積雪庭に滿つ、同行の然可翁俊鈍庵と、與に俱に侍立して退かず、峰、師の臂端に於て、獨り「明日來也」の四字を書す、師徑ちに后架に走つて、水を掬して之を洗ふ、徑山の<sup>⑤</sup>元叟、保寧の<sup>⑥</sup>古林、鷄足の清拙、靈隱の<sup>⑦</sup>靈石、般若の<sup>⑧</sup>絶學、華頂の<sup>⑨</sup>無見、天目の<sup>⑩</sup>斷崖、皆偏く之を扣く、問答機縁に到りては、師敢て人に擧著せず、本朝の<sup>⑪</sup>嘉曆元年丙寅は即ち大元の泰定三年なり、是の年

元七、玄沙師備宗一禪師、幼にして釣を垂るゝを好み、小艇を南臺江に汎べ、諸の漁者に狎る、唐の咸通の初め、年甫めて三十、忽ち出塵を慕ひ、乃ち舟を棄て芙蓉の訓禪師に従ひ、落髮受具、布衲芒履食糲に氣を接して、終日宴坐す、雪峰其の苦業を以て呼んで頭陀と云ふ。  
①侍香。百丈清規下、兩序章六に「凡そ住持、上堂、小參、普說、開室、念誦、放參、節臘、特爲、通覆、相看、挂塔、燒香行禮、記錄、法語、燒香侍者之れを職る」と。  
②元叟。藏叟珍禪師の法嗣、杭州徑山原叟行端禪師也。  
③古林。横川洪禪師の法嗣、金陵保寧古林清茂禪師、別號は休居叟、温州林氏等。  
④靈石。虛堂愚禪師の法嗣、淨慈靈石如芝禪師也。



已に歸機を理す、海中風作つて怒濤空を排す、満船人の色なし、師目を舉ぐれば、白衣の觀音、空中に現す、少焉あつて風濤威を霽め、長州に著岸す、暫く三角縣に居る、初め一山師を稱して鐵船となす、中峰更めて今の字を製す、頌子あり、焉を證す、東歸に逮び、中峰及び一時の哲匠贈言あり、同船の人見て之を珍愛す、乃ち殫く散與す、建武元年、備後州吉津の平居士、雅より師の道に嚮ふ、其の室竹居迎へて、廳事に館せしむ、師怙然として茲に居ること三年、竹居宅を捨て、師に施し、韜光庵と名く、後に其の基を宏にし、改めて永徳寺と號す、觀應元年庚寅七月九日、長勝寺の命あれども就かず、大元より還つて二十五歳を積み、備作の際に在つて、専ら韜晦をもつてこれに居る、其の地を歌島、吉津、安田、椎村と曰ひ、其の寺院は乃ち西祖、明禪、安國、慈廣、菩提なり、越えて明年辛卯、攝州の福嚴寺に、僑居す、又道友の招に應じて江州の往生院に住す、一日、西禪の長老を訪ふの次、天龍の夢窓國師に邂逅す、談話して漏盡き窓白きに至る、延文五年師歳七十一、江州の大守佐々木雪江居士、師の名行を重んじ、獻するに、卓錫の地を以てす、奥島と云ひ雷溪と云ふ、且

- ① 絶學。靈雲鉄牛定禪師法嗣、豫章般若絶學世誠禪師。
- ② 無見。淨慈方山寶禪師法嗣、天台華頂無見禪師。
- ③ 斷崖。高峰妙禪師の法嗣、天目山斷崖了義禪師。
- ④ 嘉曆元年は後醍醐帝即位の第四曆也。
- ⑤ 廳事は訟を聽く所也、而し今の別墅の如きもの。
- ⑥ 怙然は安靜也。
- ⑦ 僑居は旅寓假り住居也。
- ⑧ 西禪は元曉峨天龍寺の前にあり。
- ⑨ 卓錫の地。梁の景泰禪師、惠州寶積寺に居る、水無し、錫を地に卓す、泉湧くこと數尺と。
- ⑩ 眉目。白氏文集、沃州山の禪院の記に、東南の山水越を首と爲し、額を面と爲し、沃州の天姥を眉目となすと、蓋し秀麗の冠たるを云ふなり。

つ曰く、「斯の二境は吾州山水の、眉目なり、師性に任せて居れ、明年康安元年辛丑正月十八日、雷溪に入つて攸を相る、其の林壑の幽邃なるを觀るに、頗る素抱に愜ふ、岨を剔り、蕤を鑄き、梵居を營締す、山中の吏民、子來の助を効す、既に成つて山を飯高と曰ひ、寺を永源と云ふ、(永は太守の氏を取る) 後山を改めて瑞石と號するは、石の靈なるを以てなり、寶殿に聞思大士の像を安す、<sup>①</sup> 悟都管之を塑す、是より先き工に命じて造るところ、收めて龜背にあり、俱に師の供養の語あり、所謂瑞石は、後門の壁下に置き、其の半稜を顯す、斯の石舊東峰の頂にあり、高野父老夢に感じて衆に告げて致すなり、其重き挽くに數百人の力を用ふべし、而も纔かに十數人之を扛ぐに、石自ら行くが如くにして、寺に達す、時に以て神運となす、殿の<sup>②</sup> 巽位に僧堂あり、師曾て之に榜して曰く、「坐中の警策、只だ衣を惹き、席を敲くに、過ぐべからず、痛く竹篋を以て事を行せば、則ち或は他の心念を動じて、恐らくは道義を壞せん、各庵此法式を遵守せば、深く庶ふところの者なり」と、<sup>③</sup> 除饑女慈源、岸本村の腴沃を奉じて、堂裡齋粥の資に充つ、殿の<sup>④</sup> 坎位に、石礎を作る、直に登ること數十尺、上

- ① 礎は礎に同じ。
- ② 子來。詩靈台に、「靈台を經始し、之れを經し之れを營し、庶民之れを攻むる、日ならずして、之れを成す、經始すること亟かにする勿れ、庶民子の如く來る」と。
- ③ 聞思大士は觀音を云ふ也。
- ④ 悟都管。世に傳ふる元朝の佛工日域に來ると之れなり。
- ⑤ 巽位。易說卦に、「巽は東南の卦也」と、即ち東南方を云ふ。
- ⑥ 除饑。凡夫六塵に貪著すること、餓夫の食を食つて厭足を知らざるが如し、今貪愛を斷除し六情の饑饉を除く、故に除饑といふと。
- ⑦ 坎位は北方也。
- ⑧ 石礎は石壇也、又石礎に同じ。
- ⑨ 兌位は西方也。
- ⑩ 光明帝。實は北朝第四代、後



に地あり、平衍寛爽なり、三重の寶塔を置く、<sup>①</sup> 兗位の高臺を含空と曰ふ、  
廻ち師の遷寂の處となす、<sup>②</sup> 光明皇帝、親筆の手詔を賜ふて曰く、「山中  
平生提持の一句、授與せらるべきの由、寂室和尚に傳命せらるべき者な  
り」と、復た天龍寺の詔あり、曰く、「天龍寺住持職の事、學道宏達、人間  
の縑素、會下を慕ふところなり、<sup>③</sup> 霧豹の跡年尙し、蓋ぞ<sup>④</sup> 獨善の地を替  
へざる、雲龍の感時臻る、宜しく兼濟の道を闢くべし、早く雷溪の幽栖を  
辭し、龜山の禪刹に入つて、叢林の規範を紹隆せしめ、邦家の安泰を祈り奉  
るべきに、者は、天氣此の如く、仍つて執達件の如し、康安二年二月十五日、  
左少辨」と、鹿王院普明國師、書を寄せ、其の出世を趣す、其の書云々、  
書辭累幅、茲貞治二年癸卯、建長の命を辭す、專使力めて之を強ふ、潛かに  
避けて伊勢に往き、事寝んで瑞石に還る、妙喜の<sup>⑤</sup> 中岩月公、師の徵命に  
赴かざるを聞いて、書を寄せて激勵し曰く、「方今佛法陵遲す、豈出世度生  
に無心なるべけんや」と、師偈を作つて之を謝す、是の時義侶景從す、  
芳玉腕、夫一關、圓月心、愚大拙等の如き、天下知名の士數十輩、會裡  
にあり、一衆二千人、澗に傍ひ、苜を縛して以て居り、精勵咨訣す、固に

光嚴天皇也。

① 烈女傳二、陶の大夫答子、陶を治むること三年、名譽興らず、家富んで三倍す、其妻數諫むれども用ゐず、妾聞く南山に玄豹あり、霧雨七日、而かも食に下らざるものは何んぞや、以て其毛を澤して文章を成さんと欲して也、故に藏して書を遠ざく」と。  
② 獨善。孟子盡心の上に、窮すれば其身を獨り善す、達するときは、兼れて天下を善くす」と、窮達は道を云ふ也。  
③ 兼濟。一切衆生を兼濟する也。  
④ 鹿王。春屋實錄に、師諱は妙葩、春屋と號す、皇帝師を請じて道場に於て親しく衣孟戒法を受く、明年中使詔を齎して山に入る、特に國號を贈る、聖旨に曰く、「爰に智覺普明國師之號を加へ、以て天下一人

山中一時の盛事なり、六年丁未九月一日、滅を含空臺に唱ふ、先づ遺誠を  
書して曰く、「老拙今世緣將に盡きんとす、因つて諸の法屬等に顧命す、余  
が溘然の後を待つて、宜しく須らく、林下に跡を晦して、火種刀耕、一生  
を終ふるを圖るべきなり、契經に曰く、「當に闍闍を離れて、山間空澤に獨  
處閑居すべし、云々、是れ乃ち吾佛最後の慈訓なり、寧ろ遵奉せざるべけ  
んや、汝等各々精嚴勤修して、庶はくは袈裟の下に向つて人身を失卻せざ  
れ、是れ余が深く爾が輩に望むところなり、汝等余が氣の絶ゆるを見ば、急に須らく收斂すべし、切  
に遺骸を留めて、以て人に之を見せしむるなかれ、土を掩ひ石を疊むこと既に畢らば、同志を勸めて、  
只だ首楞嚴神咒を誦すること一遍せんのみ、然る後、熊原を把つて太守に還し、苜庵を以て高野父老  
に付與して、各自に散じ去れ、父老若し又固辭の意あらば、汝等諸道友と相議して、一老成の宿衲を  
請じて、以て庵主に充て、佗の紫水の便當を討ぬる底の雲水兄弟の爲めに、一夏一冬、安禪辨道の所  
在と作すも、亦可なり、餘は復た言ふべきなし、遺囑々々、又偈を書して曰く、「屋後の青山、檻前の  
流水、鶴林の雙趺、熊耳の隻履、又是れ空華に空子を結ぶ、書し畢つて筆を擲つて即ち化す、世壽七  
十八、坐夏六十六、諸徒遺命を奉じて、全身を塔す、是時舉州の民、考妣を喪するが如し、凡そ僧尼  
を度すること千餘人、衣冠の族、法諱を授くるに至つては、則ち其の數を知らず、師化縁の將に盡き

の上の尊を蓋す」と。

① 建長の命を云々、義詮の公帖現に永源にあり。

② 中岩。佛種慧濟禪師也。

③ 玉腕。南禪玉腕梵芳、春屋葩に嗣ぐ。

④ 一關。建仁寺一關妙夫。

⑤ 考、妣は逝きし父、母を云ふ。



んとするを知つて、前數日に方つて、靈仲彌天に命じて祭文を撰ばしむ、  
文成つて師に呈す、師覽て太だ喜ぶ、後に二老眞前に 裝香して、各自に  
默誦するのみ、師の人となりや、顔角端偉にして、風誼簡遠なり、蚤に超  
邁特偉の資を負うて、人と競ふの態なし、平居讀書を勉めず、而も一覽則  
ち之を遺すなし、文辭の典麗、偈頌の幼妙に至つては、咸遊戯三昧の然ら  
しむるものなり、第だ雅より丘嶽に意あるを以て、遽かに身を 稠廣に脱  
す、蛇山鱸水、慨然として南遊し、往古の聖跡を歴、名師の門戸を扣く  
將に以て殊軌を覈究せんと欲するなり、然り而して、桑域に旋つて、國  
師の舊盟を渝へず、蓋し大唐國裡に禪師なきの意が、頃者杜撰の知識、禪  
道を將つて戯具となし、<sup>①</sup> 掉圍揣摩の術を扶けて、三家村裡の竈婦備夫を  
誑誘す、師懷を茲に痛ましむ、故を以て岩居川觀、確乎として應世の志な  
く、勢利を視るや腐芥よりも賤しく、王侯を待つことは浮塵よりも輕し、  
煨芋の烟の戸を出でんことを恐る、然り而して天下之を望んで以て佛法の  
津梁となす、瑞石に居るに暨んで、參徒日に臻る、聿に止むを獲すして之  
を受く、師の意にあらざるなり、攝政二條藤公良基、博學洽聞一時の碩匠

①靈仲彌天。靈仲は靈仲英、彌天は彌天釋也。  
②裝香。靈門錄に曰く、「問ふ、如何か、是れ佛出身の所、師佛前に裝香し、佛後に合掌す」と。  
③稠廣。稠衆、塵寰などに同じ。  
④蛇山云々、唯難所を云ふのみ、韓文公鱸魚の文に鱸魚の難を云ふあり。  
⑤國師は佛燈國師を云ふ、寂室和尚十八歳の時一掌を喫す。  
⑥掉圍揣摩、掉は排なり、圍は閉也、他人を排斥し門戸を閉づるなり、揣摩は人意を揣測するなり、人の鼻息を考へるの意、此四字鬼谷子に出づ。  
⑦設利は舍利なり、戒定慧の熏修する所甚だ得べき難し、最上の福田也。  
⑧金剛乘教。昔し大毘盧遮那世尊、秘密真言印を以て金剛薩埵に付し、龍樹菩薩に傳へ、轉々して大廣智に至る、下つて弘法大師に至つて日東に來る、即ちこれなり。  
⑨旺化。臨濟錄に「師化を旺んにするに正つて普化全身脱去す」と。  
⑩程を兼ねるは晝夜兼行を云ふ也。  
⑪燈子。畫像を云ふ也。  
⑫海藏は東福の海藏院也、虎關鍊公は實覺の子聖一の孫也。  
⑬師の肖たる、所謂地靈にして人傑也。  
⑭南董、左傳襄公二十五年に大史書して曰く、崔杼其君を弑すと、崔子之れを殺す、其弟嗣いで書す而して死するもの二人、其弟又書す、乃ち之れを舍す、南史氏、大史盡く死せりと聞き、簡を執つて以て往生心、第八如實一道心、第九

たり、師の眞蹟を觀て曰く、「世皆師の道德人に孚あるを稱す、而も書楷の未技と雖も、特に是妙あるを知らざるなく、」字畫火中に入つて焼けざるもの往々にあり、齒の落ちたると髮の剃れると、争ひ取つて十襲す、後に之を看れば、悉く 設利を産す、小師道證、始め 金剛乘教に入る、厥の祖弘法大師の肉身猶ほ存するを聞いて、高野山に往いて一たび瞻禮せんことを祈る、弘法夢に感じて曰く、「汝我を觀んと欲するや、今 化を近江州に旺にして、寂室禪師と稱するもの即ち是なり」と、證洒ぐが如くにして醒め、<sup>①</sup> 程を兼ねて北に走り、中路に一 輦子を嚮ぐ者に遇ふ、展べて之を見れば則ち師の眞なり、證意に之を異とす、既に瑞石山前に臻れば、墟落あり、高野と云ふ、證益々前夢の符會を忻び、速かに師に授禮す、師初め後生を以て知を 海藏の虎關の鍊公に稟く、鍊公適々作を過ぎ、厥の地の形勝を觀て曰く、「偉なるかな 師の肖たるや、清淑の氣、篤く一人を生ずる者か、」鍊公は宗門の 南董なり、其の言を立つるや必ず以てあるなり矣。  
<sup>②</sup> 贊に曰く、南天の祖師如來所傳の法を以て、分つて教内教外となす、顯密異なりと雖も、同一教内なり、昔者檀林皇后、密法を弘法に得、弘法



盛に之を稱す、后曰く、「更に法の之に邁ぎたる者ありや、弘法曰く、「大唐に佛心宗あり、是れ達磨の傳來するところなり、熾に彼地に行はる」と、后乃ち弘法の徒慧萼法師に海に泛んで法を覓めしむ、萼遂に杭州の鹽官國師に參見す、且つ太后の幣を通じ、仍つて其の上座義空禪師を請じて還る、是に於て皇后檀林寺を創し居らしむ、官僚指令を受くるもの少からず、然り而して、本朝時機未だ熟せず、播揚するに由なし、弘法豈遺願あるか、萼再び支那に入り、蘇州開元寺の沙門 契元を乞ひ、事を勸して 琬琰に刻む、題して日本國首傳禪宗記と曰ひ、之を羅城門の側に立つ、是に因つて之を觀れば、弘法已に教外の宗の流通を欲するもの必せり、其の十住心論を作つて我が宗を載せざるは、蓋し

く、既に書すと聞いて乃ち還る、と、又左傳宣公二年に孔子の曰く、董狐は古の真史也、法を書して之れを隱さず、と、即ち其明鑑を記するを云ふ。①贊は美を稱する也、文體明辨に、其體三ありと、一に曰く、雜贊、二に曰く、哀贊、三に曰く、史贊、此れ蓋し史贊に屬するものならんか。②鹽官國師。傳燈七、馬祖禪師の法嗣、杭州鹽官の鎮國海昌院齊安禪師也。③契元。其傳を詳かにせず。④琬琰。淮南子説山訓の註に「琬琰は美玉なり」と。⑤十住心論。空海毘盧遮那經及び菩薩心論に則つて十住心論を著して、諸宗を品藻す、第一異生抵羊心、第二愚童持齋心、第三嬰童無畏心、第四唯蘊無我心、第五拔業因種心、第六他緣大乘心、第七覺心不

極無自性心、第十秘密莊嚴心、是也。①諦信諦當。圓悟心要に、印禪人に示す、語に諦信、諦信と、即ち道を諦め信する也、諦當は單に諦め知ること也、玄沙曰く、諦當なるは即ち諦當、敢へて保す老兄の未徹在なることな。②前身後身否泰同しからず、前弘法と後寂室と境遇同じからず、故に或は内を説き或は外を説く、即ち時の分の宜き也。③十八上。南泉曰く、「我十八上にして便ち作活計を會す」と、又趙州曰く、「我十八上にして破家散宅を會す」と。④張皇すは張大すに同じ。⑤阿字門。寂滅無爲安樂之田地也、眞言宗の阿字觀を云ふ也、密宗は阿吽の二字を玄要と爲す、阿吽は即ち不生不死也、古語に八識田中に阿字の一刀

知ることあればなり、五百年後、再び扶桑に現じて宿願を償ふ者か、然りと雖も、教内の所談は、三機に漏れず、故を以て流通も亦遍く、聲光も亦熾なり、教外の指すところ、専ら一類上に根機に被らしむ、①諦信のものすら尙ほ多く得難し、況んや復た諦當のものをや、宜なるかな、②前身後身、否泰同じからず、愚者以て疑を容るゝなし、嗟乎歳纔かに ③十八上にして、忽ち儉師に一掌せられて臨濟の骨髓を徹證し、空手にして海に跨り、臂を掉つて諸大老の門に横行し、空手にして歸朝し、大覺正續の玄風を ④張皇す、化を歛めて ⑤阿字門内に歸入せんこと、亦遺恨なからんかや。

を下し、生死も又斷じ、涅槃も又截すと。

右昔時の年譜に據り、要を纂めて之を紀す。

寛永二十一年歳は甲申に次す。

永源住持一絲叟文守。



永源寂室和尚語錄卷之一

偈頌

偶作

無業一生莫妄想，瑞巖只喚主人公。空山白日蘿窓下，聽罷松風午睡濃。

書金藏山壁二首

借此閑房恰一年，嶺雲溪月伴枯禪。明朝欲下巖前路，又向何山石上眠。  
風攪飛泉送冷聲，前峯月上竹窓明。老來殊覺山中好，死在巖根骨也清。

九月十三日遊田原村，投宿茅舍，回來諸弟皆曲肱就寢，獨開窓觀月，聊寫老懷耳。  
戊子季秋將半日，田原村裡宿煙蘿，看來五十餘霜月，幽興不如今夜多。

長州逸上人袖出塊石，兩峽對峙，恰如璧青玉，中夾條白，直下若懸飛泉，凡寒巖空  
洞幽趣餘態，使人殊增丘壑之志，仍賦一絕贈之云。

故舊探懷示奇物，巉岈流瀑勢千尋。因思疇昔遊廬嶽，雙劍峰前獨自吟。

關西龍侍者高標清致，真叢林頭角者也。道聚山中共守枯淡，遽爾告別，以偈仍與  
次韻壯其行色云。

雪後諸峰潑翠嵐，寒梅初綻野村南。臨歧一句只這是，三喚機前著眼參。



春日遊吉備中山韻

勝地千年寺，房房竹樹間。落花埋古徑，幽鳥叫空山。遊客凌晨到，歸程踏月還。留題誰耀壁，才拙媿追攀。

贈長勝專使譚禪者

使乎使乎不辱命，佳聲須是播叢林。盡情話到吾師席，月下寒蟬咽夜深。

蘆鴈二首 飛鳴宿食一隻翹立

湘岸慣雙宿，胡天成幾行。平沙寒日暮，獨立恨何長。

霜風吹秋老，楚甸稻梁稀。切莫呼眠起，夢飛可北歸。

密叟侍者，遠自都下建仁特來山中相探，夜話達旦，甚慰十年之傾想，今歸長州省

師留二偈而別，依韻奉謝云。

林下老來誰與期，夢魂幾度到京師。今宵閑卻安禪榻，燈盞添油話舊時。嬾踏利門名路塵，千峰影裡獨凝神。故人俄把柴扉扣，又聽叢林事事新。

贈椿上人遊方

禪人來討贈行篇，暗把枯腸苦搜索。渾無一句可呈君，月照空山秋寂寞。

中秋值雨

指話以前正好看，覺天無滓影團圓。頂門不具沙門眼，卻被中秋夜雨瞞。

寄靈叟和尚

五更起坐聽松風，算故人來半作空。不識何時埋臭骨，煩兄閑夢入荒叢。

廣韻醜雄藏主

不在交談與寄書，同參句子舉無餘。年來老弟多嬾僻，休罷區區問起居。東南月皎海天晴，惹動高人萬古情。把沒絃琴彈一曲，風前誰是聽希聲。

寄靈叟和尚 在兵庫福嚴作

我此門頭接市廛，那堪日日事紛然。百錢買得一柄鑿，去斷青山安暮年。

重陽

凌晨掃葉立庭際，籬落西風露濕裳。時有山童來採菊，報言今日是重陽。

成親墓韻

身亡王事只名存，悲看荒墳長蘚痕。千古中山春寂寞，岩花香可返幽魂。

室山看花韻

野興催人青晝長，行看岩院滿庭芳。僧從玉樹陰中過，鶯在瑤葩重處藏。擁砌應添山月色，飄窓又助瓦爐香。老來好景難多遇，眼醉風光心欲狂。

遊八塔寺

一嶽歷三府，白雲覆碧天。峯高踰萬仞，寺古近千年。僧坐虛堂月，猿吟老樹煙。寄言浮世士，來此脫塵緣。

神根道中



怪石奇巖碧澗流，白雲紅樹夕陽秋。吳山楚水曾行徧，清興何如此勝遊。

佛涅槃

三界導師涅槃也，人天等是苦傷悲。谿山二月花如錦，錯認秋風紅葉時。

送調上人之京

八月九月風月好，一聲兩聲鴈聲寒。公驗分明須進步，元來大道透長安。

再遊大和寺

此地得重遊，春殘院落幽。花難歸樹上，雪易點人頭。鳴竹風吹夢，烹茶客自留。明朝又携杖，去要臥林丘。

壽聖養直和尚來諭，兼簡同門諸法兄，辭長勝之命。

嘉音兩度到林巒，驚起午眠開竹關。寄語龍峰下頭角，一生放我得安閑。

寄大澤庵主

大士峰前思大澤，安心山下獨安禪。君今抱疾吾還老，來往不知能幾年。

曆應辛巳七月六日曉，偶夢將死，寫偈覺而記之云。

錯把黃金鑄鐵牛，草肥煙暖臥林丘。今年五十有二歲，且喜不耕還見秋。

建武丁丑六月廿五夜，夢中得兩句，覺而續之云。

人生倏忽同露電，計較何曾徒自瞞。萬事隨緣胡亂過，飽餐白飯看青山。

書樵村山庵壁

澗水下人間，巖雲過別山。聊聽幽鳥語，似喜野僧閑。

和韻夜話

三祇劫外舊冤讐，一夜山庵得聚頭。曠恨怨言傾倒了，纏錢騎鶴下揚州。

謝訥堂和尚過訪

索寞春光巖下寺，高人金錫拂煙霞。空山日永將何待，唯有庭前一樹花。

宿西禪寺

火後西禪寺，門庭冷似灰。井河聲寂寞，嵐嶠碧崔嵬。唯有山雲宿，渾無俗駕來。上方老禪伯，古格復追回。

憶友人

山院春深客不來，空庭花落沒蒼苔。欲留流景怕無策，猶等佳人念未灰。身老尤宜居世外，虛閑只合臥巖隈。午眠一覺茶三椀，望斷千峰推闥開。

摘茶

枝頭葉底著精神，無限芬芳遠襲人。體用之中收不得，一籃漏泄十分春。

庚寅冬登備前金山，訪功上人幽居，援毫賦山中四威儀，書壁上云。

山中行，煙霞遠近失歸程。谿邊跌腳指頭破，流水聲和忍痛聲。

山中住，草衣藜食閱朝暮。千峰盡日入雙眸，不記青黃能幾度。

山中坐，石榻趺趺惟一箇。全非樂寂兼嫌喧，獨有閑雲相許可。



山中臥高枕，羅窗縱息情。天風吹折老松枝，叵耐驚吾濃睡破。

寄倫上人

締交英俊自忘年，一夜馳情困枕拳。夢裡分明相見了，爐邊聽雪對談禪。

寄淨妙實翁和尚

日聽聲光高耀天，衰殘依舊臥巖煙。西來三世重擔子，獨有荷山勞隻肩。

雪中寄東隆長老

庵外雪深積，庵中僧獨禪。同人如到此，共話普通年。

戊子姑洗之末，出遊而歸，忽覩北巖侍者見寄佳什，依韻寫懷云爾。

青鞵踏徧幾春山，病翼倦飛今已還。慣待宿雲分半榻，日昏猶未掩柴關。

驪珠求可易，心友得尤難。獨弄閑中味，白頭對碧山。

北巖濟侍者天資英拔，而蘊藉淳素，頗有古衲之風。從愚游最久矣，實爲忘年友于。丁亥冬謝事慈光，欲止餅錫於西祖明禪之間，此計未決。俄來告辭，要復歸養。愚庵全清高之節，不可得而留遏，其志亦足可嘉也。聊摘拙辭贈之云。

多載聚頭誠有因，拾枯蕘瀑寂寥濱。口甜心苦真相識，義斷情忘道易親。高掩松關歸舊隱，俯看人世等浮塵。竹房留得老禪衲，獨喜青山爲作隣。

聞鶯

鶴唳那曾堪比況，深花影裡弄幽簧。無人會得聲前旨，又逐春風過短牆。

次韻麟提藏主

可是憑君振祖風，曾聞宗說兩俱通。莫言千載知心少，且喜今朝同志逢。藏裡摩尼照襟宇，金剛寶劍快機鋒。徹宵傾倒無生話，月上遙峯古澗東。

訪忍副寺庵居

何事拂衣深退藏，亂峯影裡卜禪房。雲居庫下有華姪，終續楊岐六世芳。

震巖和尚前日見惠三偈，依韻奉謝，切勿示人，羞招羅公之誚，一笑。

撥轉白雲關，捩了人天眼。目價聲增，龍生龍子尋常事。且喜吾兄熾佛燈，深愛襟懷明似月。又添志氣烈如霜，浙東西與湖南北。共話還忘秋夜長，宗眼高明道自尊。任教表率我空門，今朝坐斷青峰頂。堪報先師不報恩。

再用震巖和尚韻

一出人間百不能，衰窮疎懶日相增。餘生贏得安丘壑，青眼看佗續祖燈。一別到今三十白，蒼顏鶴髮老風霜。秋窓雨夜青燈下，同打葛藤如許長。末法僧中誰可尊，紛紛多走利聲門。清高獨有雲峰在，奮志須臾佛祖恩。

夜宿千光寺

十有年前問故人，相看把手語如春。爭知此夜眠陳跡，月射寒窓風撼筠。

寒夜卽事

風攪寒林霜月明，客來清話過三更。爐邊閣箸忘煨芋，靜聽敲窓葉雨聲。



送墨浚之相陽

心到龍峰身不到，餘生已近鬼為隣。如今喜得子前去，替我能除塔下塵。

送會禪人遊方

臨濟曾參黃檗禪，烏藤六十蒿枝拂。今為君行贈此言，春山雨後碧如潑。

春日山行

滿頭疎髮撚銀絲，來歲逢春未可知。竹杖芒屨多野興，山花看到幾株枝。

夜宿龍聖寺月翁遺席

白雲峰下青嶂塢，一夜空房坐到明。露洗秋旻月初上，郎忙問訊老師兄。

訪俊鈍庵夜話達旦而見贈以偈依韻謝之云

一夕清談襟宇披，這回且喜扣玄扉。翻身跳下重淵底，奪得驪珠念八歸。

關西素維那，從淨智實翁老兄會中來，相訪巖居而出示翁所惠偈，老拙輒依其韻贈云。

袖裡金槌影動時，桃花含笑柳舒眉。克賓不負老興化，又向寶山山下歸。

翡翠

何年離鬱林，彩羽照清泚。身居枯葦危，心在深潭底。

鵲鴿

不管弟兄難，獨翹原上石。貪看胡蝶飛，似破其幽寂。

三月盡

無限風光已索然，殘花尚自舞庭前。春歸定有重來日，人老何曾復少年。幻跡多留青嶂裏，幽懷常在白雲邊。閑窓晝永如經歲，課罷楞嚴隱几眠。

贈宏上人

白雲深處掩茅茨，慚媿禪人問舊知。相送出門兩無語，長松影下立多時。

贈清公上人歸省西禪和尚

烏啼花笑興悠哉，知識門庭破草鞋。百衲如君無半箇，孤筇過我已三回。道情應是清秋水，世慮何其冷死灰。莫袖一雙窮相手，令師背上放光來。

戊午仲春，借榻於東禪之客檐，作涉旬之留，偶遊花嶽庵，訪于心公法兄，觀其韜鑑之韻致，幾乎追配瓊亮之高風也。愚謾遊江湖垂二十載，以未獲歸休之計為媿矣。紫栗青鞵他日重來，從公乎水邊林下，非愚誰歟。因述俚語紀其志云耳。

寥寥清夜適幽情，羅月松風孰共爭。不覺敲欄舒一嘯，知音只有曉鐘聲。春入燒痕紫蕨肥，携籃拽杖出禪扉。袖中辣手未拈出，輸與豎拳那一機。此生隱約倚寒巖，流涕難收口似緘。幽鳥不知頻話墮，亂峯影裏語呢喃。澗水旋添茶鼎湯，山花時助石樓香。破蒲團上無餘事，又見林巔挂夕陽。

入定猿

盤陀石上禪，應是息攀緣。孤影沈巫峽，三聲斷冷泉。



次韻麟日峰和尚

一生贏得一身閑，此樂自知言及難。物外高人同趣味，杖藜時復到林間。

借忠侍者韻寄幻居庵主二首 筑前春日藏山徒弟

心字不須門上書，一拳頭上沒親疎。他時慧日照乾坤，光有餘。等閑相見俱傾倒，卻恨平生心跡疎。道聚情懷唯一日，尋常交舊十年餘。

清見方崖和尚見寄一偈，拆成四絕，醉之。

龍壽山中老古錐，人間難得箇頑痴。今朝自笑携籃去，拾栗餐時忘剝皮。松風吹白鬢邊絲，應是秋深蒲柳衰。忽聽同參叢席盛，停鉏園手喜舒眉。寄言保此千金重，巨鯨背上三山聳。播揚大教海潮音，那處叢林不悚動。扶起祥雲零落時，須還驚嶠老宗師。關門不鎖家風大，去去來來礙塞誰。

材翁侍者訪及野部新居，終宵擁爐清話，臨別聊成小詩，致謝云。

誅茅新卜空山塢，遠問幽閑意不輕。燒盡枯柴言亦盡，共聽寒雨打窓聲。

龜峰悅山首座垂訪山中，而留兩月，款話傾倒，益見道義之厚，臨別聊寫拙章五十六言，以贈之云。

龜谷山中悅山叟，軒昂英氣出常流。攬南泉位老黃檗，掩古寺門陳睦州。衆衲服膺真表率，佳聲驚耳有來由。這回歸去遭峻擢，扶起宗風蕭索秋。

賢姪繁茂林，當初來備前安國，依止老拙，時歲未登志學，後十有二年，邂逅遠江野

部山中，執手話舊，相得甚歡，雖不同庵而住，數數來訪，風雨不渝，既亦更涼燠，益見其道義之篤，老拙衰暮之極，又謀去遠方，求幽棲地，今日一別，自非夢中者，無復會見之期，不免爲之悽然，仍寫與四十字，後來若想念，宜取之見者耶，一笑。

幻影圖深隱，秋風袂欲分。法多清夜月，龍壽暮天雲。去後誰思我，可憐獨有君。精勤持志節，歲晚振斯文。

書海印庵扁榜後

吾佛當年輕按指，指頭放出大光明。庵中主得此三昧，月自珊瑚枝上撐。

示僧二首

箇事明明呈似君，不須特地策功勳。風和日暖黃鸝轉，春在花梢已十分。參禪實大丈夫事，一片身心鐵打成。備看從前諸佛祖，阿那箇是弄閑情。

賢姪石礪特來訪，相陪旬餘，擁爐款話，甚感道義之篤，今又留偈而別，老拙不免依韻謝之，敢望戰爾。

閑寂空巖霜夜月，薜蘿庵裏老夫情。明朝子又下山去，何日重聽敲戶聲。

續翁和尚悼復庵和尚韻

古佛攝光聊誠徒，休言今日入無餘。禪參幻住人皆委，義在空巖我弗虛。塵積趨風群衲榻，篋殘問道指紳書。年來宗社增寥落，只向蒼蒼打幾嘘。

老弟特來瞻拜，偶師兄暫出，便欲歸去，而日既夕矣，一夜獨坐西軒之下，聊述五十



六言以據所懷云伏希驟爾。

玉礪師兄和尚几下。

老龍隱是我知心特問幽棲入邃林寶杖凌晨何處去空房投宿覺更深照人山月全顏色洗耳松風正語音可謂這回真會見明朝眷眷下青岑。

臘八因雪

黃面今朝成道了卻將禍事惱人天我儂求得星兒火燒爛枯柴看雪眠。

康安辛丑春余誅茅江州飯高山下越谿之上時有松侍者蓋余舊識空室老師高弟也寓于百濟僧舍數數來見訪孤寂雖相對移時多是不交一詞而去然其英邁之標粹美之韻靄然溢于眉宇之間竊喜衰暮偶得忘年友于也一日告別東歸受業余亦不免為之增黯然耳袖出紙需語將為再會之記因卒摛二十八言以贈云

老來生鐵作心肝一句何曾上舌端今日為君通線路西風霜葉滿谿山。

余忘年端友悅雲峯一別二十有餘載夢寐想念不已一日忽扣巖扉執手話舊相得甚懽而亦見惠妙偈唱歎之餘依韻奉謝。

蒼顏白髮經年別彼此昔人非昔人今夜肝腸傾不盡曉窓霜月落冰輪。

與周姪

當信吾宗無語句爾來得得欲何求草鞋跟底西風急八月依然是仲秋。

夜宿向陽寺

夜宿向陽山裏寺開基尊者我知心參拜壁間遺像立春禽啼斷綠松陰。

鳴海浦

幾人東去又西還潮滿沙頭行路難會得截流那一句何妨抹過海門關。

偶作

即心即佛鏡裏像非心非佛火中冰雨過雲開倚闌眺遠山無數碧層層平生渾不愛玄談多嬾所須唯黑甜老鼠偷咬牀脚響日穿疎竹照西簷。

與知足禪者

如何是佛即心是梅山梅子熟多時苦風酸雨村烟斷日暮行人迷路岐。

寄圭巖方書記時住園林寺

吾兄歸隱舊園林衰朽猶居雲壑深又是天寒歲暮擁爐聽雪憶知心。

相陽瑞侍者迂訪山中款話一宵厥志可嘉且曰欲還故里省覲先師靈塔庶得一

偈以為途中警策耳余老矣不辨平仄久之然懇求不已卒迅筆贈之云。

潭北湘南客夢驚一節千里問歸程誰知綠水青山外無限風光畫不成。

書西明寺壁

去春此地尋花到今日又看黃葉秋嶺上白雲凝不動自慚衰朽好閑遊。

休耕庵

閑田一片在山前耒耜拋來三十年只採松花充午飯煙蘿深處掩扉眠。



示村上人

道人來扣我柴門，欲把參禪旨要論。莫怪山僧懶開口，老鶻啼斷落花村。

辛卯歲口占

四海煙塵幾日收，山林朝市盡戈矛。昨宵一夢金難換，聊入無何鄉裏遊。

遊古靈山

爛卻靈山古蘭若，春來尙自有遊人。二千年遠岩前樹，花引頭陀笑轉新。

贈達禪者之少林禮祖

大道本通達，休將心覓安。老胡肉猶暖，嵩嶽倚天寒。

謝謙侍者惠蠟燭韻

白雲青嶂石谿邊，可惜長年掩戶禪。文武火光高萬丈，憑君要看一燈傳。

和光知客韻

客來與我投花偈，字字如珠宗眼高。萬別千差俱截斷，且驚句裏有吹毛。

戊戌秋初投宿千馬郡，如意寺檀那明海一見如故。拍掌清談，秋宵猶短，仍留一偈而去。他日取之見，則與對余同也。

馬村信士號明海，雖在家中勝出家，只使道情堅密去。那憂鐵樹不開花。

與翼姪訪石塔客居

道人踏雪問寓舍，月照寒窓坐對牀。瓦鼎烹茶春一盞，豈同政老橘皮湯。

定巖一侍者，於余有宗黨之瓜葛。遠來山中，相共攻苦食淡，屢閱居諸，酷見道義之篤。今朝忽告辭，而歸。覺雄師翁舊隱，余殘齡既逼，桑榆恐無復會見之日矣。老懷爲之悽愴而已。因據俚語以壯其行云。

三年聚首空巖下，未暇傾腸亦瀝肝。此地須留未後句，歸來爲問屋頭山。

天關老兄來山中，一夏道聚，日夕相共逍遙。或時論懷，至于結角羅紋處，彼此舉手搖曳而已。今趁秋涼，告歸舊隱，而見示佳什一篇，依韻以贈云。

踏遍天涯海角還，誅茅偶得此幽閑。白雲實是無心友，因憶古人分半間。

老拙一生寄幻影，乎山色水聲之中。邇來經由古江飯高山下，林谿幽邃頗愜野情。因築室數椽，安眠燕坐，只圖居此俟殘喘盡耳。旋有愛樂空閑之道流，憧憧沓臻，松根石上誅茅散處，蓋物以類聚，所以理之令然歟。關西薰聞叟，亦其一也。夫爲人爽拔精敏，孜孜爲道，真佳衲子。有時從容語曰：昔辭親離鄉之日，自謂吾早徂，大方撥草瞻風，依棲良道善友，晨夕咨參，究明己事，報父母劬勞之恩，醜佛祖覆蔭之德，幸獲挂錫名藍，在葦十霜於茲焉。同閱伏臘，不下五七百衆，屈于要擇，其一人將爲言行之師，何止若撥波求火也哉。凡屬見聞，非唯焦敗菩提種子，殆可滋潤輪回業根。深知今時一日出隨于衆，萬劫失利乎己之必矣。因憶古人法席全盛之時，尙逃名跡累茅茨石室，果食澗飲，終身與世邈如。嘗聞爲僧須是居巖谷，又云柳栗橫擔不顧人，直入千峰萬峰去。吾今忝攀隱哲之勝軌，拂衣遠引，永歸雲山深更深處，乃竊



自誓寧可將身投火坑，不復腳踏叢林圓。寧可窮死荒蕪下，不謁搢紳豪富門。寧可枉遭斷舌災，未悟不妄談般若。予聽其詞至當痛的，不覺涕下嘉歎久之，仍迅筆記取系之以二十八言贈云。

西山亮去唯幽谷，南嶽瓊亡空白雲。追慕清標高格者，又來巖下獨尋君。

康安辛丑，余投老江之飯高山下。時霜林果侍者，自京師來，同守枯淡。經春抵冬，余愛他天資絕倫，而不與聰明之所惑。孜孜兀兀，斯道斯勤，敢無斯須少間虛棄底工夫。一夜擁爐閑談之次，語曰：吾陪衆之日，嗜好古書，幾乎廢寢忘餐。忽有自省，學解機智，動卽長無明，增我見，殆爲求聲利之基本。寧非生死之根株乎？不如不以元字腳，留于心上，甘作百不會，百不知底漢。退步就己，以悟爲期耳。亦思古人大法，旣明之後，尙逃物迹之累，或一入西山，永不復返，或谿流菜葉，始爲人知，或有世事悠悠，不如山丘，臥藤蘿下，塊石枕頭等句。吾儕何人乎？只麼聚首打闕，徒閱裘葛，今後誓不復入衆，追踐隱哲芳躅，斷送斯生耳。余益嘆其機見高妙，實非碌碌餘子所逮，爲偈以贈云。

我擇江山深處住，谿頭石徑看雲臻。稱龍雜鳳英靈子，殘月長庚衰暮身。共掩茅茨庭積雪，旋燒檮杌室生春。莫言法社今岑寂，異日林丘自有入。

贈鏡庵主

卽心卽佛太郎當，非心非佛絕商量。芒屨踏破關山雪，處處寒梅撲鼻香。

和靈叟和尚韻

丘嶽襟懷冰雪面，庸流滿世少斯賢。可憐虛度光陰了，不見高標又十年。

芝巖書記累枉顧山中，足見不忘道義，況亦惠以佳什，唱歎不已，媿其續貂，不敢攀韻尾，別寫小偈奉酬，切勿出示於人，只將去前頭糊窓，或是覆瓿，方知老拙用心之勤矣。

年老身窮人所棄，吾兄何事問庵居。臨行求語無可說，強豎拳頭當贈車。

送牧書記

掃除夫子文章印，擊碎如來藏裏珠。一策春風阿剌剌，此行那敢涉脩途。

水車

奔流光裏機關立，便轉曹谿大法輪。器器相傳無異味，群生一洗渴心塵。

清居軒

青山一抹隔紅塵，蘿月松風能卜隣。機境都來高坐斷，寥寥不見到門人。

成親墓

舍忠殞命最堪憐，掩恨蒼苔二百年。無事休來平氏客，恐驚泉下永宵眠。

中秋偶作

中庭無人月自明，索索金風入衣袂。旋拾落英盈地香，冥鴻聲遠情何極。月到中秋最利害，使人特地惱閑情。一年三百六十夜，輸卻今宵半刻明。



山居

不求名利不憂貧，隱處山深遠。俗塵歲晚天寒誰是友，梅花帶月一枝新。

丙午歲試筆

山中氣象即辰新，盡是明心見性人。添得滿空飄瑞雪，梅開五葉一花春。一毫頭上發春容，徧界靄然和氣濃。莫管山僧頭已白，曉來雪覆萬年松。

宿金剛寺

隣寺屢來遊，通宵談未了。山村無更鼓，恣白覺天曉。

耕月

趁起鐵牛頻著鞭，山前何處是閑田。一犁雨過千峰外，玉兔推輪下曉天。

無參

當處知非放下休，有何箇事可馳求。南方丫角小童子，空向百城煙水遊。

江月

渺茫楚水拍空流，潮撼錢塘夜不收。玉鑑光寒萬波底，依前天上一輪秋。

遁巖

塵世逃蹤如避秦，碧松崖下寄孤貧。寥寥無鳥含花落，不許空生來卜隣。

竹隱

爲憐貞節與虛心，特地移茅更入深。休擲片輒輕一擊，閑聲恐是落叢林。

竹堂

憶昔香嚴一擊來，六門長對遠峯開。茫茫摘葉尋枝底，多是空從闔外回。

孤雲

一片無羈自在飛，卷舒開合更何依。笑他多是從龍去，獨向舊山深處歸。

雪樵

風攪空花片片飛，老盧提斧出柴扉。自知徹骨寒來重，擔取無根樹枝歸。

要翁

休把三玄排列去，寧將至德比家風。是佗親切爲人處，老矣指西還作東。

別宗

雖離標月指頭邊，不是拈華微笑禪。聞說泥牛參木馬，迦文法派更流傳。

悟山

自從除卻礙膺物，拔地高風萬仞寒。一點迷雲飛不到，峰頭夜夜月團團。

慧海

一點靈知因定發，無邊香水納衆流。泥牛闖入洪波裏，高吼珊瑚明月秋。

堪叟

面上唾痕如雨點，耳邊惡語似雷轟。長年一種平懷去，添得眉毛霜幾莖。

月翁



坐斷廣寒宮殿高，天風吹鬢半霜毛。光吞萬象無邊表，炯炯雙眸老益豪。

柏翁

千年貞操伴松根，蒼老勢如龍屈蟠。今日叢林梁棟漢，看來盡是我兒孫。

本閑

深窮萬法徹靈源，豈與末流同日論。物外寥寥常獨坐，任他地覆復天翻。

敬庵

動靜常居慎肅中，何人不仰這家風。低頭獨坐茅檐下，百鳥潛蹤春晝空。

雲叟

舒卷無心轉淡然，千峯萬壑幾經年。既休爲雨從龍去，自有兒孫垂布天。

鑒翁

揩磨淨盡一靈臺，曠劫古菱花正開。照破未生前面目，雪眉掀卻笑哈哈。

通叟

萬法根源都達了，任佗年老亦身閑。卻將千聖流傳底，分付兒孫高掩關。

友山

茫茫塵世少知己，眼界蕭條冷似秋。要見渠儂真伴侶，千峰萬壑碧凝眸。

西峰

五天獨聳勢巍然，高壓東方萬八千。寸步不移窮到頂，衲僧脚下是通玄。

悅堂

慶快平生非等閑，燈籠露柱笑開顏。誰知千古分明意，大坐當軒風月寒。

怡雲

我此山中心悅適，清奇冷淡舊相依。倚欄盡日堪縱目，卻怕從龍爲雨飛。

懶庵

獨逞疎慵謝萬緣，柴門深掩度殘年。對人猶自忘開口，莫怪無心強豎拳。

喝巖

忽雷轟破太虛空，嶮布危分幾萬重。千里聞風驚吐舌，啼猿尙在月明中。

月窓

水輪高輾碧天秋，光透虛樞灑氣流。內外玲瓏常不夜，如何著得睡彌猴。

月屋

圓未圓前眼豁開，茅茨變作玉樓臺。縱超物外南泉老，不許敲門推戶來。

玉斧修成幾度秋，瓊樓金殿類難侔。直饒光境俱亡底，爭似且居門外休。

石室

嶺巖函丈誰能入，戶牖堅頑鎖薜痕。碧眼嵩山面寒壁，黃頭摩竭掩空門。

無塵

倒拈生鐵秃蒼帚，驀忽翻身一掃來。普請諸人看脚下，閑閑地上絕纖埃。



月山

圓未圓前須著眼，屋頭青嶂廣寒宮。若從光影那邊看，雲鎖煙籠千萬峰。  
桂輪高挂碧天寬，萬朵峯巒玉一團。巖下空生腸欲斷，孤猿叫落五更寒。

永源寂室和尚語錄卷之一終

永源寂室和尚語錄卷之二

大林

森森植立閣浮樹，枝葉交加歲月長。覆蔭恒河沙數客，炎天無日不清涼。

字山

拈起毫端義炳然，孤峰峭峻勢凌天。更從一點已前看，未必須彌到半邊。

順叟

與物相逢未曾逆，得隨流處且隨流。滿頭白髮三千丈，餘算今年八十秋。

古巖

不落今時高著眼，玲瓏八面碧崔嵬。欲知空劫已前事，且向懸崖撒手來。

竺雲

靈鷲峯頭膚寸興，五天便見影層層。幾回爲雨霑沙界，歸伴半間分屋僧。

空極

諸法以何爲座也，十方不立一微塵。是心窮至無心地，選佛場中及第人。

竹澗

一兩莖斜三四曲，當頭直永截根源。後來末學論枝葉，昨夜前谿撈月痕。



樵屋

榮枯直下一刀斫，擔取歸來谿畔家。賣與買人入不見，柴門高掩臥煙霞。腰斧擔歸枯爛柴，茅廬只是傍谿棲。盧郎常入新州市，門掩寒雲日又西。

石澗

最碓确處平如砥，下有寒谿徹底清。大小山中閑佛法，流傳將去太忙生。

傑堂

門風挺出萬人頭，寂寞庭前丈草秋。正是衆中尊貴墮，燈籠露柱笑不休。

隱谿

韜光鏟彩幾春秋，澗底誅茅蓋卻頭。恐是世人知住處，莫教榮葉放隨流。

默耕

口未開前談不二，山河大地怒雷轟。鐵牛鞭起一犁雨，祖父田園秋已成。

玉巖

一片無瑕耀萬山，玲瓏八面又高寒。連城至寶非難得，便請懸崖撒手看。

愚隱

棄才泯智返癡頑，拙跡懶留塵世間。常祖移茅深處去，亮公拽杖入西山。

徹叟

百巾千重列祖關，一時拶透不爲難。而今年老無餘事，素髮垂垂心自閑。

茂林

深沈鬱密影敷榮，梁棟奇材集大成。因憶雄峯擲叢席，蔭涼徧界古風清。

月舟

桂輪高挂碧天清，萬頃煙波一葉橫。光境俱忘忘不立，蓬窓靜坐夜三更。

休庵

古德縛茅泉石邊，見僧尙自豎空拳。不如一歇一切歇，門掩煙蘿盡日眠。

西谿

萬里岷峨夾碧流，急如劈箭有源由。回巖亂石攔不住，直到東溟方始休。

大年

試將壽域配乾坤，無始無終寧紀元。算自威音至彌勒，聖凡是我小兒孫。

一澗

源脈何曾落二三，莫將支派涉多談。誰知不混常流底，涓滴全無湛似藍。

一叟

橫行湖海逞孤風，今古應無第二翁。試問生來年幾許，擡眸笑指太虛空。

松嶽

蒼翠豈惟千萬年，風濤激起祝融巔。大夫名不污貞操，壓斷諸峯高插天。

不立

不立



誰論是句與非句，一切剷除當處空。鴈字成行秋日晚，無端玷辱我宗風。

祖庭

少室門前平坦地，千年徒自長莓苔。一方明月光如雪，斷臂師僧殊未來。

華嶺

五葉開時萬木香，此山領得幾春光。誰能拈起誰微笑，絕頂寥寥又夕陽。

靜中

一室寥寥常獨坐，渾無外事動閑情。有時欲截窓前竹，耳亂風枝雨葉聲。

直翁

指人見性還遷曲，特地如何證父羊。爭似三家村裡漢，垂垂霜鬢事耕桑。

愚默

百不能時心已灰，飢飡渴飲放癡呆。雖然杜絕孃生口，誰聽其聲轟怒雷。

歸海

須知格物本無功，衆水皆奔渤海中。當日馬師聊翫月，大雄峰頂浪翻空。

曉山

玉兔已過西嶺外，金烏初上最高峰。霜天欲曙唯寒色，萬嶽千巖一目中。

實堂

餘二非真唯一事，滿軒風月意分明。舉揚已得無虛偽，不管庭前荒草生。

覺海

大圓滿果浩無邊，自有金波湧拍天。始本雙忘忘不立，珊瑚枝上月嬋娟。

藏叟

恰似摩尼韜寶光，退身深隱幾青黃。教佗魔佛窺難見，白髮吹秋坐夕陽。

雲澗

谿邊歸去抱幽石，似悔當初出岫行。從此凝然閑不做，教它流水太忙生。

日峰

金鳥飛上碧層巔，陽谷咸池欲曙天。刹刹塵塵照臨下，孤高峭峻是通玄。

梅山

塵沙刹界照臨圓，屹立扶桑陽谷邊。腳下何人黑如漆，且來登此最高巔。

竹叟

昨夜一枝凌雪開，千巖萬岳見春回。欲參心即是佛旨，向最高峯進步來。

霜山

心虛體勁直還清，獨立叢林稱老成。且喜此君增氣節，龍孫龍子逐年生。

春谷

青冥露結布寒威，染盡千林暝錦機。唯有孤峰白如雪，曉天雲靜峭巍巍。

雲罩桃花洞口橫，如呼如答亂鶯聲。風光長是二三月，卻笑廬山錦繡名。



旨庵

得宗訣後便歸去石室茅茨三十年此意無人來問取寥寥掩戶綠羅煙

萬山

等閑倒指算來看疊嶂重巒歸十千不涉數量高著眼通玄峰頂插青天

方外

本色衲僧真住處遠離上下四維間堪憐歷代傳燈祖出得西天東土難

釣月

垂絲千尺泛扁舟意在金鱗幾度秋今夜不空把竿手玉蟾影動上鉤頭

桃隱

煙霞鎖斷洞中空獨愛花開爛熳紅不許避秦人到此夕陽流水幾春風

松峰

風攪千年蒼翠動山頭日夜激驚濤似嫌凡木交枝葉立處凌雲萬仞高

自閒

不是依他方現成從來已事太分明山堂夜靜聊傾聽雨後前谿添得聲

徹叟

翻身透得祖師關百巾千重也是閑老去渾無些子力倚筇獨立看青山

無有

佛語猶嫌到耳邊等閑眇視祖師禪渾無一法投吾意只對青山高枕眠

石叟

對人似有點頭心苦髮垂霜歲月深歷劫應無消日也兒孫大小滿山林

端堂

門庭徑直恰如弦本是梁方又棟圓古意分明人不薦滿軒風月轉蕭然

仙巖

閑名留得赤松子陳跡徒存黃石公猿叫蒼崖秋夜半解空須坐月明中

明海

心月孤圓影欲流金波自湧幾時休任教不昧靈源底直見珊瑚枝上秋

絕照盲者

工夫日用弄光影歷劫何曾得道成打破當臺閑古鏡本來面目自分明

高庵

欲知我箇誅茅地三十三天在下方佛祖無由仰望處如何百鳥去忙忙

月峰

靈山話與曹谿指只在平常光影邊峭峭巍巍高著眼通玄孤頂一輪圓

瑞巖

靈芝生處玉玲瓏絕壁懸崖壓半空昨夜孤猿叫明月聲聲都喚主人公



聞翁

飛聲宇宙似雷奔，側耳人皆喪膽魂。雙鬢霜寒秋已老，盡閤淨界是兒孫。

太原

昔年有箇師僧在，講罷法身歸我家。畫角風前唯一曲，寒梅落盡幾枝花。

信庵

養諸善法道之源，居此長年獨掩門。春過空山人不到，紫藤花落擁籬根。

默齋

毗耶杜口古風存，盡日寥寥獨掩門。箇事未曾輕漏泄，谿山檐外已多言。

天叟

碧霄漢是我生緣，俯看三千與大千。烏兔推輪過腳下，眉毛白盡不知年。

面鐵

堅頑露出六州邊，妙密鉗鎚打得全。鼻孔眼睛本來具，擬開口笑待驢年。

重雲

百千萬片成一片，那得輕輕出岫飛。鎖斷牛峰閑不徹，老融須掩半間扉。

潭月

古今誰下蒼龍窟，湛湛如藍萬丈深。唯有寒蟾光皎潔，夜來依舊落波心。

昨與防州騰上人，扁所居廬曰幽棲。復來請安別稱，仍號高庵，乃作偈贈云。

獨居萬象森羅上，下視諸方門戶低。豎起拳頭春又過，無人來此問幽棲。

布衲

曹谿屈胸是爭端，鷲嶺金襴傳卻難。我箇麻衣較些子，年年補綴得遮寒。

世謂布衲乃直綴，若內衣之稱，全非袈裟類也。余偈意似大差誤矣。但余大元至治辛酉春，游南嶽次，抵于草衣寺。寺後有岩洞，而極幽邃，讀寺記云：昔蜀僧字奉初，嗣馬祖，嘗編草為衣。隱于是，因號草衣岩。今為寺，名草衣寺云云。余經行廊廡，回觀壁間，古今名賢宿衲留題甚多矣。獨張無盡一聯，稱絕唱云：古人一悟便心安，計較何曾萬百般。識得草衣衣下事，任他麻衲與金襴。余引此詩以為證耳。

高巖

有巖有巖摩青霄，玲瓏八面轉岩曉。煙霞猶自飛不到，烏兔還疑遶半腰。古今堪仰觀，若何容躋攀。佛祖望崖退，空生得坐難。道人素具衝天志，我取斯巖以為字。名也實也，正抗衡。乾兮坤兮，少隣比。舉世都無高尚情，區區日逐下流行。早晚歸看幽鳥舍，花落誰與同聽孤猿叫。月聲。

遊星攀山僧舍

千峰嶮峻一目收，引臂戲攀斗牛立。徐步煙嵐紫翠間，迤邐石磴躡零葉。老屋空山秋日寒，土堦積雨苔錢疊。因思吞佛視雲霄，誰復移茅深處入。此道今人渾蔑如，風松吟罷草露泣。歲晚幽棲意自容，且呼猿鳥為相揖。

獨遊東谷之知足庵，時濟北巖養病於下庵，遂題其壁間而去。



披榛來扣禪扉，欲問煙霞痼疾。孤雲出岫不歸，只有松風瑟瑟。

云。 愍侍者來山庵，道聚同守枯淡。夏罷告別，歸龜峰。桂光庵臨岐求偈，卒成長句以贈。

僻居卜窮谷，將石支牀腳。道人從何來，且喜伴幽獨。三尺茅檐下，聚首度一夏。討柴與挑蔬，安禪有何暇。氣質不群，又妙年。它時平步九層天，於菟頭上戴麟角。俄然別我，下巖煙。布毛吹起處，侍者便悟去。一等弄業識，茫茫無本據。此事若為論，笑倒鐵崑崙。爭如送出松門外，看山看水兩忘言。草鞋跟底清風生，行行掉臂等閑行。行到中秋三五夕，龜峰孤頂桂光明。

送珍上人之常州，見復庵和尚。

巖桂清香飄，西颺吹颯颯。江天雁聲寒，關山耀古月。臨濟德山堪縮頭，釋迦彌勒且結舌。描不就，今畫不成。知佗畢竟是何物，迷之者徒勞，石上覓蓮花。悟之者也是眼中著金屑，全無巴鼻。甚怪奇，古往今來難委悉。珍禪珍禪，為道專切。我憐蒲柳衰躬，汝守松筠貞節。九登三到，早留心。千山萬水暫相別，欲掃一千七百爛葛藤。先去參見常州老活佛。

贈僧謁復庵和尚。此僧遊五臺，得放光落髮。二石歸亦曾遊高麗云。

上人袖裏有五臺，放光落髮太奇哉。非惟親見文殊去，參遍南方知識來。吳雲楚水草鞋底，又向三韓走一回。常州古佛今說法，行行切忌此徘徊。

古播言侍者聚首山中，孜孜在道。佳衲子也。一日來告辭，乃贈古風一篇云。

言前領旨早是遲，句外明宗猶未徹。三呼謾討犀牛兒，爭識七華又八裂。倒騎鐵馬過崑崙，和

空蹈破水中月，德山拱手高閣棒。臨濟抵首且收喝，且收喝卻切怛。雨霽亂峯青，春禽花裏聒。

贈釋侍者

凝滯頓釋，灑灑落落。電卷星飛，龍驤虎躍。疎慵老頭陀，一生投丘壑。同志遠方來，慚愧嘗冰蘖。酷愛移茅入深窠，火煨芋檨格。古風不振久之，林下年年蕭索。千峯玉立掃秋晏，冷翠岩屏挂飛瀑。今朝君已下岩曉，誰共同看山月白。

贈松嶺秀侍者東歸

侍者侍者參得禪，草鞋跣跳飛上天。虛空開口笑不徹，須彌顛倒走如煙。一條拄杖活似龍，等閑吞卻十方空。威音王佛驚吐舌，二三四七盡潛蹤。誰管管冰蘖，步步起清風。千里江山晴日照，白雲漠漠生遠峰。偉才豈是易討扶，取欲頽法曠。截斷葛藤之舊枝，蔓把金剛劍而加磨鑿。將謂叢林已凋落，且看冬嶺秀孤松。

贈英侍者歸省

侍者參得禪了也，倒騎鐵馬空裏走。非唯笑殺崑崙兒，驚起須彌打筋斗。八十衰翁百不能，寧期英俊聊聚首。祖庭喜有箇長松，當持晚節於霜後。珍重楊岐栗棘蓬，如今既是入君手。他時拋出與人吞，四七二三難下口。那堪別我下層巒，風前倚杖獨立久。織罷蒲鞋莫留連，再扣柴扉問暮年。

贈照禪人歸故鄉

百花爛熳，幽鳥關關。春水千澗，春雲萬山。擗瞎衲僧頂門眼，照用同時也是閑。太奇絕，好正觀。



大悲千手攔不住，步步親從舊路還。

備前要侍者，偕予寓但之金藏山，冬迄于春，忽一日辭往京師，俚語以代費別云。

子伴病夫金峯索糗，對雪擁爐，口邊生醜，三玄三要懶商量，四句百非渾剗卻，今朝又逐春雲歸帝鄉，何日相逢共看山月白。

贈龍岩仙藏主

貞治癸卯仲秋月夕，余忘年友于，光德龍岩老兄，特特遠來見訪，岩居相得，懽甚，同下錦藍亭上，翫月，余謂龍岩曰：靈山指曹谿話等，且置不論也。寒山子云：吾心似秋月，云云，正是秋月，今夜溢目最好，只吾心實未知其所在也。然龍岩將醜語之頃，時有山童侍旁，敲松根，歌曰：心向何處尋，山中闕寂，良宵欲深，皓月高懸，虛籟滿林，谿聲潺潺，漱玉鳴琴，石女木人，起舞，舞虛空，開口笑吟吟，余勵聲訶曰：休休，小子多口，二人携手歸庵就寢，翌旦援毫記焉，以贈龍岩公云。

### 佛祖贊

釋迦三尊

三界獨稱尊，十方無等匹，普賢乃左輔，文殊是右弼，象王休回旋，師子忘嘔呻，元來不起金剛座，萬德金容應刹塵。

菩提樹下金剛座，滿口縱橫大脫空，從此二千三百載，依然明月伴清風。

### 出山相

任他流水下人間，莫怪浮雲歸故山，六載艱辛柴骨露，這回果改舊時觀，嘗水嚼麩成何事，討得通身瘦似柴，四十九年三百會，夢中說夢誑癡獸，雪嶺枯坐成箇甚麼，勉強出來，人天殃禍，等閑放過二千年，今日相逢親勘破。

杜陀釋迦，擊鉢孟，持錫杖，立岩瀑下。

雪嶺沙門，枉出人間，鉢孟無底，金錫光寒，岩泉應有倒流日，滿面慚惶洗卻難。

彌陀佛

塵念頓除，如明鏡面，安養三尊，即時示現，區區若是望西方，華池寶樹怕難見，紫金光聚，慈容烜赫，區區迷徒，向外求覓，把閑思念，暫時忘樂，邦果不在西方。

聞說此無量壽佛尊像，一夕罹回祿災，而後得之，熱灰堆中，空絹皆燼，像無所壞耳，遐邇奔趨，驚駭嗟嘆，逆知劫火洞然，大千俱壞，敢不隨他去，神異寔不可測，因焚香稽首，聊述贊詞云。

當初因甚離安養，今日無端入火坑，幸是幻身燒不爛，且居茲土度群生。

觀音大士

手搯念珠，足躡蓮萼，入流亡所，返聞遺覺，衆生界空，我願方極，刹刹塵塵，靈光赫赫，回首貪觀水中月，不知眼裏著金屑，別別別，無量劫來，得一概。

瀑布透石，松崖撐空，碧草爲座，瓶柳春風，眼處聞兮耳處見，不知何劫悟圓通。



從聞思修，入三摩地，一身分化三十有二，應衆生心如月印水，大智光明無處不至，苦海算沙念珠輪指，迷途忘歸，寶蓮襯趾，春透百花，鶯啼千里，南無觀音，圓通大士，入那伽定，示現圓通，悲心一點，衆生界空，岩泉何事響玲瓏。妙相巍巍，梵音落落，擬議不來，鐵圍懸隔，白花巖上千尋瀑。盤陀石上，古瀑巖邊，悲願海濶，妙智光圓，聞空聞性，見離見緣，圓通三昧，隨處現前，塵塵刹刹，澍法雨，手裏春風，柳色鮮。

圓通三昧，塵刹現成，耳裏山色，眼中水聲，劫外春風，瓶柳青。

滄溟千尋，悲心甚深，崖瀑無聲，聞塵自清，大士圓通三昧力，世閒那有苦衆生。

塵刹刹土，救人患難，將謂一去萬劫不還，嘆補陀巖上自安閑。

十方一華座，徧界大圓光，何止分身三十二，春來萬國百花香。坐圓相中。

塵塵圓成水月場，刹刹渾是空花座，歷劫無人入得來，普門元自不曾鎖。

百千三昧水中月，四八應身空裏花，歸去補陀巖上坐，青山老卻幾烟霞。

圓通門戶等閑開，惹得龍天特地來，終日寥寥對巖瀑，入流亡所坐堆堆。

清淨光圓，弘誓海濶，楊柳春青，頻伽水活，寥寥獨坐，沒人來，可惜普門徒自開。

三有苦海，一葉慈舟，普度群類，到彼岸頭，壺中春滴，柳條露，塵刹圓通法雨流。

寶華王座坐巍巍，湛然深入三摩地，刹刹塵塵應現身，豈惟四八而已矣，古皇天下樂無爲，化跡猶存丘索類，爭如瞻仰慈容入，悔過捐邪伏，妙理燒旌背，水勞籌策，滅竈添兵，又多事大士。

未由動聲氣，生死魔軍自逃避，普門歷劫缺關鑰，願海何嘗有涯涘，返聞聞盡見非見，鳥啼花笑只這是。

盡謂龍天來側耳，垂慈何必在音聞，無人入得三摩地，海畔青山空白雲。

大圓滿光，妙相堂堂，昏夜星月，苦海舟航，如今深入三摩地，瓶裏芙蓉吐定香。

瀑泉穿石，岩樹凝雲，天真明妙，泯見亡聞，終日支願坐，眼兼瓶柳青，無人入得三摩地，爭識普門元不局。

如意輪觀音

終日撐願坐，思惟善哉，深入悲願海，度群生了已多時，珍重如意觀自在。

長州逸禪者，舊收印本普門品一卷，首有補陀大士像，嘗羅回祿，然後得之灰中，雖

空紙少燼，像竝經字，敢無所壞者，從予需贊，乃稽首拜手，謹書其上云。

真空妙相，圓通三昧，劫火光中，巍巍如是，嘆黑底墨，分白底紙。

文殊大士

覺城東際，教壞童兒，謾把師子，卻作馬騎，祇緣方寸吹毛利，自肯堪爲七佛師。沒字殘經，看未了，亡鋒古劍，只空持，長年癡坐金毛背，誰信曾爲七佛師。

地藏

切利天宮，受佛遺付，有沈苦者，誓我救度，度生說甚到慈氏，虛空雖盡無窮已。切利天宮，親受佛勅，虛空有盡，悲願無極，寶珠在掌，救拔世間困窮，金錫振威，擊摧地下牢獄。



六環金錫，一顆摩尼，雨物救乏，拔苦垂慈，雖有虛空墜地，日應無濟，度棄人時。

達磨

梁王相對不相識，夜半扶桑日杲杲，踏斷大江無一滴，莖蘆葉冷幾秋風。右杲侍者請。

剛道廓然無聖，乃是觀體現成，元來自救不了，若何度得迷情，長江萬古東流去，腳下依然蘆一莖。

六宗邪破一言下，五葉花開萬國春，自普通年到今日，是誰得見箇全身。

寒山

家在五臺歸不得，路頭忘卻已多時，援毫側立寒岩下，想亦應題落韻詩。強謂吾心似秋月，爭知肚裏暗昏昏，不須合掌勞人事，歸去臺山且掩門。

拾得

拋卻峨嵋好風月，赤城山水且逍遙，看人寫字忘研墨，回首那知劫石消。閑卻峨嵋銀世界，國清寺裏恣佯狂，數行貝葉看未了，枯木岩前又夕陽。

布袋

率陀天上幾時得，還灰頭土面且放癡，頭等箇人來，渾不見，長汀風月爲誰寒。誰信化身千百億，獨遊獨處四明廓，卻將天上長年樂，換得人間一覺眠。寄跡四明闌闌外，灰頭土面得人憎，自謂化身千百億，我言天地一閑僧。回頭轉腦笑何事，終日茫茫走市廊，爲愛長汀風景好，多時忘卻率陀天。

政黃牛

浮盆聊翫清池月，留偈還辭國士筵，白鷺鷥邊黃犢背，眼中老卻幾風煙。

郁山主

一巖當頭三際斷，卻將魚目作明珠，安知今日谿橋上，又跨蹇驢歸畫圖。

大覺禪師鏡中現觀音像

謂之大覺全不是，喚作圓通被眼瞞，欲知二大士真體，借手東平破鏡看。

大覺禪師

金錫出巫峽，踏遍楚水吳雲，泥牛過窓樞，吼破清風明月，隨方赴感，祠山靈神助化權，應物分形鏡裏圓通呈，魄拙端的驗人，手親眼活，邪禪輩飲氣吞聲，老聵翁遺風餘烈，特特西來何所爲，箇是本朝最初教外別傳師，問世英哲，蜀川權奇，松源的派，無明光輝，初來本朝，同別傳師，邪徒妬害累百流支，回瀾砥柱屹然高崎，啓迪迷情，深慈痛悲，天下建長開，勸雄基，千古萬古福山巍巍。迪長老請。

奇哉大覺與圓覺，同德同風道亦同，震旦扶桑爲鼻祖，分身揚化振宗風。

中峯和尚

若論這老和尚面前，則山河大地亦是幻，色空明暗也是幻，三世諸佛也是幻，歷代祖師也是幻，乃至菩提涅槃真如實相等，一一靡有非幻者也，掩光之後三十年，留得箇非幻底，握麈尾拂踞曲条牀，煒煒煌煌堂堂巍巍，勢與西天目山爭其高寒，徧使盡大地人瞻仰肅恭而已矣。



萬德莊嚴圓滿身，虛空爲舌若何申。我今不免強道取，自佛已來唯一人。

南浦和尚

佩息耕真印，離先聖途微。舊眠橫岳雲，晚翫巨峯月。手握麈尾，坐趣來機。崖崩石裂，電卷星飛。夫之謂應天子之詔，唱松源之道，大應國師者耶。

佛燈國師

道德光輝揚日月，眼空寰宇僧中傑。宏振玄風何凜冽，全機別舌轟霹靂。摧邪說，魔外纔聞肝膽裂。如今林下多饜飶，大法千鈞懸一髮。休愁殺龍峰，萬古盤寥沓。

咄者老和尚萬般似不曾，當機雷奔電激。即時天靜水澄，殺人刀活人劍。少處減多處增，佛也應難覓形跡。閻浮界裏無此僧，夫之謂碩大光明照映今昔。松源的派，天下佛燈。寄白相請。

超然標格，具大眼目。衲僧冤家，叢林軌則。語默才涉，離微聖凡。共遭罵辱，有時激起平地波瀾。有時刻除參天荆棘，中流一壺昏衢明燭。千古萬古仰高風，巍峩突兀老龍峰。

復庵和尚

者老漢忒殺不近人情，揭卻釋迦腦蓋。擲瞎達磨眼睛，還將千七百公案，打成一箇鐵團圓。當頭與人咬，從教下口難。扶桑夜半金烏翥，笑倒摩霄天目山。

空盡空岩空，幻視幻住幻。神機妙用並馳，露布葛藤等筵。端的驗人，手親眼辨。假使通身鐵打成，擬議被它穿一串。象龍遠趁風，稻麻不足算。如今五彩施大虛，焉知當下自欺謾。白雲長是臥青山，流水從教出寒澗。

再來小釋迦，三世的傳家。魔佛俱空盡，眼中爭著華。幾度人天推不出，法身爛卻老煙霞。

拈出陳年爛葛藤，使人嘗藥嚼寒水。半輪天目山頭月，萬世扶桑國裏燈。牛鼻。

實翁和尚

眉間寶劍當初挂，於雲岩塗毒鼓聲。晚年嗚乎巨福，毫端拈起風舞龍翔。一句全提神號鬼哭，從教西來正宗。灼然歸我掌中，叢林莫謂今寂寞。萬古真風振海東。

高山和尚

行已精嚴兮，水清霜烈。爲人痛快兮，電奔雷驚。誰知靈洞高風別，百億須彌不足爭。

明憲和尚

寒猿嘯枯樹，老鶴立喬松。物外乾坤窄，眼中今古空。調高賞音少，越格亦超宗。西來的傳傑，明覺大禪翁。

虎關和尚

人言再生音尊者，孰與當年遠錄公。誰識東山左邊底，光前絕後振宗風。振宗風有何窮，龍淵支派遍天下。一一收歸海藏中。

一路和尚

做得萬年名山主盟，提起千聖頂額一著。蕩盡桑田家法，流通松源正脈。喝下崖崩石裂，機前電激雷奔。三尺黑虵長在握，擬議遭它一口吞。

夜深落月印寒泉，日暮歸禽破翠煙。脫得真如籠罩去，四稜塌地打安眠。打安眠氣衝天，誰知



淵默雷轟處，了卻通玄未了緣。

石天和尙

瀝乾教海，透禪關，棲雲庵裏，凝寂幽閑，萬古潛谿流不竭，龍淵處處起波瀾。

足庵和尙

是真陸地行舟底，三據名藍震法雷，度盡迷徒知幾許，夢中記前太奇哉，太奇哉，絕疑猜，本自通玄峰頂來。

月江和尙，住獨照遍照兩寺。

神宇爽拔，眉宇古麗，宗通說通，履歸戶外，獨照遍分，籌盈室中，興慈運悲，分老幼悅服，擊邪摧異，兮魔外潛蹤，夫之謂曹源的派遠孫，大雲入室之真子，月江大禪翁者耶。

昔典牛以策禪師，福不逮慧而憂策，曰：學者唯恐己眼不明，己眼若明，雖獨對聖僧喫飯，又何慊焉。於戲策公一言，抓著我老師兄柏巖公痿處，雖然，惜當初叢林閑卻好一箇主盟，如今拜瞻遺像，為之歎息，其高弟儼侍者，請贊，贊曰：

神采爽拔，面孔儼然，已佩佛燈密印，寧忝大覺正傳，胸中掃除毫末，量外包裹大千，冷笑東寺折牀鬧熱，仰慕法昌泥像，因緣有道，聲喧區域，無心出應，人天萬機，泯絕華藏界，一室高眠竹澗邊。

太虛和尙

江上千山雪晴後，樓頭午夜月明初，吾兄面目只這是，何事丹青繪太虛。

義堂和尙

面目嚴冷，神宇玲瓏，學海枯竭，智境掃空，提起金剛王寶劍，是魔是佛可潛踪，夫之謂東山下左邊底，跳窰跨釜的骨孫，義堂老禪翁。

無住和尙

簪纓雄族，宗門英靈，將謂韶光復，鎗彩胡為增發，法燈明似，即不住，住即不，寺驚峯真規，少室妙旨，要看箇老漢全身，且待華開鐵樹春。

一口平吞三世佛，妙高孤頂月，明天應無所住，而常住，大法燈光萬古傳。住妙高。

仲聞和尙

松源遠裔，桑田的孫，遼天閑鼻孔，笑殺鐵崑崙，靈虎山頭高坐斷，凜凜威風振乾坤。

無極和尙

皇室玉葉，金枝叢林，砒霜鴆毒，學海波瀾，渺瀰何曾留元字腳，嗣天龍不寫天龍，果然超宗亦越格，靈龜孤頂太嵯峨，壓斷須彌衝碧落，夫之謂高峯直下的骨孫，佛慈禪師真面目。

頂山和尙

最軟頑時，堅似鐵，到諸訛處，坦如劄，巍巍坐斷士峯頂，下視衆山，眼轉青，自甘敢不為人出，出則教它魔外驚，一榻翛然久淵默，誰聞徧界怒雷轟。

俊翁和尙



俊翁老子吾端友，談笑忘懷歲月深。別去不堪追慕處，忽瞻遺像益傷心。休傷心，玉峰萬古翠千尋。

靈叟和尚住蔣山

面目巉岩器材瑰瑋，一句全提半提。惡聲千里萬里，無明種草新生。佛燈光焰將熾，人言寶公再現蔣山。我道活龍誤下死水，禹門欠雷轟。叢社喪公議，枉把丹青畫太虛。孤風凜凜來未已。

孤峰德長老

松老竹癯水枯霜烈，胸中古今。腳底吳越，列祖重關。七通八達，收拾玄機。退藏於密，烟雲唯可沒半腰。天外孤峯轉崑崙。半身

南光開山觀長老尼

氣壓丈夫，眼空寰宇。手握黑蛇，打風罵雨。圓機無著也，低頭山帶瑞雲千萬古。

昌快大德

參得天龍直指玄，寥寥盡日自安禪。遺芳餘烈有何極，桂子蘭孫億萬年。

前備中太守佐佐木西公禪閣

皇家一十四葉龍胄，武門百萬軍中羽儀。可欽可畏，惟德惟威。忠義精兮貫于日月，英雄氣兮吐乎虹霓。況是圓顛亦方服，佛魔須放一頭低。

妙喜禪尼

夙植信根，心游空門。為功德母，桂子蘭孫。慈容影現鏡中人，虛幻華開劫外春。

自贊

秀格禪人請

大廈高堂我無分，松根石上逞家風。茫茫塵世誰知己，欲去西山問亮公。

聖濟大師請

水中月影華裏春容，畫虎成狸。喚蛇做龍，甜瓜棚上苦胡蘆。德山臨濟皆盧都。

莊福天關長老請。圓相之中半身

幻身不全，神光虛圓。一生甘自韜晦，林泉誰是替吾發靈燄。佛燈再得照人天。

道安侍者請

心光不昧轉團圓，且喜覓安能得安。箇是本來真面目，夜深山月照秋寒。

曇心庵主請

心心心，夜來古月照霜林。禪禪禪，無角鐵牛飛上天。是則真我為鏡像，非則闍梨全老僧。黑蛇三尺閑在手，吞卻乾坤似不曾。

元奇禪門請

清奇閑淡嶺頭雲，奔激潺湲澗底水。老夫無處隱全身，五彩畫空還不似。

慈源大師請

誰將麗妙紫金欄，包裹愚夫赤肉團。恐被傍人看便笑，不如送在舊青山。



日進禪人請

退而忘進，默爾泯玄。寥寥終日，孤榻憐然。生平誓不游人世，只在白雲峰下眠。

宗仁禪門請

丹青繪虛空，全似全不似。身披華袈裟，手握竹篋子。好一箇長老，欲赴來機底。林下癡頑叟，幾時敢得爾。這般大模樣，我儂所深恥。汝今收去勿示人，是乃爲余存道義。

松嶺秀侍者請

咄者衰翁禪也，缺參道也，絕學縱目雲霄。寄身林壑，咸言大覺破家孫。寔是佛燈跨釜子，若何得箇傑秀人。扶起吾宗已湮墜。

翼姪請

似則固似，是則未是。離相離名，非彼非此。歷劫何嘗現全體。

月庵居士請

全身半身，日面月面。鏡上幻塵空，裏閃電。而今老矣歸圖畫，依然早是新羅箭。退藏放癡憨，誰言拒住院。眠雲知幾年，看山長忘倦。我儂活業只恁麼，一生擔板愛自便。

淨仁禪門請

林泉爲家，猿獍作伴。眼中有煙霞，胸次無涯岸。從來智體全不具，宜乎幻影亦缺半。噢，渠是誰也。天地之間，只一箇疎慵癡頑寂翁老漢。

慧鏡禪者請

幻化空身，鏡像水月。百年一夢，終歸變滅。爾儂教我入畫圖，久住煙霞山水窟。

聖玖大師請

視利等塵埃，懼名同桎梏。殘月落遙峰，孤雲老空谷。諸方浩浩說高禪，孰與渠儂伸脚眠。

元杲禪人請

杲日麗天，清風匝地。徧界不藏，面目現在。若非具眼頂門人，如何見得箇全體。

元綸侍者請

這擔版漢，甘老岩叢。一榻默坐，萬緣皆空。聞勸住院言，幾乎洗耳。猶見宗教替爲之，搥胸有時。江湖入夢，夜寒月照短篷。稱意金鱗直鈎上，絲綸掣斷白蘋風。

超曇大德請

參橫月落湖山曉，全露本來清淨身。丹青污卻虛空面，冷地從教笑倒人。笑倒人誰識，真試自威音劫前看，曇華方綻一枝春。

養侍者請。尼、松下坐石

青松爲屋廬，苔石作牀筵。但得佳山水，求居養幻軀。平生深恥被人識，豈料今朝入畫圖。

守顯禪人請

幻真非真，夢境何境。一彈指頃，百年流景。盡十方空，諸聖賢與吾同現鏡中影。

彌天釋侍者請

身披釋服，手掬蛇心。獨步方外，眇視叢林。只貪風高月皎，都忘水寒雲深。這般一箇賸浮圖，古



往今來覓也無。

無相爲真相，無門爲釋門，擬欲尋蹤跡，水中探月痕。畫不成時正好看，全身逼塞盡乾坤。預寄

生編請

高揖釋迦，不拜彌勒，流行也得，坎止也得，一生獨自娛，水聲與山色，莫嫌幻質不完全，且愛眉橫還鼻直。

定巖一侍者請

畫工與我沒腰了，恰似當初立雪僧，只是不曾覓心法，安閑終老得人情。

列岫科侍者請

胸吞雲夢還吐卻，選佛場中占甲科，一句機先會得國師三喚更如何，堪笑山前老農父，被他描畫上凌煙，枯木花開是今日，任教空體不完全。

堅卓禪人請

貪觀瀑泉飛，獨坐盤陀石，絕無人往還，幸免話今昔，一片雲添百衲衣，萬重山點雙眸碧。

龍巖汕長老請

焚香默坐古岩陰，最愛青山深更深，除卻同參木上座，誰知這老此時心。

英顏侍者請半身

古道顏色，今時遺民，一法不存，若何爲人，可憐石鞏閑弓箭，射中三平半箇身。

霜林果侍者請

管甚真常體不全，誰知鼻孔恣遼天，祖庭將謂秋已晚，且喜霜林結果圓。

靈仲英侍者雋彥絕倫，江湖播譽，忽棄平生所嗜，奇知妙解，而來山中，單單只圖洞明自己，厥志良以可嘉也。一日繪余衰質，求贊，余謂曰：願我箇幻化空身，百醜千拙，有何一件可贊底事哉，然尚懇請不已，無奈之何，聊綴二十八閑言，還之云。

衆角叢中得一麟，隈岩老衲慰孤貧，因思歲晚天寒日，少室峰前立雪人。

隣松長老請

咄者老漢，漆桶不快，爲人百醜千拙，渾無一智半解，只圖飽餐安眠，白雲邊青山外，是什麼報緣，幻身不完全，不完全卻周圍，月到中秋光滿天。月夕

荆隱瑣侍者請

咄箇老寂，全無準的，逢貴不寫重璠瑣，遇賤奚亦輕瓦石，得少失多，進寸退尺，獨立天壤，眇視今昔，兩鬢霜寒八十秋，三衣染盡千峰碧，何時手裏黑蛇兒，白日成龍轟霹靂。

了達禪人請位牌

閑名離幻質，隨汝入丹山，挂在壁間看，同居渾一般。

### 永源寂室和尚語錄卷之二終



# 永源寂室和尚語錄卷之三

## 小佛事

飯高山塑觀音像點眼并安座

返聞聞盡盡處亦空，所以根門一一無功，塵塵三昧，刹刹圓通，千江月影，萬卉春容，惟道人久，機巧妙爛，泥團裏寄逸想，唯在手之翻覆際，現出端嚴殊特相，非但人天增瞻仰也。教魔外退，恣嗟，將回紫金山，盍瞬青蓮華，我見大地諸衆生，本來誰不具寶目，錯把色空明暗等，妄自一翳永翳，卻願同大士正法眼，頓獲真觀清淨觀，縱有虛空消殞日，巍巍坐斷飯高山。

中峰業海兩和尚點眼入塔

多子塔前天目山巔，將錯就錯，無傳爲傳，這般沒面目底，即今分座儼然，既是狹路相逢，未免向佗頂門點出金剛眼睛，普同盡十方徧法界，情與無情，放大光明去也。召大衆云：好生觀以筆左邊點云：金烏啄破瑠璃殼，右邊點云：玉兔挨開碧落天。

永源寺觀音點眼安座

補陀圓通大士來也，梵相端嚴，人天敬畏，新開清淨寶目，靈光無處不至，說甚麼冥府幽都，法界皆煌煌煒煒，謂之正法眼藏，亦名大圓鏡智，夫吾大聖薩埵，昔在久遠劫前，從聞思修入三摩地，證百千甚深微妙諸大三昧，所謂大解脫三昧，大寂靜三昧，大智慧三昧，大慈悲三昧，大

旃無畏三昧等是，只爲愍盡大地衆生，雖具足如此三昧，迷妄所蔽，無由現成受用，故迫不獲已，區區而起，把箇晨鐘暮鼓，鴉鳴鵲噪，簷頭雨滴，澗下水聲，傾腸瀝膽，激揚揭示，汝等諸人，爲甚麼恰如塞斷孃生耳根，相似於戲今朝瑞雪滿谿山，無限風光正好看，游徧十方諸國土，不如歸去永安閑。

當麻禪門拈香

處處全在絕塵作，無髮龐翁摩詰流，臺榭寥寥歲云暮，木人石女也生愁，丈夫猛烈漢，全機自不同，不受生死控勒，寧不涅槃羅籠，便與麼承當，鬼子何曾離得窟，任不與麼去，徒弄死蛇爲活龍，畢竟作麼生，昨夜須彌頭倒卓，天明跣跳太虛空。

又佛成道之日

夫以正覺山中見星燦然，歷劫未明事，忽爾得現前，以海印三昧，一印印定，令大地群生頓出蓋纏，不論四生九類，說甚十聖三賢，一味平等，蜜無中邊，幻生幻滅，一來一去，月沈寒水，雲挂青天，如是領略將去，親恩佛德，酬報周圓，其或未然，帶雪梅華初破玉，清香透過竹籬煙。

拈香

大日本國備前州藤野保居住，菩薩戒弟子某，今值亡室某七周忌辰，就于大士山慈廣禪寺，拜屈滿堂清衆，預卜七箇日，取大乘真詮，且繙閱，且繕寫，啓帑揮金，營辦供贖，加以裂冠披緇，方預三寶數，追嚴誠至，可莫大焉，仍命某焚香獻諸聖，說偈作證明者，一向芙蓉城內遊，光陰倏忽七周秋，從教動地悲風起，山自安閑水自流，寂滅現前觸目真，迷情猶自隔重津，崑崙昨



夜奔滄海，撲碎珊瑚月一輪。從此遠離男女相，煌煌煒煒亦堂堂。慚愧德生與有德，飲光熱瞞紫金光者，回不墮千聖轍，揚身那畔行履別，振轉面皮歸去來。塵塵刹刹皆超脫。

道浩禪門拈香

去來無象，恒儼然擬欲追求。隔大千，幾度清風明月夜，黃梅石女哭蒼天。欽焚一瓣兜樓供養三寶勝位，奉為某禪門莊嚴報地者。恭惟靈鑑懸胸，照破生死窠窟。智及在掌，裂開聖凡蓋纏。丈夫須辨丈夫事，妙在神機未兆前。轉轉活潑，切忌劍去刻舡。雪覆千山頂，孤峰聳碧巔。今日臨風聊表信，無根樹子起香煙。

脫叟和尚拈香俗弟請

恭惟某人，父視靈巖，祖智覺，平欺魔佛有來由。蕩盡生涯無折合，當頭坐斷自甘休。三十餘年打孤硬，真機妙用取次收。輪奐寶坊如幻出，住山氣象古為儔。遽拋鋤斧翻筋斗，鶴鶴原冷幾回秋。天倫義重逾山嶽，深恩厚德若何酬。法中復獲為昆弟，雪峯請益老巖頭。年年斯日增追憶，白雲流水空悠悠。

頂山和尚拈香

此香實際理地栽培，大覺海中浸爛。雖然無銖兩，價直踰娑婆。觸之則燎，卻閣梨鐵面門。嗅著則塞，斷納僧閑鼻孔。直得盡虛空徧法界，森羅萬象四聖六凡，情與無情。以至從上佛祖出世度生，唱般涅槃。靡有不稟渠資薰之力。今日伏值頂山和尚小祥之辰，代佗入室真子感鼎諸兄，信手拈來，一蕪蕪卻聊伸真法供養。是為報恩謝德，抑亦復讎雪屈乎。不見道出乎己者，返

於己也。

全戒禪尼拈香

夫以芙蓉城內慣優遊，真淨界中歸去休。滿院落花春過後，從教霧慘又雲愁。生住異滅恰同鏡像與水月，愛別離苦舜若多神墮。淚雨五障三從不勞，一掃空八解六通懷中取。寓物所以龍女早唱無垢正覺，喜見終受靈山記。若是與麼荷負去，謂之女流成就丈夫事業。其脫未然，大洋海底火一星，徧界曇華香拂拂。

蓮阿禪尼拈香

夫以一靈真性，虛徹精明。脫體現成時，動靜無形。去來絕跡，纖毫不存處。彌綸三際，充塞十虛。了了然常在，鑑覺之先。玄玄乎迥出思議之外，強名本地風光。本來面目，亦謂正法眼藏。涅槃妙心，背之則曠劫漂沈，合之則剎那超越。是故愛道先受記，前靈山會上。龍女始成正覺，無垢界中。彼既丈夫，吾寧不爾。直下領略，切莫遲疑。五障三從，喻如昨夢。脫出愛別離苦，娉婷芙蓉。新綻泥裏，照破生住異滅。清涼寶月高懸，秋空不昧。正因頓圓，種智塵塵刹刹。大用現前，只將沈水一爐煙，奉獻十方諸聖賢。即今莫惜運神足，請與證明臨法筵。

東禪巨舟和尚

遠駕鯨波，歷大方。魔宮虎穴，任行藏。一棹東歸三十白，聲名藉藉滿扶桑。某人象骨峯前得轉身，句子三喚聲裏見藏珠。自彰掀翻海嶽空，索索賞音獨有箇。曾郎眼目人天時，龍象易辨。睥睨湖海處，氣宇難量。寧無法幢倒而復立，當教佛燈滅而重光。惜雖兩提鋤斧，無由大試鋒鋦。



應世緣云畢，忽爾一周霜，徧界大人相，巍巍亦煌煌。明月上芝嶠，清風撼松岡。木人拊掌歌笑，石女攢眉悲傷。光也不佞，忝嗣遺芳。昔日兄呼弟應，今朝義斷情忘。鷲籬跳竈，知多少替彼聊供一炷香。

又

此香萬化大本，群有靈根，鬱然威音劫前。卓爾實際理地，離名離相，絕榮絕枯，倒抽不萌枝，強號無影樹，浸爛華藏海中。突出涅槃岸上，遭孟八郎漢截作三段來，雖無一點芬馥之氣息，還逾五分法身之薰聞。今朝臨風一蕪蕪，卻非獨驗過諸聖鼻孔，專用奉獻吾巨舟師兄，切冀享是真法供養，插香云，咦，不見道，有伴即來。

預脩

日本國遠州路河村莊居住，實心禪尼。今月十三日，謹發誠心，就子龍壽山永安禪院施淨財，設精饌，預脩歿後冥福。其志頗以可嘉也。竊念三毒熾熾，三塗苦報易招，五欲海深，五障淪溺，難免大凡多劫罪累，未由懺除。雖徒懷慚惶，無處陳哀悃，仰願三世十方諸佛菩薩諸賢聖等，不惜慈悲，降臨道場，且爲證明，且賜加被，專冀實心禪尼壽報百年後，厭世緣時，不復墮女流，常得生淨界，菩提心而不退，般若智以現前，提挈河沙含靈，同證無上妙果者。

自從一惑於真性，荏苒各繫乎幻業，蠢蠢六趣與四生，昇沈疲極百千劫，偉哉猛烈女道人，誓向今生度此身。一日命佗清淨衆，頓寫靈山九會文，須信經王勝妙德，來報七分獲，全得華嚴本是海龍兒，無垢界中成正覺，將謂同途不同轍，元來無二亦無別，菡萏華開三四枝，遍法界。

中香拂拂

見公禪門拈香

一度興悲風樹邊，既成三十有三年，不知今日是何日，鐵眼銅睛淚潸然。某人歷劫到今，隨迷逐妄，改頭換面，輪轉諸趣，而乃爺孃形生之本，彌綸三際，充塞十方。假使分身微塵刹土，嚴修恒沙善因，安獲報答，劬勞萬分之一，惟除心源廓徹，當念消融，腳跟下一著卒地折，曝地斷見生死相，猶如空裏繫風，往涅槃心，同水中捉月，是故寧有一法當情，本無三界可出，初中後善徒設，羊鹿牛車空馳，便與麼承當去，罔極深恩，一時齋畢，其或未然，未曾點筆前看取，菡萏華開徧界香。

中峰和尚

天目名山倒卓頭，佛魔驚怖鬼神愁。剎那三十有三白，師子巖前月照秋。恭惟某人，亞聖大人，間出季世，運慈利物，勉乘願輪，生知現前，全機活脫，翻身拶透，乃師死關，方寸之中，平吞夫若，須彌若渤澥者八九一毫頭上，揭開恒河沙數甚深微妙義門，宗通說通，該盡法界，道富德富，充塞乾坤，佛祖已來，今古之下，應當求此於無業，永明大珠，忠國師伯仲之間耶。縱使借萬象以爲舌，今去稽首讚揚，連綿不絕，從劫到劫，猶恐百千億分，不敢及其一分也。於戲已矣，香煙一縷，淚千絲，大法主盟其復誰。

道善禪門拈香

於戲夾截虛空，成兩片，森羅萬象哭聲連，就中擬覓去來跡，獨腳烏龜飛上天。某人志氣貫虹



蛻操履潔冰雪處鄉黨則溥輸和睦之誠事君家則固持至忠之節移居近蘭若樂聞鐘梵以鄙絲竹之聲隨僧陪禪牀耽嗜素饌而忘芻豢之味不出塵中辨出塵事譬如芙蓉開淤泥裏濁世安能忍久住攢眉常自暗嗟嗟浮世五十有二年只將一夢寄華胥此夢俄然驚起撒手浩歌歸歎遮莫雲愁霧慘也青山依舊體如如。

特峰和尚拈香

恭惟某人佛通的傳英裔大福中興主盟提唱宗乘也雷馳電激崖崩石裂居常懷抱也冰枯霜烈雲閑水清咸謂龍淵復興波浪慧日重增高明自從一回假示生滅之相至今雲愁霧慘鬼哭神驚老拙昔年俱在巨福山中肩摩衫屬風前月下同坐同行悔不與他道著末後句今日狹路相逢不免借水獻華去插香云沈水一爐茶一盞黃梅時節雨慳晴。

川庵濟禪門拈香

風樹葉飛三見秋忽驚光景疾如流法身眠熟呼不起江上青山也著愁夫以幻妄境中有生有死實際理地無去無來只獲一念頓空了枯體頂門活眼開便見傾湫倒嶽地轉天旋全機瞥脫寂滅現前只要與麼信得及大家不用哭蒼天。

了道禪門拈香

世間之人雖知有生死懼生死者鮮矣終日擾擾役役繫于塵網虛度歲月全不顧前程大有事在忽爾臘月三十日到來則方始驚窘悼惶無處頓手脚宛與不知有生死者無以少異也可憐愍者耶播州道公禪門獨懼生死之人何以知之其平生區區究志至誠預修歿後之善

因昨已寄信命老僧營辦卒哭之佛事今又請作小祥之功德老僧嘉嘆久之仍唱伽陀以聊加讚揚云若教一念空三際便是吾門活脫人昔日不生今不死金剛正體本來身。

淨霑大師拈香

日本國遠州路濱松莊居住菩薩戒弟子義俊今月二十日茲遇亡女比丘尼淨霑小祥之忌辰得得遠來就于永源精舍揮金辦供拜命闔山清衆奉繕寫妙蓮經一部尋命山野焚此寶香供養十方婆伽梵法界賢聖衆所鳩善因專冀淨霑頓脫多劫輪回苦因速證諸佛清淨妙果者耶。

夫以人生處世其親在則晨夕不離左右靡憚勞苦罄其侍奉之誠及乎其亡則或廬墓畔持服三年若是出家之士固守心喪勤苦煉行不限歲月而薦冥福謂之孝終者也於戲幽靈落髮披衣遊方之日多承顏之時少素念參禪學道見性明心庶幾報酬劬勞之恩爭奈志願雖大力用未充一旦無常遽至蘊志永逝悲夫重願惟靈生生如尼總持得達磨印證世世同大愛道受世尊記前幻妄境內有生滅真淨界中無去來萬古秋空一輪月清光夜夜照高臺。

鈍庵和尚

自從到得休歇地世外棲遲四十年祖道任教都爛卻臥雲深處打安眠某人透玄關旨早應覺雄聲前三呼遊大鑑門首領真淨堂中一衆險崖句流出胸襟撥天名雷鳴海上衰拙昔年追陪杖履吳頭楚尾江西湖南伊余倦遊歸隱桑梓殘山剩水茅屋石田邇來隣壁分光共嘆歲晚佳會遽爾棄我長逝無奈老淚難收然雖與麼涅槃後有大人相澤山巍巍摩蒼蒼不堪



義斷情忘處，插此兜樓一片香。

為洞禪人下火

洞然明白，是箇何物，擬議不來，七華八裂，畢竟如何，火中紙馬，嚙生鐵。

密庵主下火

豎拳消息，無人會門掩，煙蘿幾度秋，一夜虛空消殞了，須彌頂上，鞞華毬，草露沍沍，風蕉片片，唯一堅密身，一切塵中現，向上更有轉身一路在，以火把打圓相云，石火電光一見便見。

西祖頂山和尚

西祖已踰葱嶺行，虛空消殞須彌倒，山河大地起悲風，夜半扶桑日杲杲，某人玄機妙用佛祖，窺覷無門，潛德幽光，魔外伏膺有分，一生擔版，三處住山，滅卻通玄正傳，掃蕩瑞龍活計，門庭孤峻，具瞻古格叢林，規矩森嚴，堪革今時途轍，一周事畢，管爾翻身，拳倒涅槃城，踢翻生死窟，更有末後一句分付諸人，還會得麼，看看紅爐飛片雪，丙丁童子面門寒。

蘊上座下火

五蘊非有四大本空，泥牛夜吼澄潭月，木馬時嘶碧落風，只如亡僧面前觸目菩提，且作麼生和會，以火把打圓相云，其或未委悉，大家問取丙丁童。

省院主

幻境忽省，大夢俄寤，葉落歸根，金風體露，既是初秋夏末，須向萬里無寸草處，別求活路，雖然與麼，院主借取眉毛好，何故木佛不渡火。

道善禪門

不思善，不思惡，面目分明，瞥地去，瞥地來，全機獨脫，偉哉猛烈大丈夫，生死牢關當下拔，既出真俗羅籠，寧墮聖凡途轍，正與麼時，那裏是佗真歸處，紅爐焰上飛片雪。

伊大師燈節日

一夜須彌打筋斗，驚虛空起皺雙眉，從教明月照海嶠，爭奈悲風動地吹某人，四十六年借路人間，惟道惟勉，藥苦水寒，坐斷末山，不露頂，寧居鐵磨，牴牾牛欄，說甚伊字三點，拶透向上一關，是則是，豎起火把云，更有末後句子，切須理會始得，其或未然，問取燈王古佛看。

明應大師

一念與道相應時，堪做吾家真種草，瀉山門下老牯牛，法華會上大愛道，當頭拔卻生死關，直下掀翻涅槃窟，末後句子又如何，烈焰堆中一片雪。

鏘侍者

三呼三應，金石鏘鏘，末後一句，徧界不藏，只如毀犯聖制，破夏行腳，果有出生入死，超宗越格分也無，舉火把召大衆云，看看火中茵茵吐馨香。

慈慶禪尼預請

風前薤露易晞墜，岸樹井藤良險哉，五十六年惟一夢，任教殘月照西臺，某人受生業繫，暫處女士輩流，是其天資甚踰，丈夫志氣，舊守三從，勞服勤，忽驚五障難迴避，毀形既厠六和衆，旋踵須昇諸聖位，染疾歲云深，奄息時將至，四大空身有去有來，一靈真性不變不異，拈起火把。



云大衆還見得麼金剛正體鎮長存劫火幾回燒海底。

稜猛庵主結夏日

不辜捨俗歸真志，猛烈工夫已十成。失脚踢翻生死窟，放身靠倒涅槃城。某人夙生知有箇事，頂門具活眼睛，百千法門即時蕩盡。七十六歲幻夢忽驚，萬里渾無雲一點。參州只是月孤明，以火把打圓相，諸人高著眼看，安居禁足蠟人冰，卻踏紅爐焰上行。

爲靈叟和尚入塔

佛燈滅卻瞎驢邊，知是無明得的傳。慚媿頂門正法眼，空餘夜月照青天。恭惟某人，誤入長勝籌室，喫著痛拳，從此喪盡命根，露些風骨，出言吐氣，處處格超宗，揚眉瞬目，時截釘斬鐵，南詢歷盡二十年，勘過諸方老古錐，便見大唐國裏，只是有禪無師，還向巨福山中，平分風月，宏開萬壽爐，鑄鍛鍊聖凡，橫拈倒用，星飛電卷，真操實行，冰潔霜嚴，太古正音，和者寡，調轉無生，七見春末後，一句淵默雷轟，直至如今，疑殺幾人，一義同心，山缺高兮海缺深，兄弟十字，無限清風來未已，者箇是某人，一平生受用不盡底三昧，即今卻要知真歸處麼，未免重通箇消息去，流水潺潺一谿曲，白雲長鎖碧層巒，湘南潭北黃金國，不似自家田地間。

心庵主入塔舊爲明禪檀那

不昧正因，心華開發，立大基業，爲法檀越，豎起拳處，打破生死牢關，低頭歸時，領略故家風月，釋迦腦蓋，達磨眼睛，畢竟是箇什麼，閑鬼骨，空留三尺浮屠兒，千古萬古峭巍巍。

覺真禪門入塔

出生入死，兩俱空名，離真除妄，也是何物，浮屠三尺礙須彌，虛空拶出黃金骨。

頂山和尚入塔

千聖頂顛骨氣別，當陽突出好生觀，大士峰前全體現，層層落落影團團，正與麼時莫是本寺，開山頂山和尚還家穩坐底消息麼，依稀華藏甚深海，髣髴妙高不動山。

### 說

松巖說

作陽操禪人從予遊久矣，一日需安別稱，故取松巖爲號，渠亦請聞其說，且與語之曰，從上參學之士，先固信根而深究道本，志氣高衝霄漢，不憂不入時人意，雖嘗盡霜雪之苦，終難改歲寒之姿，然後立處孤危，八面玲瓏，鳥道玄路，假使佛祖只斫額而仰望耳，當其垂一機示一境，或濟北巨樹榜樣後世，無限蔭涼清風未已，或雙峰山前，鈍鏗頭邊，忽爾打翻筋斗，再來不直半錢，或鳥含華落，錯下名言，教人作境會，閑過二十年，或振威一喝，崖崩石裂，青天迅雷掩耳不及，汝勉勵力行遠攀，先哲勝躅，乃希顏者顏之徒也，正宜不負所以予命子之旨，庶幾名實相當乎，時有管城翁，在旁起歌曰，鶴唳喬枝猿叫落，月山撼夜濤，瀑飛晴雪，名耶實耶，天風瑟瑟。

材翁說

夫非良木者，無由締構大厦，是美器而可庸庶，幾先修，昔臨濟在黃檗，栽培寸青，漸成巨樹，蔭涼宇宙，標榜叢林，自爾以降，分苗連根，殆不知其幾千萬章，不施繩墨，不勞斧斤，長短方圓自



然中度是以競。劫洪基宏開戶牖充塞天壤之間。後來獨有石霜慈明老人。頗具破家散宅手段。數領院事不動一椽。然後勃然而興。臨濟之將仆。其十有二世。不肖遠孫。我燈佛先師。是法門梁棟。天下宗匠。只以一平生罵佛呵祖。口業所招。如今門庭冷落。死灰悲夫。駿陽梁姪。天資英敏。亦老成也。薄有起家之才。宜乎足庵取材翁二字。爲之別稱。唯望勤業勵行。扶立保社。要令其實不愧其名也。勉旃勉旃。

無住說

關西本姪。來需別稱。爲寫無住二字。還之。渠亦欲聞其說。予謂之曰。莫是從無住本立一切法也麼。莫是應無所住而生其心也麼。莫是有佛處不得留。無佛處急走過也麼。總不是者。般底道理。爾而今只向父母未生前。猛著精彩。體究久之。名相雙泯。人法兩空。三際平沈。十虛消殞。那時方見無住之義。忽爾現前。思之。

道山說

一日有客謂余曰。吾抱參道之志。有年於茲。而復賦性愛山。雖棲遲易地。皆不離山。所以縱目而觀。則疊障列屏。層巒潑黛。白雲抱幽石。赤日下高岩。全是道也。側耳而聽。則谿流漱玉。松籟翻濤。寒猿嘯深崖。老樵歌空谷。也是道也。今既頗覺境智冥合。物我雙忘。方知道本不在山。山亦何離道。追思古人云。平常心是道。又云。無心是道。或云。牆外底及透。長安豈止外邊打之邊者哉。時古濃河邊大昌主翁信公。從余需偈乎道山雅號。余竊矣。不辨平仄之久。借客語寫以塞其請云。

別禪說

正燈庵主。一日從予需安道號。因寫別禪二字。請其請。時有一驅鳥侍。旁研墨。乃問曰。既是別禪。想非四七二三稟承。將來底不立文字等禪。未審甚麼禪。余笑曰。今日是延文己亥臘月二十五。

授庵說

相陽傳姪。一夏與余掌庫務於飯高山庵。執爨負春。區區賤役。無事不辦。甚感有志斯道矣。解制後。且辭參方。亦需別稱。仍號授庵。爾此去看山。翫水。游州獵縣之時。勿忘自己大事。因緣切著。眼看佛佛授手。祖祖相傳底。是什麼邊事。忽爾蹉腳踏得到底。方是名實所當。至屬至屬。

及庵說

古播信姪。訪余近江石塔客居。需安別稱之次。從容語曰。我師太虛既歿。而慘怛未已。尋亦喪母。忽省無始以來。業繫受身。展轉昇沈。三有界內。喫盡無量艱辛。若不今日截斷生死根源。則極未來際。靡有超脫之日也。況我濫廁空門。十有餘年。而於此道。全無些子入頭之處。唯是波波挈挈。徒閱涼燠。實自慚自愧而已。乃歸故里。就樹縛屋。終日掩關。休罷萬機。把做一件。靠取一則無義味話頭。默默參究。依舊肚裏疑團。黑漫漫地。無奈之何。云云。予謂云。汝今如此信得及。真箇難得也。斯志久遠不退。安患弗獲辨明己事。古人得旨之後。猶拂衣遠引。韜晦岩谷。一生與世邈如。纔見人參扣。卻不獲已。或豎起空拳。或門上書字。或云谿深杓柄長。這般高風逸韻。皆從最初信得及之上。流出將來。至今照映天壤之間。予號汝及庵。意豈非在茲耶。



劍關說

演祖頌趙州無字曰趙州露刃劍寒霜光熾熾更擬問如何分身成兩段性禪者求安別稱因號劍關汝由今而後放捨諸緣把做一件孜孜兀兀參箇無字一旦知解忘能所泯伎倆盡撞翻關楔子非惟割斷生死魔網亦須勦絕佛祖命根謂之不動干戈坐致太平云

直前說

少林云直指人心見性成佛淨名亦云直心是道場皆俯應時宜枉順人情豈翹七曲八曲而已哉縱使有佛處不得住無佛處急走過奔流度及疾熾過風遼鶴三千溟鵬九萬杳出羅籠超脫窠臼揚身那畔別立生涯若約衲僧門下正是癡獸漢也倘若在這裏著得一隻頂門眼須令鐵磨總持之輩向背後叉手耳大抵如今學道之人不能一往直前違得入手多在一機一境之上做途路活計如是踈跟如是躊躇所以未肯歸家穩坐實可憐愍者哉鏡邸接待庵主端大師需別稱因號直前寫此以爲其說云

定巖說

古人晦跡岩間與世邈如只專以禪寂將爲樂矣所以孤猿叫月無聞亂耳之聲幽鳥銜華不見遮眼之色若斯三二十年一旦厥道顯著紫詔入雲出做人天導師者有之或亦誓不下石室煨芋充饑編草爲衣樵汲之外宴坐靜默泯泯待終者有之然其高風逸韻尙鳴詔渡于百世之下咸是靡有不從那伽定之中得來者予賢姪字一與予作林下之遊久矣需別稱因號定巖略示其說耳

南雲說

予昔游豫章舟泊滕王閣下有一少年梢工扣舷朗誦王勃記詞者予蓬窻起坐終宵側聽私增感激良足以想見騷人墨客幽致雅韻耳嗟乎俛仰之頃既逾三紀今視鈍庵老兄與神足棟禪大書南雲二字而爲其別稱乃覺西山南浦歷爾聚乎毫端朝雲暮雨宛然在於眼底焉

高原說

太元至治壬戌春游袁之南源見方丈扁榜曰水出高原蓋取慈明禪師住此山日有僧問如何是佛答云水出高原之意耶備陽長福妙老不憚跋涉來訪于飯高巖居留信宿而去其志可嘉臨別需別稱號之高原切希參究慈明垂示之旨徹其源底恐是名實斷當焉

彌天說

東晉安公僧中之龍德名俱高靡有出其右者故自稱彌天釋道安良有以也如今釋侍者樹彌天用爲別號且喜吾門復獲希顏慕蘭之徒也

雪懷說

昔王子猷雪中乘舟訪子戴安道幽居未到其處乃回棹人問其故云乘興來興盡歸蓋參禪行腳亦復如是若途中忽爾有洗面摸著鼻孔底時節何必用宗師面前承言接氣問如之若何也哉猷侍者需別稱因號曰雪懷迅筆亂道贈之云

霜林說

果侍者別稱霜林蓋霜也青冥露結積久凝白濃清林也衆木叢生經年蔭涼高大人也德足



道優而後必成名器，一朝霜露果熟，人天推轂，扶起叢林凋殘之秋，方始不孤。余所以號爾霜林之旨焉。

快翁說

若論此事，則棒頭明旨，早是鈍鳥棲蘆，喝下轉機，不免困魚止澗，所以高亭隔江，橫趨南泉，拂袖便行，其遲豈翅七刻八刻矣哉！且問快翁禪伯，作麼生是伶俐衲僧分上事？汝向未開口已前，下得一轉語，名不浪得也。

石礪說

余性喜遊山水之間，一日飯罷，拉同志兩三輩，入屋後山，從樵徑行殆乎數里，松風吹耳，空翠濕衣，忽見一洞壑，幽邃崕呀，陰風凜凜，老木交枝，古藤垂蔓，兩崖對峙，如側翠屏，中有巨石，高丈餘計，屹然特立，若削青鐵，硤礪碣怪，奇可觀，潤澤被物，草木華滋，谿山明媚，蓋疑內含美玉，而乃致然乎！下有礪泉，色似按藍，泓然漱澗，爛雲根，瞪目俯臨，令人心寒股慄而已。亦恐有靈物，蜿蜒於茲歟！余聊有感懷，即謂同志曰：坐吾語汝，古隱士覓揖塵世，遠尋雲山，棲遲空谷之中，考槃寒谿之上，守志堅確，天翻地覆，不移不轉，心源淵深，歲積月累，彌清彌澄，唯羞世人知住處，亦恐聲名流江湖，而今回觀石礪，與古隱士之道貌，頗相逼似也。汝意謂何如？同志拂袂起笑曰：老夫實耄耶！若但謂酷愛彼石礪，天生清絕佳致，則良以可也。引古隱逸，偷庸比倫，何其言之訛，彼如是，豈復非好事者哉！余失所對，赧面而休，夕陽已懸，木末相呼而歸，翌旦泉姪來相訪，淪茗同啜，次話及乃事，泉云：或號吾石礪，靡識所由，正欲來從老夫而聞其說，幸

希記山中所見所語，在石礪字尾矣。余曰：前所言者，是同志所捨，汝用是奚爲？泉云：彼已非我，我亦非彼，彼我各異，用捨寧同，余不獲已，援毫書贈云。

可庭說

老拙疇昔遊于元朝，度夏姑蘇虎丘，一夕竊出堂外，經行千人石上，時一方明月白如秋霜，忽爾追憶古人獨立齊腰雪，覓法艱難之至，嗚呼！倒指今既逾於三紀，荏苒光景，惟如一日，尾陽方侍者來，需別稱爲號，可庭，聊記舊事，以書厥尾云。

越谿說

吾子秀格年未甫，志學來入余室，忘身服勤，須臾不離左右，已逾一紀，余住庵所在，動不下三十餘輩，渠醇以卒歲之計爲懷耳，所以幹蠱周旋，無功不辨，然而無矜伐之色，口絕勞苦之言，只疾世情之爛似泥，圖吾道貌清如水而已。一日袖紙需別稱，因號越谿者，蓋越之若耶谿，天下勝槩，自晉宋至今，名賢才子詩僧騷客，以一不游於此而爲恨耳，是以此地之譽，直與天爭高矣哉！汝欲不教實愧名，當宜勵志進修，悟證淵冲，卓絕常流，日達玄奧，若川之方增，濬大法之根源，紹吾宗之正派，馳名乎百世之下，豈不偉也哉！

書簡

答倫上人

久不致起居之問，無勝慚惶之至，忽領慈誨，審道體佳勝，欣慰無量，前既見惠一花五葉，山中